THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿六年　第七號

第二百六十八號

中學世界

七月號

正價金貳拾錢　郵税一冊二錢

■懸賞應募論文當選披露
浮田、新渡戸兩博士、島田三郎、安藤太郎、根本正諸氏選評

■歴史小説 西郷隆盛　塚原澁柿

◉努力　文學博士 村上專精
◉予の學生時代　侯爵 小村壽太郎
◉黒潮の話　理學博士 横山又次郎

■千曲川のスケッチ　島崎藤村

◉動物進化の不可思議　理學博士 石川千代松
◉昔の旅行事情　文學博士 吉田東伍
◉野宿と强壯術　醫學博士 二木謙三

■健實の勉强法　法學博士 上杉愼吉

學界二十名家 投票募集

■東京市本町□ 博文館 □振替東京二〇四番■

簾下緑蔭の好伴侶

文藝倶楽部

七月一日發行 第拾七巻第九號 正價貳拾五錢 稅二錢半

◎温泉場行の酌婦 春生

◎奇なる盂蘭盆 有線山人

◎水の上の仕事 吾泉園

◎演藝當座帳 鬼太郎

■笹色紅（長篇小説） 泉鏡花

■書寐（滑稽小説） 黒田湖山

■新作所作事 朝比奈（七月市村座興行） 岡村柿紅

■怪傑 林彌三郎（新講談） 田邊南龍

◎新流行 燕雨

◎靜岡茶 待宵花

◎鈴ケ森髑髏塚 胡蝶園

◎東京食品名物沿革 岡本霞城

■演藝界！

▽懸賞俳句！

■

▽落語……

▽巻頭口繪……精彩木版

▽寫眞口繪……全國美妓

■

▽募集落語……

■

▽繪探し新題！

■活社會！

（東京）博文館（本町）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

偉人研究第一篇

織田信長

菊判二百廿餘頁 箱入美装 正價金一圓 送料八錢

二十三名家評論

信長の二長所……黒板勝美
時勢より見たる信長…久米邦武
信長の自計力……河野廣中
戰術家としての信長…川住鋥三郎
桶狭間の襲撃
信長と中國征伐……瀨川秀雄
地理より見たる信長…竹越與三郎
信長の移城と外交…渡邊世祐
日本美術と信長……正木直彦
信長と時代と其性格…大町桂月
和歌に現ばれたる信長…佐々木信綱
隙間數への大將……幸田露伴
織田姓氏論……田中義成
信長八面觀……山路愛山
信長一般論……大森金五郎
信長と耶蘇教……村上直次郎
信長公の評に就て……横井古城
織田信長と佛教…辻善之助
信長の人生觀……小川煙村
信長我觀……長谷川泰
信長公早世の評…小瀨甫庵
信長是非論……新井白石
信長傳……賴山陽
信長と三河武士…太田錦城

應仁以來の兵亂は元龜天正に到つて其最高潮を示す此時に當り群雄四方に起り諸豪踵を接して現はる就中第一人物は織田信長公とす軍人としても政治家としても彼れは戰國時代の征服者たる實力を備ふ運命の寵兒秀吉の如きは此主公の顰を習ひしのみ世人秀吉の英雄たるを知つて信長の之に優る偉人物なるを知る者尠し本書は信長の性格、思想、事蹟、政治、軍略、境遇、運命其他の各方面に就き專門家二十餘名の說を集めし良書なり之れ信長の全面を描く者にして併せて日本歷史中の最も興味多き一部分を解說したる一大史籍也雄大の感趣味の情津々として湧くが如し

發兌 日本橋三代町 隆文堂書店

賣捌 東京神田 三省堂書店

[illegible]店舗及卑猥なる賣品の[illegible]は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

特別懸賞文募集

文章世界

七月一日發行　第九號　正價廿錢　郵税二錢

□文人分布系統圖　孫悟空

□新文章論（第五）　島村抱月

□眞に文章を學ばんとする者に　内田魯庵

◎當今の翻譯家（月旦）　杜の人

◎文壇新人國記　黑頭巾

◎歸朝の後（小說）　田山花袋

◎穽（翻譯長篇小說）　ゴンクウル

◎當今の文章家（月旦）　天王星

◎河岸の家より　島崎藤村

◎新發想論　岩野泡鳴

◎中央文壇の雜誌記者　東風野人

◎魂祭十句　内藤鳴雪

◎新著四種評　島崎藤村、宮本和吉、千葉江東、小山内薰

東京市日本橋區本町　博文館　振替東京二百四十番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

故文學博士 藤岡作太郎著

文學博士 芳賀矢一
文學士 藤井乙男 共編

東圃遺稿

（最新刊）

菊判美製
箱入全一冊

正價金壹圓五拾錢
郵税金拾貳錢

■國學史、日本評論史、國文學と風俗■

故文學博士藤岡東圃は一代の學者なり、その生前に公にせられたる著書甚だ尠からざるが、なほ筐底に藏して鉛槧に附せざるものも多しとなす、人はいふ、國文學全史平安朝篇一卷は渠が古今を通じて國文學界稀に見る巨人としての地位を確立せしめて遺憾なきものなりと、固よりなり、然れどもその後その前に成れるものもまた大に見るべきものなくんばあらず、いなその後のものこそ愈々驚くべけれ、いな生涯の研究首尾一貫有機的に發展したるを思へば、渠の事業を窺はんとするもの決してその一を取つてその他を捨つべからず、今やまづ國學史、日本評論史、國文學と風俗の三種を輯めて一卷を出す、蓋し明治辛亥の出版界本書を得て始めて刮目して見るべきものあるを知るなり、幸に購讀の榮を給へ。

■【無料進呈】圖書總目錄 萬年筆目錄 申越あれ■

東京日本橋角 **大倉書店** 振替貯金二三八番 賣捌各書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

千勝義重先生校註 三六判凡五百頁天金付頗美麗装釘函入 正價九拾錢 送料六錢

再版 和譯

蒙求

蒙求は支那唐代の李翰が廣く故事を選輯して童蒙に便したるものにて而も此和譯は今より七百年前即ち後鳥羽天皇時代に成れる筆路流暢多趣味の名著今や數種の珍本に據りて校訂を施され特に原文對照以て讀誦玩味の便を計れるが故に取つて之を北窓淨机の上に繙き或は以て緑蔭薫風の林上に開かば自ら是れ銷夏の好伴侶たらん!!

岡谷繁實先生著

袖珍名將言行録

全拾册各六拾錢 送料六錢

文學士内海弘藏先生著

文章十講

正價壹圓廿錢 送料拾貳錢

大隈伯社會觀

正價壹圓卅錢 送料拾貳錢

野上、野文、水島三文學士共編

和英作文辭典

正價六拾五錢 送料六錢

最新刊 大好評

森林生活

米國トロー氏原著 文學士水島耕一郎先生譯

山縣五十雄先生原著者評傳 リーチ書伯口繪

四六判紋帳日クロース頗美本 六百頁餘畫入正價壹圓貳拾錢 特價壹圓 送料拾貳錢

本書は無用の苦痛多き現代生活に對する絶好の解毒劑也!

トローは哲學者たり博物學者たり農人たり漁夫たり詩人たり鉛筆製造人たり文學者たり測量師たり其日稼ぎの日傭人足たり――而して彼は煩雜にして虚僞多き現代生活に飽き一挺の斧を携へて森林に遯れ自ら家を造り食を調へ以て現代生活の眞髓を指摘して無上の樂地を教ふ新時代に生活する者の第一の聖書也

東京本郷區森川町 振替一九四六七番 **文成社** 電話下谷三〇一一番 電話下谷三二一〇番

信用なき店舗及卑猥なる實品の廣告掲載は謝絶す

中央公論第二十六年第七號目次

▲公論

內閣更迭論
國富の增加に鋭意せよ
帝都燈界の革新 …………社論…………一

救濟事業 目下の急務は愼其始にあり …………法學博士 小河滋次郎…………一一

政局私觀…………池邊吉太郎…………二六

妄りに社會政策を採るべからず…………鎌田榮吉…………二九

歷史思想の三大流…………文學博士 久米邦武…………三六

▲說苑

數奇傳…………田岡嶺雲…………四七

新領土の夏

朝鮮の夏…………古谷久綱…………六七

樺太の夏…………志賀重昂…………七九

臺灣の夏…………大島久滿次…………八一

水菓子…………黑頭巾…………八四

島村抱月論

島村抱月氏……正宗白鳥……九五
島村抱月論……阿部次郎……九六
文才よりも學才の人……生田長江……九八
文壇の外務大臣……上司小剣……一〇〇
島村抱月論……安倍能成……一〇一
文藝委員として適當な人……中島孤島……一〇三
立派な紳士……佐々醒雪……一〇五
アイ、アイイラッシ、アネクドート……中村星湖……一〇五
島村君に就て……森林太郎……一〇六
抱月氏……德田秋聲……一〇七
聰明な人……內田魯庵……一〇八

▲創作

春から秋まで……眞山青果……一一一
出京……德田秋聲……一四三

▲詞藻

和歌……尾上柴舟選……一五七
俳句……高田蝶衣選……一六三

▲評論

佛國政界小觀外六件……懷砂隱客……一六六

▲雜俎

金棒秘記……饒舌子……一七〇
新刊批評數件……一七二



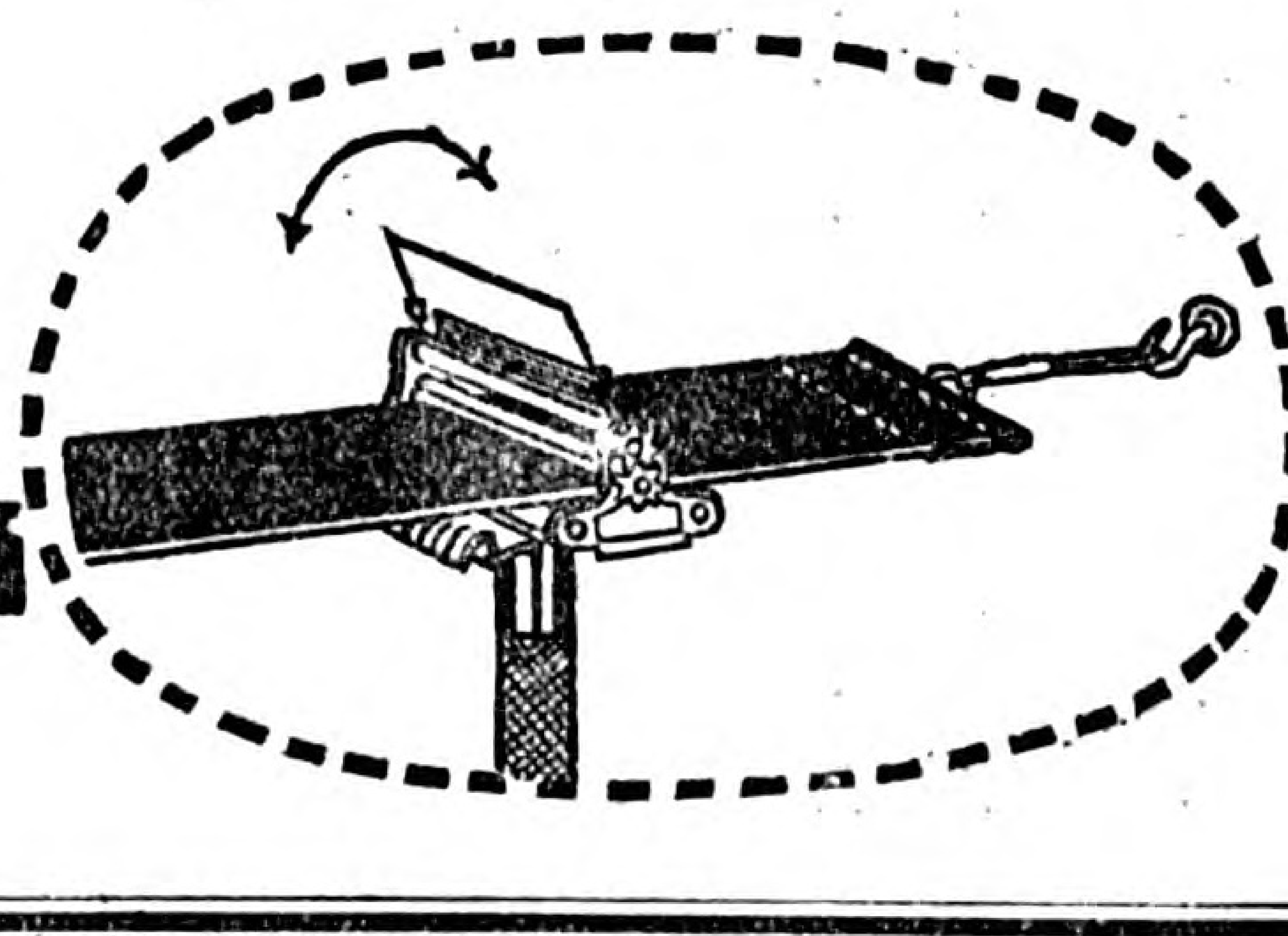
夏は髯を剃るのが第一の衛生

汗が出る脂肪が滲む、髯が生へてると目に見えぬ塵が粘り着く、黴菌の巣となる、**毎日髯を剃らないとツイ不潔に**なる意外な病氣にならぬとも限らぬ、**第一髯を剃つた時の心持のよき一段と涼しくなる**

之れからは此オートストラップが何よりも必要になる、此自動研ぎ安全剃刀さへあれば毎日此の例へやうのない**爽快な心持**になる事が出來る、オートストラップを買ひ玉へや、新らしき文明の諸君は

オートストラップ自動研ぎ安全剃刀
換刃十二枚及革砥付

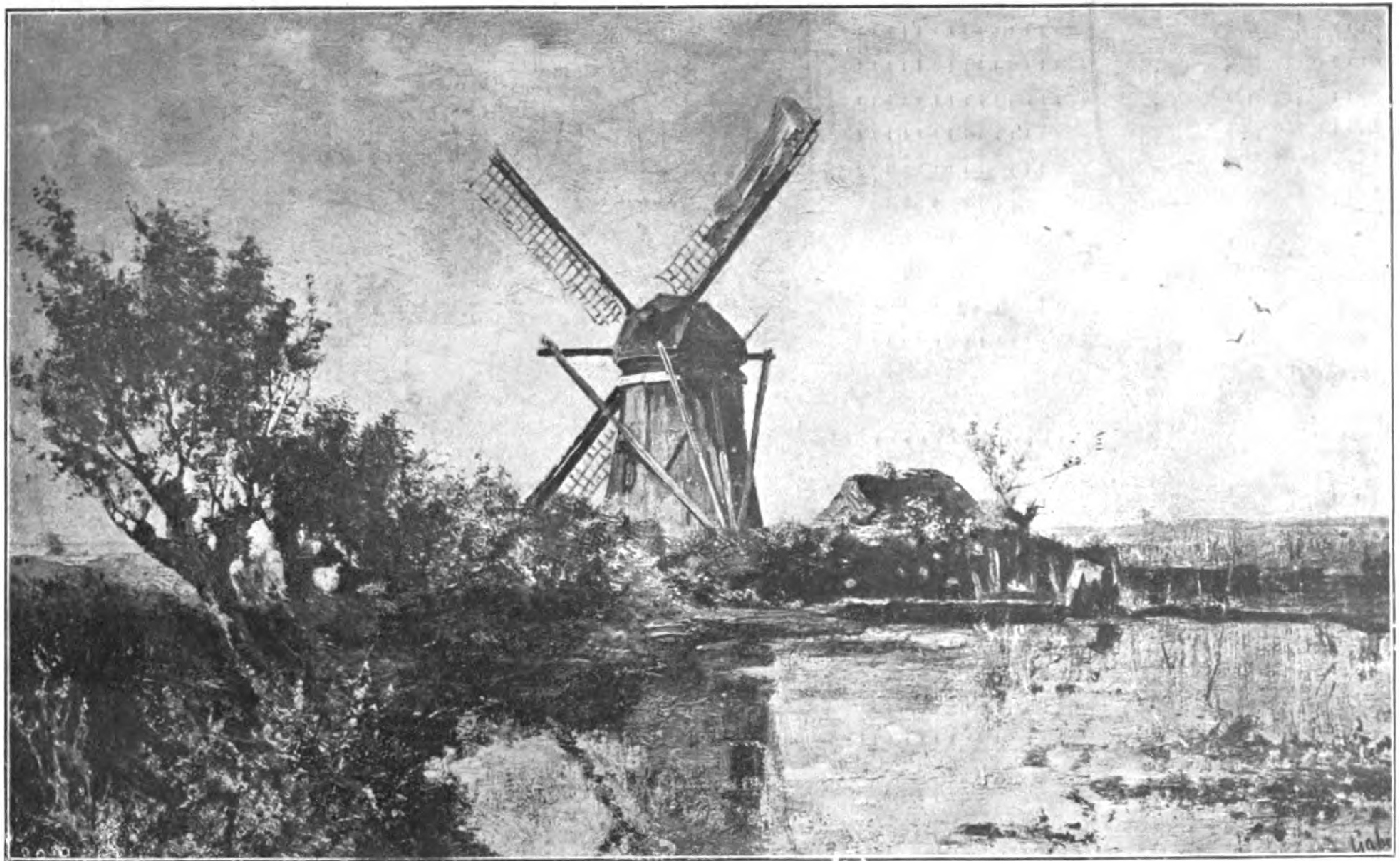
壹組　金拾壹圓五拾錢
郵税金十二錢



東京日本橋區
大阪心齋橋筋
京都三條通

丸善株式會社

The Mill on the Pond.



P. J. C. Gabriel.

中央公論



第二十六年
第七號
第二百六十八號

内閣更迭論

（一）

京童相傳へていふ、數次元老會議開かれ、閣臣總辭職に決す、然かも西園寺侯容易に起たず、爲めに其の成行容易に豫測すべからざるものありと

此の傳説の眞僞は素より吾人の知るを得ざる所、又知るをも欲せざる也、然れども假に之を事實とせよ、而して吾人に與ふるに、之に對する評論の自由を以てせよ

（二）

桂公は恐らくは自から政局を抛げ出す心頗ぶる切なるものあるべし、其の理由如何といはゞ、第一其

の標榜せる非募債政策の殆んど支持しがたきに至れるにあり、鐵道の建設改良は假令特別會計に屬すとするも、同一政府の責任を以て公債を募集する以上、其の結果は非募債政策の撤回と同一也、僅かに名分を異にすとも、其の實同じくんば、殆んど辯疏の餘地なきにあらずや、況んや治水其の他の新事業費を要するもの漸く多からんとするも、一方には民力疲弊の極に達して殆んど全く歳入の自然增收を看ると能はざるに至れるをや

第二は國防計畫の完成容易ならざるに在り、清國將來の形勢より案ずれば、現在の陸軍は聊かにても之を增加する必要あるも、斷じて減少するを許さゞるべし、而して太平洋問題解決のためには、更に大に海軍擴張の必要あるや論を俟たずとす、然かも其の費用は何處に之を求むべきや、是れ實に至難の問題也、然り、其の難きと易きとを問はず、必らず實行せざる可らざる問題なるも、又甚だ不人望なる難問題とす、聰明にして而して最も人氣を重んずる桂公が、手を之に觸るゝとを好まざるや素より多言を要せざるべし

第三は公債政策の意外に成功せざるにあり、公債の信用中外に高まるに乘じて、桂公は竟に四分利公債を發行して五分利との借替を斷行したりき、其の第一回は幸ひに成功したるに由て、之を謳歌するもの少からざりしが、第二回第三回となるに及びて、漸く之を悅ばざるもの多く、最近に至ては其の市場に於ける價格遂に九十圓五十錢に下落するに至れり、惟ふに此の公債政策は、桂公の最も意を用ゐし處にして、其の施設の眼目の一たりしや蔽ふべからず、然るに其の結果や乃ち斯の如し、公に取ては恐ら

くは大なる打撃ならざる可らず、公の意氣大に沮まざらんとするも得べからざる也

第四は不景氣の容易に去らずして、益々其の勢ひを長ぜんとするにあり、夫れ日露戰役より繼續して、國民の負擔の增加せる年額實に一億六千萬圓とす、此の額丈けは則ち國民の購買力を減ぜる也、何ぞ況んや比年洪水あり、火災あり、東北には又凶歉あり、非時に降霜降雹ありて、桑蠶の害を受くる甚だ多きあるをや、且つ一億六千萬圓の利廻りを一割とすれば、十六億の資本は正さしく納稅のために固定するに同じ、若し八分とすれば二十億圓、五分とすれば三十二億圓ならずや、三十億の巨資を固定して、而して年々一億六千萬圓の購買力を失ふ、貨物の賣行澁滯せざらんとするも得べからず、國民の富力漸く進みて、此の一億六千萬圓の增加負擔に苦まざるに至らざる以上、不景氣は未だ容易に去るべからざる也

第五は實業家の人望の漸く去らんとするに在り、有價證劵の釣上げ策は、曾て桂公の大に意を用ゐし處なるも、今や其の下落は幾んど極點まで陷ゐれるが如し、夫れ百圓の證劵七十圓に下落する時は、其の株式所有者の財産は正さしく三割を減ずる也、百萬圓の財産家は、坐ながら七十萬圓に減ずる也、甲州の富豪若尾家の如きは、曾て百十圓臺の株式十六萬株を所有せしに、今や七十圓に下落したるがために其の損失實に五百四十萬圓に及べりといへり、株式の下落は必ずしも政府の責任にあらず、然れども政府が東京市に於て新たに電燈會社の創設を認許したりしために、電燈株、瓦斯株等の下落せしや爭ふべからず、此がために其の株式所有の實業家が、心裏に政府者を怨嗟するの小ならざるや蔽ふべからず、

素より全く信ず可らざるも、彼等が濟生會に對して出資を躊躇する實に此の怨嗟の餘響なりとさへ傳へらるゝにあらずや、西園寺内閣の疑さに維持を難しとせるも、又實に實業家の人望を失へるがためなりき、今や實業家の歡心を買ふに急なる桂公にして、逆まに怨嗟を招くとせば、公や政局に嫌氣を生ぜざらんとするも得べからざるに非ずや

凡そ此等の事情を綜合するに、桂公は其の局面の未だ甚だしく窮せざるに當りて、速かに去るを最も智なりとすべし、朝鮮併合の功は全く成れり、露國との協約は能く重ねられたり、條約改正の最大難關たりし英國との交渉は兎も角上首尾なりき、即ち事業の一半は遂に成れる也、桂内閣の功績も亦大なりと謂ふべし、速かに去つて而して功名を全くするは智者の事也、桂公の智にして豈に進止に惑ふの理ある可けんや

故に吾人は内閣總辭職の傳説を聞きて、或は然るべしと首肯す、然れども桂公の速かに去るを利とする丈け其れ丈け、後を承くべき西園寺侯には即ち不利ならざるを得ず、侯の容易に起たずといふまた甚だ理ある也

（三）

單に西園寺侯の爲めを圖るに、此の場合桂公の勸誘に應じて起たざるを利とすべし、起てば必ず不利を招けば也

海陸の國防を完成するとは、何人が局に當るも至難也、第一に其の財源なく、强ひて財源を作れば實

業家、寧ろ國民の怨望を招かざるを得ず、是れ不利の大なる第一也

桂公は其地位を西園寺侯に讓るに方つて、彼の情意投合の結果なるを示し、聊か之を恩に懸くる形迹あるべし、隨つて若干の條件を提出すべし、自家の財政方針を踏襲すると、若干の地位を制限すると等は其の主なるものなるべし、非募債主義を撤去するが如きは敢て介意せざるべきも、他は必らず窮屈なる條件を附すべく、國防完備の如き殊に其の隨一のものたるべし、隨つて西園寺侯はまた又左顧右眄して容易に自家の經綸を行ひ得ざると、從前の內閣に異ならざらんとす、是れ不利の大なる第二也

條約改正事業の內、佛獨兩國其の他は尙ほ殘れり、之を完成するも、改正事業の功は寧ろ悉く桂公等に歸し、西園寺侯等は幾んど其の殘糟剩粕を嘗むるに過ぎざらんとす、是れ不利の第三也

西園寺侯の率ゆる政友會の中には、政權に渴する餘り、速かに內閣を引受けんと欲するも、別に新政策を立てゝ以て人心を新たにする途なきが爲めに、山本權兵衞伯を迎へて海軍大臣とし、德川家達公を聘して文部大臣たらしめんと策せしもありしと聞く、然り、政策の以て人心を新たにすべきものあるなき也、然れども新內閣に新政策なくんば、內閣更迭畢竟何の意味かある、抑もまた所謂立憲的行動なるものを奈何するぞ

故に西園寺侯の爲めの上計はといはゞ、姑らく政權の引受けを固辭して、以て桂內閣をして往く所まで往かしむるに如かず、有體にいへば、民心は頗ぶる今の政局に倦めり、財界の不景氣は到底明年にして恢復すべからず、民力の疲困もまた俄かに治すべからず、若し天候不順にして米作また豐かならざら

ん乎、沈衰は更に一層の甚だしきを加へん、低利公債の不成功もまた彌よ著るしからん、而して國防の完備、而して治水の施設、而して對清對米の措置、益々困難にして、窮局更に窮せん、此の時に至て、桂公は責任の解除を求むるに急にして、また些の條件を提出する餘裕なかるべし、寧ろ西園寺侯に叩頭して其の起たんことを懇請すべし、事茲に至らば、侯や悠然として局面に當るに、進止措畫、總て自由なるべく、些しも他の掣肘を受けざるを得べし、彼の所謂元老なるものも、全く容喙せざるに至るべし、所謂西侯出でずんば蒼生を奈何といふもの是れなりとす

出づるに時を得ざれば必らず悔あり、故に苟くも出てんとせば、必らずや大に我に利なる時を擇ばざる可らず、而して今は斷じて西園寺侯に利なるの秋にあらざる也、侯が飄然として京都に去れりといふもの、焉んぞ自から起つを避けたるにあらざらんや、果して然らば、侯も亦達識の士也、明哲身を保つ所以を知れり

（四）

桂公讓りて而して西園寺侯固辭せん乎、公や必らず侯に曰はん、我が讓らんとするは實に情意投合の結果のみ、侯若し受けずんば、情意投合の誼は、茲に一び終結を告げたりと做さゞるべからず、而して次期の議會に於ても、また新たに侯の援助を求むるの内諾を得ざるべからずと、侯にして之を肯はざらん乎、更に又促すに新内閣組織のことを以てすべきや必然也

情意投合の結果として、桂公が何等か政友會に酬ゆる所なかる可らざるや言なし、而して其の酬ひの

最も大にして、政友會の多數の最も滿足する所は内閣の明け渡しにあると言を俟たず、然るに桂公之に酬ひんとするも、西園寺侯受くる所なくんば、公たるもの之を幸ひとして茲に報酬問題を打切りとするを以て最も智なりとすべし、情意投合の誼あるが爲めに、世間をして今にも政權の授受あるが如く斷えず揣摩せしむるは、民心を不安ならしむる所以にして、政治上先づ第一に避くべきとなれば也、西園寺侯にして苟くも内閣組織を辭する以上、素より情意投合の打切をも拒む能はざる也

桂公は西園寺侯をして情意投合の打切りを諾せしめたる上、更らに第二の要求を提出して其の承諾をも求むべし、第二の要求とは、言ふまでもなく次期議會に於て、新たに政友會の援助を得る一事にあり、桂内閣にして若し繼續せざるを得ざらん乎、公は玆に政策の一變と進轉とを策するなるべし、即ち國防の完備を主とし、多少積極的方針を執るがために、從前の標榜を變ぜさるを得さるべし、此の時に於いて、衆議院の多數黨たる政友會が乘じて以て攻撃を逞くするとは、桂公の最も不便として怖るゝ所ならざる可らず、隨つて公は之を避くるがため、必らず政友會の援助を求め、政友會にして萬一之を肯ぜざらん乎、必らずや西園寺侯の起たんとを強要すべし、侯にして之を固辭せん乎、勢ひ公の求むる援助を諾するの外なかるべきにあらずや

若し西園寺侯にして、起つとも、援助するとも、兩つながら之を拒まん乎、是れ情意投合の打切と同時に、公侯の關係を全然破壞するもの也、公は改選後の貴族院に大多數を擁して、儼乎として西園寺黨と對抗すべし、明春の總選擧に於ても、政友會を一蹴するの意氣を示すべし、是れ恐らくば政友會の其

だ悦はざる所にして、而して西園寺侯に在てもまた心外に堪えざらん、事茲に至らば、是れまでの忍耐は全く値なきものとなる可ければ也、是までの雌伏は、全く卑むべき屈辱となる可ければ也

故に第二の要求も、また寧ろ快く之を諾するに如かざるのみ、之を諾するの宏量ありて然る後、西園寺侯の人物彌よ高きを加へ、而して政友會また益々大なるべきのみ

（五）

情意投合を打切とせよ、而して次期議會の援助もまた之を承認せよ、恐らくは政友會の陣笠等は切齒して憤らん、彼の輕佻なる國民黨の如きは、手を拍つて笑ひ囃すべし

然れども斯くして今一箇年を忍耐する結果如何と看よ、民心彌よ倦みて桂內閣益々窮せん、彼の實業家と雖も竟に相率ゐて西園寺侯の起つを促すに至るべし、是れ天下をして自然に政友會に歸せしむる所以ならずや、是れ純乎たる政友會內閣を組織して、自由に其の經綸を行ひ得る所以ならずや

桂內閣の後に寺內內閣來らんと期待せし世間の希望は、今や殆んど全く破れぬ、中間內閣として山本內閣を現出せしめんとも、また一場の夢に歸せんとす、貴衆兩院の現狀より打算するに、所詮桂公ならずんば西園寺侯出でざる可らず、政局は倘ほ暫らく公と侯との相擔當する所たるを奈何ともするなきのみ、然かも西園寺侯の今起つの不利なるや明か也、公假令讓るも、侯は斷じて受けざるを利とす、政友會の陣笠には洵に氣の毒なるも、機會の未だ可ならざるを奈何せん

× × × × × × × × × × × × × ×

梶原の逆櫓は義經の卑み嗤へる所なりき、然れども政事家は進退兩つながら其の宜きを制せざる可らず、桂公が何時にても進み、何時にても退くの用意を缺かざるの智は、心あるもの丶必らず歎服する所なるべし、公の智の群政事家を拔く數等なる、今に至て益々明らか也、過を視て仁を知る、吾人は桂公の寧ろ失敗時に於てまた殊に其の智なるを看る

國富の增加に銳意せよ

（一）

開國以前の事は論莫し、開國以後、我が憲政實施の時に及びてすら、歐米の國民中には尚ほ我が日本あるを知らざるもの甚だ多かりき、假令之あるを知るも、恰かも清國の一附庸國の如くに思惟したるもの多かりき

然るに日清戰役に於て、先づ龐大なる清國に打勝てるがために、漸くに日本あることを知るに至り、次て日露戰役に於て、世界第一の强大國と稱せられたる露國に捷つに及びて、始めて日本の獨立國にして且つ其の武力の精銳なるを知り、殊に英國と同盟を重ねて、隱然東洋の霸たるを視るに及びて、俄かに之を世界一等國の伍班に加ふるに至りぬ

吾人は皇天に多謝す、三千年の歷史、殊に萬世一系の皇統と不出世の英天子を奉戴し、金甌無缺の國

證を支持し來れる我が國民が、武力を以て世界第一等國の伍に列する素より當然のみ、何の不可思議か之あらん、歐米人の瞠目駭愧するは、する者の迂なるのみ

然れども我が富力は乃ち如何、之を歐米と相比して果して世界一等國に伍して恥ぢざるや否や、吾人は玆に至て毎に慊然として而して悵乎たらざるを得ず

（二）

我が國の富力は果して何程なりや、未だ明確なる統計を得るに至らずと雖も、或る者は七十億圓といひ、又或るものは百四十億圓と稱す、試みに其の最も多きに隨つて百四十億圓として、之を歐米に比せん乎、昨年出版の米國の世界年鑑に據れば、略ぼ左の如くなるべし

米國	二四〇,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇円	伊太利	二六,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇円
英國	一三六,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇	白耳義	一四,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇
佛國	九〇,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇	日本	一四,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇
獨逸	八〇,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇	西班牙	一〇,四〇〇,〇〇〇,〇〇〇
露國	六〇,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇	和蘭	一〇,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇
澳匈國	四〇,〇〇〇,〇〇〇,〇〇〇		

即ち僅かに最弱たる和蘭の百億、衰殘の西班牙の百八億なるに優さるのみ、强國の間に介して其の勢力均衡のため、辛ふじて獨立國たる白耳義と相齊しきのみ、思へ、白耳義の領土は二萬九千四百五十五方基米（キロメートル）のみ、我が本土の三十八萬二千四百十五方基米とは比すべくもあらず、唯だ澎湖島を除ける臺灣の一萬八千四百八十八方基米に比して少しく優さり、朝鮮の二十一萬八千六百五十方基米の七分一にも

足らざるにあらずや、其の人口も白耳義は僅かに六百六十九萬三千五百四十八人に過ぎずして、朝鮮の九百七十八萬一千六百七十一人にも及ばざるに非ずや

我が富力を同盟國に比すれば幾んど其の十分の一のみ、更らに貿易額に就て統計（一昨年分、昨年出版の『米國商業及び財政表』に據る）

	輸入	輸出
英國	六、〇四〇、六〇〇、〇〇〇円	二、六八三、七六八、〇〇〇円
獨逸	三、九〇五、六七八、〇〇〇	三、一八〇、〇六三、〇〇〇
米國	二、九五一、三三六、〇〇〇	三、四〇一、四八八、〇〇〇
佛國	二、三〇五、四三〇、〇〇〇	二、一三一、四九三、〇〇〇
和蘭	二、三五九、一五四、〇〇〇	一、七四五、九六四、〇〇〇
白耳義	一、三一六、三三六、〇〇〇	一、〇〇三、四〇六、〇〇〇
伊太利	一、一八八、五三八、〇〇〇	七二七、一一八、〇〇〇
澳匈國	一、一三九、一一〇、〇〇〇	九三九、三五四、〇〇〇
露國	八一三、一〇三、〇〇〇	一、四〇七、三六四、〇〇〇
印度	七八四、三三六、〇〇〇	一、〇九四、一三八、〇〇〇

	輸入	輸出
加奈陀	六三三、〇三四、〇〇〇円	五三八、一七四、〇〇〇円
瑞西	六〇八、一三〇、〇〇〇	四三三、七〇四、〇〇〇
亞爾然丁	五八二、三三〇、〇〇〇	七六六、八八六、〇〇〇
淸國	五〇九、二五一、〇〇〇	三五七、一三〇、〇〇〇
濠洲	四九七、五三三、〇〇〇	六一三、三七四、〇〇〇
日本	三九一、五六八、〇〇〇	四〇八、三三四、〇〇〇
西班牙	三六五、〇三四、〇〇〇	三五一、六一二、〇〇〇
伯西	三六一、二〇八、〇〇〇	六二〇、五一三、〇〇〇
瑞典	三三六、三八八、〇〇〇	二五八、三六〇、〇〇〇

歐洲の最小國たる和蘭、白耳義の三分の一にも及ばず、瑞西の幾んど半に過ぐるのみ、斯くして尙ほ世界一等國の班に列すといふは、沐猴にして冠するよりも甚だしき也、我が國民は寧ろ大に慚憤して而して興起する所莫かる可らざる也

（三）

我が國既に朝鮮全部を併合し、且つ早く臺灣及び樺太の南半を領有し、南滿洲に利權を立て、而して

東洋の覇主たらんとす、殊に清國の將來を考慮するに於て、益々陸軍を刷振して、而して更に大に海軍を擴張せざる可らず、今や國民は一億六千萬圓の戰時税を繼續し負擔して、疲困殆んど其の極に達す、然かも中外の形勢は到底減税を許さず、却つて益々負擔を加ふるの外なからんとす、將さに執るべきの途は、之に應ずるがため、唯だ大に富力を積むの外あらず

然り、大に產業を拓き、國富を增進するがためには、官民一致して以て盡瘁する所莫かるべからず、我が地方の生產額は、過去十年間に於て實に約五割の增加を示したりき、請ふ左の一表を精視せよ

	明治卅四年ニ於ケル平年米作	同四十三年ニ於ケル平年米作	三十四年工產額	四十三年工生產
全國	三九、八四三、〇五八石	四九、〇三八、四〇一石	二、三三六、一八一石	二、九〇〇、七六五石
增加率	一〇〇	一二三	一〇〇	一二四
九州	五、三五〇、六二四	七、三〇二、三二七	八五、一二八	一六七、八四〇
增加率	一〇〇	一三六	一〇〇	二〇二
四國	一、九五五、三三九	二、七九三、九九五	四八、三二三	一二四、一四六
增加率	一〇〇	一四四	一一〇	二五八

吾人は茲に於て多く悲觀するの愚に出づべからず、大戰役を經て、民力疲困を極むと雖も、產業は尙ほ駸々として進めり、十年間に於て知らず識らず既に五割の增額を見たり、若し官民齊しく國の地位と將來とを自覺して、銳意精苦する所あらば、將來の十年間に於て、更に之を增加して五割とし七割とするまた何ぞ必らずしも難からんや、吾人は切に官民一致して以て將來の方針を確立し、之に向つて大に奮進せんことを希望せざる能はざる也

（四）

國富增進の爲めには、產業開發の目途を定むるを第一とす、地方によりて生產する材料、及び交通機關の狀態に由て材料を輸入し製品を輸出する便否、及び氣候風土による農工品の選擇等を考慮し、縣郡町村各々適當の事業を定め、町村に在つては之を町村是とし、郡に在ては郡是、縣に在ては縣是として、官民共に之を確守し、懸命に奮進するを要す、知事又は郡長等の意嚮次第、或る時は此の事業を興しながら、中道にして又他の事業に移るが如きは、徒らに彷徨支吾するに止まりて、到底大に產を興し業を進むる所以にあらず、故に町村郡縣に於て、先づ官民一致して主力を集注すべき產業を選定し、其の保護奬勵の方途を講究し、之を以て町村是、郡是、縣是とすべし、必らずしも年所を期するの要なきも、又或る期間を定め、此の期間中に增加すべき生產額をも概定するを要す、然かすれば功程の緩疾張弛を視るに便にして、官民の奮發を促がすこと尠少ならざれば也

吾人の知れる一地方の僻村に於て、一小學敎師の勸誘に由り、農家皆其の宅地內の空地を擇びて土地に適當なる菓樹を栽培し、菓實の收入を以て公賦に充つるの計を立てしに、成績思ひの外佳良にして、彼の戰時特別稅の如き、裕に之を支辨し得たりしといへり、農家の有する空地を更に利用して、雞、鵝、鴨、豚、羊の類を飼養し、或は菓樹を植ゑ、若くば魚介を繁殖せしむる亦太だ妙ならん、或は公有の山林に殖樹して一定の輪伐法を定むるが如き、其の用水池渠溝に魚介を飼養するが如き、町村の利を收むべきもの二三に止まらざらんとす、水力を利用して以て電氣を起すに足るあらば、之を動力として諸種の

工業を興すべし、電氣を肥料に代用する殊に妙也、害蟲驅除にも利用する亦太だ佳也、新たに桑園の拓くべきあらば、養蠶をも奬勵すべし、棉絲及び生絲の產出あらば、染織を奬勵して絹布綿布の產出を計るべし、彼の竹細工の如きは、南北亞米利加に汎く需要されんとす、竹を產する地方に在ては、其の技術を利用して大に竹細工を振興するも可なり、總て原料のまゝにて賣出すよりは、之に加工するを利と爲すが故に、勗めて原料を利用して工業を興すを要す

知事と縣會と、郡と郡會と、並びに町村の先輩有志等は、總て此等の點を講究して町村是、郡是、縣是を定むべし、既に之を定めたる以上、斷じて變更を許さず、官民共に鋭意邁進すべし、斯くして十年、十五年、二十年ならば、各地方の產業欝然として興るべし、國富大に增加する論莫きのみ

（五）

農業は天候の變異を除けば割合に確實にして、且つ極めて永久的なるが爲めに、隨つて其の利益率また頗ぶる低きを例とす、然るに地方金融の狀態を視るに、都會に反して金利甚だ高く、普通有抵當の貸借と雖も、恐らくは一割一二分より低きはなく、甚だしきは一割七八分に達するも多からん、斯の如き高利の資金を運轉して農事の改善を計らんとするは、幾んど木に緣つて魚を求むるに齊し、彼の東北地方の如きは、能く肥料を用ふれば、米質を改良すると共に、其の產額をも增加することを知悉すと雖も、農家貧にして十分に肥料を利用すること能はずといふ、去れば國家は力めて農家を促がして產業組合及び信用組合を組織せしむるは勿論、及ぶべくんば低利の資本を供給して以て產業の開發を資くるを要す、

今の農商務大臣の公示せる所によれば、政府は汎く零細の資本を吸集し、之を低利に地方に貸出す方針にして、其の年額五百萬圓より逓次增加して、竟に二千萬圓に及ぼす豫定なりといふ、而かも何ぞ二千萬圓のみと言はんや、五千萬圓可也、一億圓可也、政府は勸業銀行農工銀行を助けて、益々多く低利の資本を供給せしむべき也

我が工業家及び商業家の弊は、見本と同一品を提供し得ざるにあり、一は各工業家に一致團結を缺く結果にして、一は粗製濫造に流るゝの弊に出づ、故に一方には各工業家は勿論、其の取引商との聯絡を密にして、一致團結の精神を旺んならしめ、有力なる組合を作りて品質を精良ならしむると共に、之を統一するを必要とし、一方には又商業道德を尊重すると、恰かも我が同盟國たる英國商業家の如くならしめざる可らず、英國の商品が比較的高價なるに拘らず、尙ほ無限の信用を維持して世界の市場に橫行する所以のものは、其の尊崇すべき商業道德に由て、品質の堅實を支持して寸分だも之を失墜せざるが故ならずや、吾人は我が國家及び有識者が深く心を玆に用ゐて以て商工業家を砥礪せんとを望む

（六）

産業開發のため、町村是、郡是、縣是を定むるに方りて、最も避くべきは黨爭を地方の自治團體にも及ぼす一事とす

試みに地方に至り視よ、甲には政友會の停車場と國民黨の停車場とを有する鐵道あり、乙には政友會の港灣鐵道あれば、國民黨の港灣及び之に聯絡する電氣鐵道あり、政友會のために開ける道路あれば、

國民黨のために設けたる學校あり、政友會員多數を占むる時は、其の便宜とする土木を盛んに興し、國民黨多數なればまた又然かす、總て其の私便とする所に出てゝ、多數公共のためには計らず、一の港灣、一の鐵道、一の停車場にて事足る地方に在ても、敢て之を二にして憚かる色なし、是れ無用に公費を私消する也、無用に資力を固定する也、正さしく天物を暴殄する也、啻だに經濟の理法を無視するに止まらざる也、

然かも斯の如きの例が天下到る處に滔々風を爲すといはゞ、誰か愕然且つ慨然たらざるものぞ、抑も是れ必らずしも地方黨人のみの罪にあらざる也、之に徇じて其の利を濟さしめし地方官吏の罪にして、又之を容認して遂行せしめたりし政府の罪なりと斷ぜざる可らず

政黨必ずしも有害無益にはあらず、既に立憲代議政を實施して、多數決に由る以上、政黨の存立また實に已むを得ざる也、然れども其の爭ひは之を中央に限局せざるべからず、大政に就てのみ爭議せしめて、之を地方の自治團體にまで及ばしむ可らず、之を及ばしむれば、啻だに自治團體の輯睦結合を破壞するに止まらず、其の多數を恃みて勢力を濫用し、竟に地方の資力を無用に消耗せしめ、延きて産業の開發に大障害を及せば也、深く且つ切に之を警めざる可らず

（七）

淸國及び太平洋の將來を考慮するものは、我が今日の地位を支持し、所謂世界一等國たるの名實を收め、殊に東洋に覇たるの義に由て、益々國光を發揚するがため、更に十年の臥薪嘗膽を敢てせざる可ら

ざる所以を察知すべし、徒らに戰捷の餘光に醉ふて驕泰自ら持し、意氣盛滿にして將來を測らざるが如きは、是れ國を誤る所以にして、啻だに君國の蠹たるに止まらざらんとす、然かも臥薪嘗膽の意氣を以て精苦砥礪すべき所以のもの一に國富增加にあるを知らば、官民一致して之に當る所以も亦炳焉として明かならずや、忠誠にして國を愛ふるもの深く謀りて大に盡さゞる可らざる也

帝都燈界の革新

吾人東京市民は、曾て其の夜暗を照すがために、甚だしき高價を支拂ふ重き義務を負擔したりき、然り、世界稀有にして、又實に日本第一に高價なる電燈料をさへ納めて以て今日に及べり

然れども東京瓦斯會社に對して千代田瓦斯會社の起るあり、東京電燈會社に對して東京鐵道會社電燈部の興るあり、且つ安田一派の新電燈の認可さるゝありて、瓦斯も電燈も、今や猛烈なる競爭を開始しつゝあり、其の結果將さに我が帝都の燈明界を革新せざれば止まざらんとす、然かも之に由て吾人市民の享くべき利益は淺小ならざるを以て、其の成行に就ては、深き興味を以て、之を凝視するを智なりとす、平生饒舌なる新聞紙が、彼の甲乙丙丁の會社に全部又は一部の情實あり貪緣あり誼故あるがために此の輕からざる問題を是非せざるに方つて、吾人の敢て一言を費すまた甚だ無用ならざるべき乎

蓋し獨占事業の弊を最も覿面に、最も露骨に表現したるものは實に東京瓦斯と東京電燈となりき、現

に東京瓦斯は、其の燈火用一千立方呎の使用料を二圓四十錢と定め、去る明治四十一年の初頭に於て、明年を期して之を熱用料と同額即ち二割を減ぜんと聲言しながら、曾て實行せず、恬として憚かる色もなかりしが、千代田瓦斯起るに及び、本年四月より初めて前約を實行したるのみならず、千代田に倣ふて瓦斯用諸器具の或るものを無料にて貸與することとし、頗ぶる市民の便を圖らんとするに至れり

東京電燈に至ては、其の點燈料の高き實に世界稀有にして、又實に日本第一なりき、偶々市民の起つて非難する者あるも、曾て聊か顧慮する所なく、十燭光一夜一圓廿錢といふ高價を收め、メートル使用者の外、五燭光の使用を許さゞりしが、安田派の新電燈が七十五錢を標榜し、東京鐵道電燈部が九十錢を定價とし、且つ盛んに五燭の引用を勸誘するに及びて、東京電燈も倉皇色を喪ひ、五燭の引用を諾するは勿論、其の競爭區域に在ては、出來得る限り價を引下げんと欲するに至れるもの丶如し

吾人の殊に記すべきは東京鐵道會社電燈部の態度是れ也、此の會社の電車は、其の料金問題に於て屢々市民を憤激せしめ、今や實に市民憎惡の焦點に立てり、然れども其の電燈部が新たに二千五百萬圓の資本を以て電燈業を兼營すと決するや、第一點火料を九十錢と定めたるに止まらず、其の部長たる安藤氏の如きは、全市に約百萬燈を供給すると共に、其の價を石油燈と同一程度に引下ぐる決心なりといへり、其の中流以下、殊に多數貧民をして電燈の利澤に浴せしむるがため、五燭の點火を勸誘し、竟に危險にして且つ非衛生的なる石油燈に代へしめんとするに視れば、其の用意略ぼ知るべき也、且つ彼れは東電の如くメートル使用料を徵せず、又假令該燈を引用するも、全く使用せざるものには一厘たりとも

徴收せず（東電は九個の電燈引用者に對し、其の使用すると否とを問はず、メートル賃貸料を合せて毎月三圓九十錢を收むるとは、本文記者の現に實驗せる所とす）其の埋管工事の實際を視るに、一び道路を掘起したる處は、道路及び附近商店の妨害たるを憚かり、工夫を督して夜間十一時までも就役せしめて、成るべく即日に之を埋立つる等、公共の便益を主とする措置の殊に著名なるものあり、其の方針既に中流以下汎く貧民に供給するにありて、料金また石油燈と齊しくするを期待し、現に料金の日掛け（日掛けとは、例へば一圓廿錢宛の月家賃をば、毎日四錢宛收めて以て貧者の便を圖るをいふ）をも實施すといふに視るに、彼れは實に我か帝都燈明界の革新の急先鋒たる者也

之を聞く、東京鐵道の社長千家尊福男は電燈部の職員を戒めて曰く、卿等は役人にあらずして電燈屋の番頭手代たるとを忘るゝ勿れ、車掌運轉手假令一二の過失あるも、客は尙ほ寬容して電車に乘るともあれ、電燈部に於て寸分たりとも失あらん乎、花客は悉く去て他社に至るべし、深く注意せざる可らずと、而して安藤氏また其の部員以下職工にまて此の趣意を布衍して、切に恭敬眞率誠實の態度を執らしむるといふ

若し之に由て、廉價に電燈を市の内外に普及せしめ、竟に彼の危險なる石油燈を全廢するに至らば、我が帝都燈明界の革新は正さに成らん、燈明として電燈が瓦斯の如く衞生上に有害ならず、又石油燈の如く面倒にして且つ危險ならず、今日に於て實に理想的好燈明なれば也、吾人は由て以て市民の享くる便益の小ならざるを思ふて、此の革新の成就を期待す、市民もまた宜しく助けて以て革新の功を成すべ

き也

若し夫れ彼等にして萬一相合同し、若くはトラストを組織して帝都の燈明界を獨占するが如きことあらん乎、吾人は第一に鼓を鳴らして之を攻めん、是れ吾人が市民と相倶に是より注意と警戒とを怠るべからざる所たるや言を俟たずとす、獨占の弊は、我が市民の旣に飽喫して餘りある所なれば也

公論

救濟事業に對する目下の急務は愼其始に在り

法學博士　小河滋次郎

今や我國に於ても時代の要求に促されて漸く社會的救濟事業なるものゝ發展を見んとするの傾向あるは喜ぶべきの現象なりと謂ふべし、何事も其始めに愼む所あるが肝要なり、救濟事業の如きも宜しく今の門出の初步に於て最も愼重の注意を加ふる所なくんばあるべからず、斯業の經營に當る者動もすれば輒ち曰く社會未だ斯業に對する同情の念の薄きが爲めに斯業の經營に必要なる資金を得るに至難なるを免かれざるを如何せんと、經營に資金の必要なるは論を俟たず然かも資金に乏しきが故に絕對に經營に着手し得られざるべしと言ふに非ず、否な資金なきが故に經營に着手する能はずとして已むべきに非ざるが即ち救濟事業の本質なり、由來救濟事業なるもの所謂孺子の將さに井に墜ちんとするを見て何事を差擱ても急遽之れに馳せて其危きを救ふの心に基くべきものにして惻隱同情に堪へざるの所、固とより其力を揣り其手段を深慮するの餘裕は無き筈なり、志のある所道自ら其前に開く、一見無謀無策なるに似たるが如くなるも誠心誠意、深き同情

と堅き信念とを以て事に此に從ふ、前途必ず光明あり、無謀反て善謀となり、小規模ながらも規模相應の效果の現はるゝと共に世の信賴もまた此に傾き信賴の存する所、經營に必要の資金もまた强て求めずして此に集り來ることを得べし、先づ多くの資金を求めて而して後に經營に着手せんと欲するが如きは啻に孺子將墜井の危急を見て空腹力足らざるが爲めに米を炊ぎ飯を取り十分なる腹仕度の終はるを俟て之れが救護に趣かんとするものと一般なるのみならず、誅求、動もすれば常軌を逸し反て斯業に對する社會の反感を招き終に世人をして所謂懲羹吹韲に至らしむるの悔あることを免かれず、此くの如くにして果して能く惻隱同情の心の已む能はざるものありと謂ふことを得んや、此至心誠意に缺くる者にして救濟事業經營の局に當り若くは經營の肝煎を試むる所あらんとす、假りに資金の供給の潤澤なるものありとするも、經營あつて效果なし、徒らにお役所的なる形式の末に「死に金」を浪費するの結果を見るに終はらざるを得ざるは明らかなり、財源難は獨り我國に限れることのみに非ず、財源難あるが爲めに我れに於ける社會の斯業に對する同情心の薄弱なる證據なりと認むるもまた早計に失するの嫌ひあることを免かれず、財源難は歐米にも之れあり、世人或は彼れに於ける斯業發展の盛況に顧みて彼れに財源難なくまた其財源難なき所以の社會一般の斯業に深厚なる同情心を有するが爲めなりと速斷する者もあるべしと雖も其實敢て必ずしも然るに非ず、其今日に在て大規模に經營しつゝある所のものも其特に私營事業の如きに至ては何れも皆曾て財源難に對して苦がき經驗を甞め來りたるのみならず今日と雖も尙ほ常に之れと惡戰苦鬪しつゝあるの事實なり、羅馬は一日に成らずの譬喩の如く歐米に於ける斯業の如きも決して一朝一夕にして今日の盛運を見るに至りたるに非ず、極めて微々たる規模より漸々發展して以て今日の盛大をなすに至りたるに過ぎず、彼のウヰッヘルン氏のラウヘスハウスに見よ又之を彼のボーデルシウヰイン氏のベーテルに見よ、今日こそ五千有餘の各種の窮民を收容保護

する私營的、大なるインスチチユートとして世界に冠たるの發展を見るに至りたるなれ、創設の當時即ち今より僅に五六十年前の往時にあつては辛ふじて五六人の孤兒又は癲癇兒を收容するに足る破れたる一棟の藁屋の外に何物をも有する所あらざりしなり、其當時に於ける經營の苦心は到底局外者の夢想にも及ばざる所、固より高爵者の庇護あるに非ず權門家の後援あるに非ず、一點の私心なき聖僧ウキツヘルン氏も經營の進行と共に反て世の迫害を蒙ること益々加はり僞善家たり山師坊主たるの惡聲を放つに至らしめらるるもの啻に一再のみに非ず、ボーデルシウヰン氏亦た名門の出、聲望の以て一世を傾倒するものありしに拘はらず上流社會の者多くは氏の來訪に接して之れに門前拂の無禮を加ふることを憚らず、公會に私席に氏の到る所、何れの場所にも殆んど全く富豪の隻影をも見る能はず、熱誠眞摯なる氏の聖業に對して啻に同情を表し感謝を表する所なきのみならず世の所謂交際社會の人士間には一般に氏の姓名に代ふるに高等乞食なる醜名を以てするの風をなすに至りたりと云ふが如き亦た以て其如何に財源難の爲めに惡戰苦鬪を餘義なくせしめられたるやの一斑を知ることを得べし。

余を以て之を見る等しく財源難を感ずるが中にも我れに在つては歐米の其れに比して寧ろ其程度の輕きものありと謂ふを得べく、斯業に對する社會同情の厚薄に至ても我れと彼れとの間に敢て格段の懸隔あるべしとも認むること能はざるなり、或は赤十字社と云ひ或は愛國婦人會と云ひ或は武德會或は軍人援護會或は何或は何、事の一般的性質を有するものは言ふまでもなく一地方一個人の災害救護に關する事件に就ても勸誘其道を以てすれば相應に巨額の資金を吸集し得ることさまでの困難に非ず、本願寺が慈善財團を組織して全國の信徒に向て寄附金勸誘を試むる所あれば數年ならずして忽ちにして百數十萬圓の巨資を集め得たりと云ふが如きまた以て我が國民の間に潛める惻隱怵惕の心の意外に旺盛なるものあるの證左となすに足るべきに非ずや、資金に乏しく若くは資金を得るに困難なりと

云ふのことは敢て以て我が救濟事業の經營發展の前途に於ける深憂と爲すに足らず、徒らに招牌を大にして世の零細の財源を漁るに汲々し若くは權威を利用して或る限られたる一種の事業に對してのみ社會各階級の餘財を絞り盡さんことに齷齪するが如きは啻に斯業本來の性質に反するのみならず之れが爲めには反て斯業特に刻下の時運に際して最も急施を必要とすべき各種の救濟事業發展の前途に大なる障礙を貽すの結果を見るに至るべきは明らかなり。

經營は主にして資本は客なり、然るに動もすれば此主客本末の關係を顚倒し先づ資本を求めて而して後に經營に着手すること恰も一般營利的に關する何等かの事業を計畫するに同じく、甚しきは則ち利子の以て經營費を充たすに足るまでの資本を得るに非ざれば着手せざるべしとの方針を是認するが如き者さへなきに非ず、多少の發展を見たる後に於て此方針を取るは固より必要のことなり、然かも此を以て創業方針と爲すが如きは抑も斯業の本質を解せざるの甚しきものと謂ふべし、此心を以て事に從ふ、經營の實質に精神の活動を缺くものあるを免かれざるは當然にして經營は常に無意義なる形式若くは無謀無策なる豫算項目の爲めに掣肘せられ、必要なきに浪費の多きものあるを咎めざるの一面には必要缺くべからざるものも金なきが爲めに終に之を閑却して顧みずと云ふに終はらしめられざるを得ず、財源豐かにして經營益々粗なり、形式備つて精神的活動は愈々萎痺す、資金本位に伴ふ自然の結果にして官廳事業若くは準官廳事業を以てする救濟運動の常に失敗又は少くも微々たる個人的私營事業に對して反て其活動の上に遜色あるを免かれざる所以のものは即ち之れが爲めなり。

我が救濟事業に對する今日の急務は金の問題に非ずして實行の問題なり、如何に富豪貴紳をして其財嚢の紐を解かしむると云ふの問題に非ずして如何にせば經營の實效を奏し得べきかの問題を研究すること即ち是れなり、試みに眼を轉じて他の一方を見よ今現に慈善事業の目的を以て集めたる巨萬の遊金を有して之れが

費途の選擇に苦みつゝある者あるに非ずや、慈善事業の名を以て四方に寄附を求め得たるに拘はらず未だ事業の經營に着手せざるに先つて早く既に其集めたる寄附金の烟の如くまた霧の如くに何れにか消えて滅燼し去りたるものありと云ふに非ずや、其僅に創業を見るに至りたりと稱するものゝ中にも徒らに形式的無益の設備に大部分の資本を費やし甚しきは即ち月給に由て救濟すべき吏員の數の反て救濟本來の目的物となるべき窮民の數に超過するの奇觀を見るの例にさへ乏しからず。

等しく救濟事業と稱するものゝ中にも其間に於て自ら緩急を異にし難易を同ふせざるものあるは勿論なるが故今日の如き是れより將さに斯業の發展を見んとするの場合に於ては先づ其事の最も急にして且つ比較的效果を見るに易きものより之れに着手するを當然の順序となすべきに反して實際にあつては寧ろ經營に困難にして且つ事の不急に屬するものを選んで之れに盡力を傾注するが如き觀なきに非ず、而かも其經營の方法の極めて不完全なるが爲めにさらぬだに成功を見るに至難なる所のもの徒らに力を費やすこと多くして得る所、益々少く或は反て往々にして救濟の目的に違ふの結果あるを免かれざらんとす、斯業發展の初歩に於て既に弊害の百出するものあるを見ること此くの如し、此に顧みる所なくして唯だ徒らに斯業の普及を求め若くは只管に財源追窮のことに焦慮するが如きことありとならば資金豐かにして浪費益々加はり、斯業の發達を見ると共に一層大に既生の弊失を助長するに至るべきは明らかなり、資金と云ひ勞力と云ひ今既に斯業に費やしつゝある所敢て少しとせず、然かも多くは是れ死金たり徒勞たるに過ぎず、之を有効に利用するの道を講ずると既に刻下に於ける焦眉の急務の一に屬す、事業の緩急を詳かにして取捨其宜しきを得るの方針を立て各種の救濟事業に就て明らかに其經營の方法を示し進んでまた之れが統一監督の組織を全ふする所あるが如き何れも皆直ちに急施を必要とするの項目たらずんばあらざるなり、今日の場合に在ては財源問題の如

きは寧ろ不急の事に屬すと云ふも可なり、況んや或る限られたる救濟事業に關する財源問題に於てをや、此に主力を集注して以て他の當面の緊急問題を閑却するが如き否な閑却するを餘義なくせしめらるゝが如きことなきや否や、斯業前途の健全なる發展の爲めに識者の此に反省せんことを切望に堪へざる所なり。

政局私觀

池邊吉太郎

時局に關していろ〳〵の說があるが、私には一寸見當が附かない。桂さんも最う內閣を拋げ出したいが、西園寺さんが受取らないので困つて居るといふ、あなたの方の說（本號卷頭の社說をいふ）には餘程同意すべき點が多いと思ふ。想像ではあるが、事實の幾部分はどうしても其觀察の範圍外に出て居ないと私は思つて居る。秘密も十人位の間に保たれて居る秘密ならば、隨分引出すことが出來るものだが、二人若くは三人の間に保たれて居る秘密となればなか〳〵分らない。原則からいへば二人の間の秘密は最早や眞の秘密ではない。或人が自分獨りの腹の中で考へて居る中が秘密で一人でも明かせば最早や秘密ではないと私は思つて居る。けれども二人が秘密にする必要を同程度に感じて居つて、決して外に洩らさないとすれば、それは一人の腹の中で考へて居るのと殆んど異らない。それは三人でも同じだ。そんな秘密の事情の中に、現內閣の運命若くは將來の內閣の運命が保たれて居るのだから分らない。只多少吾々の耳目に觸れる端々の事實を觀察して判斷する外に仕樣がない。そこで私の判斷する所では去年の十一月の末か十二月の初め頃に桂さんから

西園寺さんに抛り出したものと見て居る。情意投合の話の發端が十二月の初旬か中旬で有つたらしいから、順序としても其以前に一度は此事が有つたに相違ないと見て居る。けれども西園寺さんの方で受けない。其受けない理由は果してあなたの方の社論に出て居る通りてあるかどうか私には分らない。が、西園寺其人を無爲恬淡と世間の人が見て居るのは間違で、政機の懸引には非常に鋭い人と私は見て居る。あの位の地位の政治家に必要な雄才大略をも或點まで具備して居る人と私は思ふ。桂さんの內閣讓渡を斷るとすれば、斷る丈けの相當の理由があつたに相違ないが、其理由は所謂秘密に屬することとて、誰にも分り樣はありません、が併し其頃までは總理大臣の候補者が外に今一人有つた樣だから、其邊の事情を知り拔いて居て斷つたのでは有りますまいか。勿論想像だからアテにはなりませんよ。兎も角も多少ズルイ考へが一方に有れば、他の一方もズルク出て、おいそれとは背負ひ込むまい。此邊は或は雙方共に秘密で、互に無說明で、ほんとうの

秘密かも知れませんよ。又其頃には日英條約改正の一條が六ヶ敷かつたし、無政府黨一件は有つたし、朝鮮合併一件だつて未だ少し固まらない處があつたし、桂の方で逃げられない事情も有りましたらう。それで桂の方から西園寺に持ち掛けて居ると云ふ事は、あなたの方の社說と同意見ですが、然し西園寺さんが直ぐに受取れば桂さんが條件を持出す、それが厭だから引受ぬといふ觀察には一寸同意しにくい。いくら桂さんだつて、自分から抛げ出して置きながら條件を附けるといふ事は出來まいと想像する。若し條件が附くとすれば、それは受取方から渡す方に將來の助力を乞ひ、其結果として附いて來るのだ。尤も今の內閣で持つて居る案は引繼ぐてせうが、あとをどうして吳れなどいふ注文が始めからあつちや、誰だつて受取りはしない。だから私は桂が投げ出したとすれば無論無條件であつたに違ひないと思ふ。だが無條件でも無注文でも、意中の眞の總理大臣候補者が外に半分でも四半分でも有る樣では、亦誰だつて厭だ。それて內閣授受の話はそ

れ迄となつて、副産物の情意投合が出て來たのぢや有りますまいか。そして此情意投合の話は、無論西園寺の方から此好機會に据膳をして、桂に一杯食はしたものだと私は内々思つて居ます。斯くして置けば、政權が餘り遠くの方に逃げて行く氣遣ひは有ませんよ。只跡は西園寺といふ事に極つて居ないばかりて、桂其人の圓滿辭職といふ大野心の有るのは、隱れも無い事實てせう。それては西園寺さんがズルイと仰しやるのてすか。ズルク無い事は有りますまい。政友會の仲間は、桂が早く内閣を明渡さないといつて不平を唱へて居るが、不平の持つて行き場が全く違つて居る。桂に何故渡さぬかと責めるよりも、西園寺に何故受取らぬかと責めなくてはならぬ、政友會連の不平はもう大分聞く。ブツ／＼／＼／＼いつて居る。然し桂を責めるより西園寺を責めた方がよいと思つて居る連中ても、實は西園寺を責めることが出來なくつて居る。そんなことを言ひ出して、西園寺さんから一喝——若くは冷たい答を一つ貰つて引下つた處て花も實もない。「オラさう思ふんだから、君がイヤなら勝手にし給へ」といはるれば、もうそれつ切りだ。外に仕樣がない。桂先生今は確かに中腰て坐つて御座る。而かも其中腰たるや自動的にあらずして他動的だ。さう見れば桂の方には疑問が無い。疑問は西園寺の方にある。モー今日ては外の一人の候補者が消えて居る樣だが、西園寺は何故受けぬか、これにもテッキリ斯うだといふ見當が私には附かない。しかし私は何ても彼ても急に受取らない方が賢いと思つて居ます。政友會ても人物が無い。何時も相も變らぬ原、松田ばかりても困るに相違がない。茶席の道具などは毎席變らぬと、お客が喜ばぬ相だ。國民の内閣に對する考は、茶人の茶道具に對するとはいくらか異らうが、然し何時も／＼同じ顏觸れては國民も些かウンザリせざるを得ぬ。原も松田も素より相當の政治家に相違ない。然しこの人達はどういふ品物てあつて、どの位の賞讚に値する品物であるかといふ事はもう大抵極つて居る。西園寺さんが眞面目な人なら其邊にも心配が有る筈だ。まア桂にしくじらせる丈け

しくじらせて置いて、いよ〳〵もう厭きられてから受取るとする、恰度人民が咽喉が渇いてどんな泥溝でも構はず飮むのを待つて居るのだと見ませうか。然しそれも隨分氣の永い話て、一寸困るかも知れない。第一に桂さんが困るかも知れない。そこで落附く先きは西園寺の腹の中が分らぬ中は分らないといふ事になる。が何れ之も矢張り政友會の仲間から責め立てられて、政府をとつてやらねば二進も三進も動かなくなつた時氣が進まぬながらも仕方なしに引受けるといふ事にでもなりませう。どうせ、みんながみんな滿足するやうな内閣の出來ることはありやしない。桂内閣に優る内閣が出來るかどうか疑問だ。優らざるも同等位の内閣が出來るかどうかさへ疑問だ、と私は思つて居る。

（完）

妄りに社會政策を採るべからず

慶應義塾々長　鎌田榮吉

先づ歐羅巴の思想の變遷をいふと、十九世紀の後半からは餘程一方に於ては私權を抑え、そして社會の團體權を強くせんとの傾向があつた。我々の少年時代、西洋の事を覺えた時に最早あつた。といふのは。本づく所は私有權の餘り強くなり過ぎたに因る。私有權は神聖なものと、法律の全力を以て之れを保護する、所が其法律を作る原勢力は最も多く富豪が有して居るから其爲に私有權は愈よ強くなる、富力の向ふ所天下に敵なしと云ふ有様となる、此に於て之を憂ふる聲が多く聞こえて來た。殊に英國の如きは財産の蓄積が多く、實は多過ぎて低減するの困つて居る場合が多かつた。それ故蓄積は勉めなくても宜いが、一般の幸福を進む

る樣分配に勉めなければならぬ有樣となつて居る、今日の處ては只一部分のもののみが贅澤をして、一般に平等に生活を樂むことが出來ぬが、是は金の足らぬ爲ではなく分配の方法の惡い爲てある。

先づ十九世紀の初からして蒸汽の發明が大分盛になり、交通にも製造工業にも適用して生産力が非常に進んだ、が此効果が一般に及ばず、利益は盡く少數者に壟斷されて如何ともし難い。元と人民の幸福は一般に分配せられなければならぬ。即ち利學主義者のいふ如く最大多數の最大幸福といふ事が謀られねばならぬ。經濟學者も斯樣いふ方針て勉めるべきが其職分上當然てあり、社會學者などいつても亦固より同じ考て研究せなければならぬものである。又例の社會主義的の議論にも色々あるけれども、結局其の社會が左樣いふ社會であるからこそ其のやうの主義の起る狀態なのてある。果せる哉近年其方の考が愈よ實地に近づき色々の方面に行はれて來た。けれども近來は共産とか財産均一などといふ突飛な考は鋒鋩を收めるに至り、其着實なるもののみが政策として採用せられる樣になつた。即ち大資本が大事業をし、それて社會に勢力を振ふ樣な事業、或は個人若くは個人の組合に持たせたくない、斯樣なものは都市とか國家とかいふものに持たせる事としたいといふ考て之を實行に現はすのが現實の狀態てある、即ち鐵道國有電車市有といふ如きが其最も手始めの一例てある。尙ほ其他の事業ても此種のものは公共團體又は國家が私有して個人又は私營團體に許さぬ事とする。何となれば之を許せば利益及勢力が一部に壟斷せられて多數の爲に大なる禍を醸すからてある。

其他に又色々社會政策が講ぜられる、例へば英國の如きは非常な放任主義、個人の自然競爭に一任する主義を取つて進んで來たのだけれど、此頃ては餘程社會主義的政策が進み、養老制度、幼年保護、學童給食制度、勞働紹介制度、勞働保險等色々のものが立法的に行はれる、今日の處獨逸よりも以上の事をやりさうな勢てある。米國亦然りてある。即ち社會政策の流行てある

其名は、集合主義とか、團體主義とか色々と名稱を付けるが矢張り馴化されたる社會主義といふても宜しい兎に角歐米諸國に於ては此コレクテヴイズムが大に必要になつて居る、其内にも慈善的の事は元と宜い事で性質上惡い事でない。併し一歩を誤つ時は幼年保護とか老年保護とかいふて各種の者に保護を與ふるが如きは各自の責任を忘れて人々の努力を無くし、勇猛精進の氣力を鈍くする、即ち懶惰主義に陷らしむる事となつて、慈善そのものの本來の目的を推行する事が出來ぬ、事は古來の經驗が證明するが今の歐米諸國に在つては政治家は其國の狀勢上如何しても之をしなければならぬ事となつて居り、しなければ政府も政黨も共に自家の勢力を維持する事がならぬ有樣である。

啻に然るのみならず又之を自由競爭に任すときは、只眞面目に働く勞働者でも全く失職の憂がないかと云ふに決して左樣はいかぬ。第一勞働者組合(トレード、ユニオニズム)の壓迫的制裁が勵行されて、働く時間も賃錢も、其最低度が定められて居て、それより以下で働くものは組合て、之を迫害して許さぬ事となつて居る、斯うすれば當然の結果として、その定率以下の勞力を有する勞働者は、失職の困難に陷る事となるから國家として此等を見殺しにする譯になる。如何に眞面目な勞働者でも組合を外づれては事實に於て使はれる事が出來ぬ。殊に勞働者中にも體力が弱くて滿足に人と人並の仕事の出來ぬものなどがあるが、此等は其事情に適應する丈の勞働時間と賃錢とであれば、働くべき仕事は幾らもあるにせよ、勞働組合の壓制が加はつて其仕事が出來なくなる。素と勞働者が自己社會の權利を維持せん爲から起つた事であるが。それが矢張り同じ勞働者仲間の或るものを壓迫する樣の事になるので、是に對して國家は只晏然と見て居る譯に行かぬ、又職業ある者でも今では凡てが動力でやり機械でやり、大工業組織になつて居る。斯くなる上は、それより生ずる結果として、只個人の競爭力にのみ任すなら、或るものは如何しても立ち行かぬ事となる、又色々の身體上の危險もあるから其保護も必要に成つた、又大工場組織の結果として都會に

多く人口の集合する事となる、是は今日の社會の狀態の自ら然らしむる所である、斯く成つては自由競爭の弊害は益々助長せられる、それ故之を國家で制馭し行く必要が段々迫るのである。要するに此の如きは歐羅巴が夫の舊制を打破して以來、個人の私權を固くせんと勉めた結果は大に顯はれたが其餘弊と新實業組織の影響とが斯る事に至つたのである。國は其爲に富みもし進みもしたが、又其結果として人間の仕事は機械仕掛となり、大都會生活となり、勞働組合が盛となる、從つて事業の獨占、即ちトラストなるものが盛になるから、それに對する政策が又政府に取つて必要となつて來る。

歐米の事情は右の通りとして日本は如何かと云ふに今歐米で非常に國家の手に回收せんと勉めつゝあり、從來個人の手に放任してあつたといふ事業は、我國に於ては初から國家がして居つたものだ、例へば教育の如き、歐羅巴では此頃になつて漸く統一したけれども日本では維新以來初めから統一してある。然るに翻つて我日本の經歷を見ると元から官權の强い國である、之を社會主義といふか、國家主義といふか、團體主義と云ふか從來から左樣いふ風の國柄である。其一例を云へば足利時代には德政、德川時代には棄捐と云ふ事が行はれた、皆漢學者流の仁政である、是は借金を帳消しする、即ち借りたものを返さずと宜しいと政府から布告するので、此布告の出た以上は債權者は最早や如何とも出來ぬのである。又或る程度以上の富豪が出來ると缺處とする、即ちコンフイスケイションである、財產全部の官沒である、其他全然私人の權利を認めぬから御用金などと稱して取りたければ何時でも取る其上幕府の金銀貨幣の改鑄又た藩札の濫發は債權債務を滅却して彼の德政棄捐と同一の作用を爲して居たのである。私人には權利は無い只國家の命ずる儘である。土地人民は君主の私有である、是れも實際は左樣な勝手には行かぬが少くとも、テオリーに於ては何時でもやり得る譯であつた。恰かも社會主義の理想に叶つて居る。その代りには國家は進歩せず、又常に貧乏である、到底

之を以て歐羅巴とは對抗し難い。それが俄に開國し文明制度を採用する事となつたから、新に私權を認め個人を認むる事となる、從來は土地は理論上國家のものであつたものを一般人民に地劵を與へる事ともなつた、それから一家の中にも文武の官吏を初として、單に戸主のみならず其子弟も亦自由に家を立て職業を營む事が許される。又公債證書をも面々に持つ事が出來る。又有限責任株式組織の會社が出來て面々其株の一部を所有する事が出來る。つまり王政維新の働は何かといふに、封建時代の國家の過强なる權利を破つて個人の權利を確認したものである、即ち精神的にも左樣であるが、物質的にいふも斯くせなければ進まぬのである。

丁度歐羅巴の方では既に個人的運動から集合的團體的運動に移らねばならぬ時に、日本では新に文明の方針を採り、元の集合主義を破り個人の活動を奬勵する事となつたのだから、丁度その入れ代りといふ形である。併し日本は主義だけは左樣なつてをるものの、實際に於ては矢張り國家萬能である。少くも是迄の政治をいふと左樣である。實際に於て權利を握るものは一部のもので、全體を代表した性質のものではない。それ故一部分を代表し一部分のものを保護する事はあらうが、全體の國民を保護しそれをして其處を得せしむる、即ち最大多數の最大幸福を得るといふ完全な組織にはなつて居らぬ、極めて部分的に少數者の利益を代表する組織となつて居る、是も勢ひ已むを得ぬが、兎に角今日は斯かる社會を爲し居るのである。

此の如き社會の變遷相違を見なくて、日本人は只無暗に歐米の眞似をする事となつて居る、眞似も事に依ては無論宜い、けれども其必要の有無を究めなくて、今は彼に斯樣な説が行はれて居るから我も其樣にしやうといふ。是は所謂モンキーズムである、猿猴主義である、眞似は必しも惡くはない、苟も眞似が實際の必要に當つて居るなら宜いけれども、其必要の有無を問はずに、恰も衣裳の流行を追ふが如く、學問政治の眞似をするのは實に恐るべきである。が日本人の眞似は

それである、毫も獨立の意見がない、英國の如きは金の溜まり過ぎ分配の點に於て不平均て困る處だから、貧民の爲めには少老年者の保護、學童給食、失職者の救恤といふ樣な事も宜いが、今日本て之を其儘眞似て行つたら如何てあらう、所詮國が潰れるより外仕方があるまい。英國とても爲政家は强ち宜しとは見て居ぬけれども致方ない、輿論の勢力てあつて如何とも致方ないのてある。然るに日本ては如何てあるか、事情が丸て違ふ、成る程社會主義といふものもあるけれども、それを國家に迫る程の實力を持つて居らぬ、それ故日本ては何も苦んて謂はれもなき歐米の政策を眞似るに及ばぬ。兎はいへ勿論私とても貧富に懸隔は付けたくない、少數の富豪が權力を專にするものは防がなければならぬ。金錢萬能の如きは大に防がなければならぬ、それ故それ丈の事に對して說を立て策を施すのなら同感だけれど、只或る一派の論者の如く、獨逸ては斯樣てある、英國ては斯樣てある、英獨て社會政策の爲には是程の金を掛けるのに日本は云々といふのは大變な間違てある。其樣な事に實は成るべく金は掛けたくないのてある、それも國が一旦間違つて來れば仕方がない、即ち幼老年者の保護とか學童給食とか職業交換等、社會に缺陷を生ずる事が多くなれば已むを得ぬけれど日本はそれ程迄には行かぬから、左樣な方面に金を使ふ必要はない。貧富懸隔といつても日本は未だ甚しくはない。是が目立つ程にあれば恐ろしくもあるけれど日本ては左程でない、多少富の多く或るものの手に在るのは免れぬ、然るに少しあれば直に社會主義の必要ある樣に思ふのは誤つて居る、日本には一體まだ大工業が起つて居らぬ、先づ紡績位のもので、それを除いては皆手細工てある、都市も左程に發達して居ぬ。即ちまだ貧富の懸隔の左迄大なるべき兆候を見ぬ。

特に尙ほ一つ考ふべきは、歐維巴の發達したのは蒸汽力を利用して大工業の出來、大都市の出來たに本づく、が之に代りて今度は電氣の時代だと思ふ。電氣となると從來の蒸汽の時とは餘程趣を異にする。蒸汽なら大規模に一個所てやればやる程利益に行くが、電氣

となると其動力を幾らても細かに分け又幾分か遠く迄送り得る。即ち面々の小工場に分配し、又家庭に分配し得る、斯樣に如何樣にも動力を細分し得るとなるとそれによつて營む工業なるものは、恰ゝ昔の家庭工業時代に戻る事も必ずしも出來ないとも限らぬ。

併し將來果して電氣工業が盛になるか、將た在來の蒸汽工業が盛になるかは其土地柄に關係する、處が日本は山國で水力は至る處に在るから電氣國となると思ふ。此に於て歐羅巴とは違つて日本工業の將來は大工場的とならず小工場的となる傾向がありはしまいかと信ずる。之を先づ斯うと見る。其上に、日本の人口の殆んど七割五分は未だに農民である、英國の如く人口は大部分が商工業に入り、農業は誠に小部分で、土地がすつかり草原となつて居る所とは大變に違ふ、特に日本は小農の國である、此後如何樣の變化を見るか知らぬけれども、英國の如き自由貿易の政策を取るとは思はれぬ、として見れば此後田舍が明き空らに至る迄に都市集中が起らうとは思はれない。すると外國で現在起つて困つて居る樣な現象は日本にも其通りには起らぬ、今歐米諸國に見ゆる諸現象は大半は蒸汽動力採用の結果なのだから、之に代ふるに電氣動力を以てすれば起りはせぬ。それ故日本に於ては歐米其儘の社會政策を蹈襲するは愚である、又將來にも其必要あると假定しても、何も急いで外國の眞似をするに及ばぬ、之をするのは我國民を救はんとして却つて其實之を困むる事になる。外國では貧富の階級が明かだから、租稅の如き富者より取りて貧者を救ふ事が出來るけれども日本では左樣でないから、只甲の貧者より取つて乙の貧者を助くる丈のもの、即ち勤勉者から取りて懶惰者を養ふ事となる。此の如き政策を陋守するに於ては全國民を化して盡く懶けものとして仕舞ふ。

又日本の學者は外國のものとさへ見れば、新發明の樣に思ふけれどもそれは誤つて居る、例へばレーボア、エキスチエンジの如き、別に珍らしくもない日本には昔からある。幡隨院長兵衛は其巨擘である桂庵だの口入屋だの色々社會機關が社會的に出來て居る。勿論そ

れ等には幾多の弊害もあるけれども、然らば之を無くして別に新に之に代るものを作れば凡ての弊害を除去する事が出來るかといふに左樣はいかぬ。それを何ても横文字に書いてさへあれば皆進んだもの宜いものだと思つて見る馬鹿な學者がたんと居るから困る。名が變つても其事實を能く調査すべきであり、又社會狀態に應ずるか否かを考察すべきである。無暗なモンキーズムをやると國が亡びるより外はない。

我歴史思想の三大流

文學博士　久米邦武

一

史學の本義を極軟かに話せば、「來し方行末を鑒み云々」の古い語があるそれてある。是は旅行に就いての語て、伊勢物語にも「いとどしく過ぎ行く方の戀しきに羨しくも返る波かな」といふ歌がある、是は昔し男東國へ行きけるに伊勢、尾張の間の海面に浪のいと白う立ち返るを見て讀んだとあるので、自ら過ぎ行く方即ち來し方を回想し、行く末即ち行き着く先途を計つて進む旅人の情趣が現はれて居る。過去を回想して進むといふ此意識は獨り人類のみてはなく凡ての動物に備はつて居る、犬猫でも燕雀でも、屹度元と來た方を記憶し、それを計つて行き着く處に行き着き、又元へ立ち戻る事をする。即ち生きとし生けるものに盡く備つた機能であるけれど、更に人類になると獨り旅行のみに於てゝなく、其全生涯に處するに於ても左樣である、即ち前代人の爲したる過去の經驗を後人に傳へ、後人は又其經驗によつて當來の事に就き其安全と成功とを計り、益々其生活と事業とを發展させて行く、人類

に此機能の存する所が即ち其萬物の靈長たる所と稱して宜からう。謠曲賴經の歌に、「來し方行く末を鑑みて遂には返る仇波の、歸らぬは古、止まらぬは心盡しぞよ、此世とても旅ぞかし」とあるのは前の伊勢物語の歌を轉化して更に之を人の一生に移し、吾人の此世の事業も亦旅行同樣來し方行く末を鑑み、心を盡して成功を圖るべきものといふ意味を含むで居る、是が即ち史學の大價値の存する處である。

それ故歷史思想は人の天然の機能に具はるもの、即ち何んでも我生涯の生活、事業等凡ての事に對し、先づ過去の經驗に就いて研究し、其中より自ら行ふべきものを選擇して、扨て現在より將來に向つて畫策し、事業の末の末を圖つて萬全にそれを成就せんと思ふものである、さりながらこれが又人々の境遇によつて、兎角安逸を好み苦勞を避くるといふ傾があるから、その本具の機能が發達せずに、往々普通動物と餘り變らぬ處に止まり、行く末を誤ることが少くない。即ち今も言ふ如く人生の行事は旅行同然であるが、其道しるべの爲にとて早い時代から歷史紀行なるものが書き殘されて居る。けれども其所謂歷史紀行なるものは恰も人々の境遇に從ひ、國々によつて自ら違つて居る、即ち日本の如き萬物の需用豐足して生活の苦勞のなかつた國人は、其殘した歷史紀行も皆甚だ氣樂な思想に充ち、吾人に價値ある經驗を語りて之を以て行く末の勝利を得しむる効力あるものは甚だ乏しいのである、例へば普通の紀行文でも前に擧げた伊勢物語の歌の如く、僅か都を離れて伊勢、尾張迄も踏み込めば、早や波の立ち返るを見て己れも故鄕に歸りたくなる情趣を語つて居る、此感興は單に旅行の歌として見るには面白くもあらうけれど、之を此世の旅行に譬へて考へるなら、早や其事業の第一歩に於て倦怠の念を生じ、中絶するのである、薄志弱行を意味するものである、之を然らずとするも、總じて日本の古き紀行文は氣樂な感興が勝つて居る、同じ伊勢物語に、萬葉集の「田子の浦ゆ打出て見れば眞白なる富士の高嶺に雪は降りけり」の歌を燒直して、「時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の

子斑らに雪の降るらん」と詠んだのは、只其時が夏の初の景色だといふ經驗を語るに過ぎぬ。又西行法師が、「道の邊に清水流るゝ柳蔭暫し立ち寄り涼み取りけり」と詠んだのは、是又如何にも旅行の實況で、旅するものゝ皆經驗する所であるが、詮ずる所氣樂な詩的思想に過ぎぬ、即ち凡てが此類で、日本に出來た古人の紀行なるものは此世の生活又は事業に就いての經驗に益を與ふる効力概して乏しいといつて宜い。是が歷史となつても亦同樣、至つて氣樂な生活の間に書き傳へられたものだから來し方行く末の鏡となる効力は甚だ乏しい。

其極めて古代に溯れば日本書紀と古事記の二つがあつて共に傳はつて居るが、此兩書を把つて能く〱考へると自然に其處に史學の趣が兩流に岐れて居る。即ち一は文學的の物語りで一は政治的の記錄である、それも極めて古い處は紀記共に物語で成り立つて居るが、此流れが中世から近古迄の歷史思想の多分を支配して居る、古事記といふ書物は徹頭徹尾物語である、書紀は應神天皇の時に百濟から歸化した阿直岐、博士王仁の兩人が文氏、史氏を賜はり、古い文書を集め、歷史を編纂せんと企てた時に、物語の外に歷史的材料を餘程集めたものと思はれ、頗る其材料が書中に含まれて、聊か歷史的になつては居るけれども、古代の處は先づ物語である。物語の起因は出雲に語部といふものがあり、又筑紫の海神家其他には譯語といふものがあつて、早くより文筆を扱ふを專業として居り、是が國史の源となつて居るけれども、日本の古い人種は如何にも南方の暖帶地方より移住して此福地に蕃殖したものと思はれ、思想が甚だ氣樂である上に、詩歌舞樂を嗜む性質のものが多數であつたと見え、凡て言語でも文字でも、其先代よりの經驗を傳ふる樣が詩的思想に傾き、今の神話とか祝詞とかいふ樣の句調の中に歌を插むで語を操る、即ち古い歌調で事と語りとを綾なして語つたものが歷史材料となつて居るから、之を國語で書けば無論の事、漢字を當て嵌めても大陸地方に依つた歷史の如くにはならぬ、即ち伊弉諾、伊弉冊の尊

の初を古事記には、「伊弉諾尊伊弉冊尊に問ひて、汝の身は如何に成れると問ひ給へば、答へて、我身は成りて成り合はざる所一ところありとの給ふ、伊弉諾尊の給はく、我には成り餘れる所一ところあり、故に我身の成り餘れる所を以て汝が身の成り合はざる所を塞ぎて國土を生みなしては如何とて、天の御柱を行き廻らんとして汝は右より巡り我は左より巡らんと約し、さて巡る時に伊弉冊尊先づ、あなにやし、え、男との給ひし後に、伊弉諾尊があなにやし、え、少女との給ひぬ」とある。全くの歌物語である。之を書紀には漢文に記して、「陽神左旋、陰神右旋、分巡國柱、同會一面、陰神先唱曰、憙哉遇華美男焉、陽神不喜曰、吾是男子、理當先唱、如何婦人反先言乎、事既不祥、却更相遇、陽神先唱曰、憙哉遇華美少女焉、因問陰神曰、汝身有何成耶、對曰、我身有一之雌元之處、陽神曰、我身有雄元之處、思欲以我身之元處合汝身之元處、於是陰陽初遘合爲夫婦」とある。漢字を嵌むるに因つて稍々陰陽和合し男女夫婦の道を生ずるの理を說きたるらしく見えるけれども、畢竟歌物語の譯文に過ぎぬ。是より以下の神代の卷を究めて見るに、凡て先づ此類の物語を集めたものに過ぎぬ、神武天皇以下に至つても古事記は依然昔の物語、又は祝詞調の詩的思想を以て操つた國文であるから、國學者等は頻に興味を感じて喜んで居るけれども、つまる所矢張り小說的物語より成り立つたものである、書紀の中には漢文に譯したといふのみでなく、物語ではない、零碎な史的記錄が其中に交つて居る。此處等が國學者からは漢籍を心として居るとて嫌はれるけれども、記錄的歷史の體面を爲さんと勉めた價値は却て其中に存する、が此書紀を編纂する頃迄は史學思想が文學に傾き、文筆を鼓舞して歷史を構造せんと勉めたもので、既に神武帝紀から、兩漢書其他の文を綜合して作つた所が多く、雄略天皇に降つても尙ほ史的材料に乏しく、其天皇の遺詔といふ長文は、是よりも時代の後れた隋の高祖仁壽四年の遺詔を殆んど其儘に取つてある、顯宗仁賢にも莊子の逍遙遊、史記の魯仲連傳、

後漢の安帝の時の奏文等が其儘に書いてあり、聖德太子の頃からして漸く眞の記錄的歷史となつて居る、即ち記紀二書の體裁の此通なのは、古代の日本人の歷史思想が物語に傾き、只詩的思想若くは小說的趣味を喜んだもので、來し方行末を鑒み、過去の經驗をもつて將來の助けとするといふが如き硏究心の甚だ微々たるを證する、斯くて下つて天智天皇の律令輯定以後となり、初めて歷史が物語的と記錄的との兩流に分れたのである。

二

此兩流を概括していへば、古事記を受けて更に萬葉集の詩的思想が加はり、斯くして平安朝に及んで種々の物語となり、それが頻に宮中に行はれて婦人は勿論男子さへ此流の歷史思想に興味を持ち、常に相集り語りもし批評もしたものである、其時代から物語本は非常に多く著はされた樣だけれども、其中今日に迄傳はつて居るものを少し類擧すれば、伊勢物語、大和物語などは短い物語を集めたもの、竹取物語、空穗物語は長い一篇の昔物語で、今の小說である、此外に畫物語もある、後の繪卷物などは是に屬する、又世物語といふものもあるが、是は其時代の有り振れた事を物語るもので、今昔物語、宇治拾遺物語などは其類の世物語を取り集めたもの。即ち今でいへば世物語は世話狂言本の類である、此等の物語が一條天皇の頃に至つて段々に發達し、終に源氏物語が出來、其源氏物語の語る節調子が又曲舞白拍子の舞となり今の謠曲と迄なつたが、一方には更に別に歷史的物語を作つた。古事談或は著聞集の如きも物語である、源平盛衰記が平家物語となり、それが又太平記となる、足利の代には夥多しく種々の太平記が出來、遂に淨瑠璃となる。それを竹本節で語り、繰り人形を使つて身振をさせ、遂に歌舞伎芝居となつたが、此の如きは皆源を古事記に發した一の大流である。

一方には又書紀の後に續日本書紀が選まれ、それから後紀、續後紀、文德實錄、三代實錄が出來たが、此六國史は全く記錄的の歷史である、それに近江の律令

か大寶令となつて全國の法律と定まり、從つて三代格延喜式も選せられる、令義解の著は當時の大學者小野篁も其編者の一人てあつたが、同時に參議滋野貞主も、詔を受けて諸儒と共に當時の古文書を集め、秘府略千卷を著したといふけれど、其書は今日傳はらぬ、菅相公は六國史其他によつて類從國史を輯められ、又保元平治の頃に、有名なる大學者藤原俊憲(信西入道)は本朝正紀を著はしたが、此等は皆朝廷て政治を取扱ふに當り、前代の經驗を調ぶる爲のものてある、即ち來し方行く末を鑑むる爲の歴史てある。

此記錄的歴史の現はるゝに從つて大學の博士は自ら明經、紀傳の兩道に岐れた、明經學は漢籍の經書を表とし、歴史を裏として研究する學問て、此學問からの出身者が諸省の主典となる、其最も秀れたものは即ち應神天皇以來王仁の後の文氏の司つた外記となる、之を辨官の下に書類を司る局務といふ、淸原氏は即ち其家てある、又紀傳道より出身したものは一に之を文章生といひ、是も各省の主典に任用される、其最も秀れたものは博士て、阿直岐の史氏の後を繼ぎ、辨官の下に史官となる、之を官務といふ。昔の太政官に於ける政事の文書の起草は必ず此局務か官務かて司る事となり。そして中務省て天子の詔勅其他を起草する。表向の文書を掌る内記も先づ此記傳家から任選される事となつて居た。紀傳學の學問振りの明經學と異なる所は、歴史を表として經書を裏とする所に在るのて、重に文筆を學ぶ所から文章生と稱へられたが、今ていへば歴史を主とした文章家てある、菅相公も亦此紀傳道の出身てある、菅家の學は即ち紀傳學てあるのだ、又大江氏も紀傳家てある、それ故此局務官務て政治の文書を司り行いた末、鎌倉の幕府を起した時に、政治の師範として頼朝の迎へた大江廣元は元より紀傳學の家の人てある、廣元の兄仲原親能は明法學家、即ち法律家の問注所の先祖三善行信は算道家、即ち算術家てあつたが、此等の人々が集つて幕政を始めた爲、當時の鎌倉の歴史を編輯した、是が東鏡てある、其後南北朝の亂から此等の記錄的の學問が衰へて當時の歴史は編纂されなかつたけれど

も、鎌倉の貞永式目、足利氏の建武式目などは武家に取つては大寶令同様、即ち武家の大法となつたものである、是が即ち紀傳的歴史の一大流の概略である。

三

凡て日本で書かれた古いものは、歴史でも記録でも日記でも、男文とさへいへば漢文に書くこと丶なつて居たから、政治其他人事に必要な古來の經驗古例を記し止めたものは、皆日本流の漢文で書き、それを朝廷を初め政府の凡てに於て深く研究した所から、自ら又秘傳句訣がある、之を有職故實といつて、學ぶには骨が折れ、容易に理解し難い上に、興味が又乏しい爲、普通のものは其一斑をだに窺ひ得ず、戰國時代に至り、朝廷の勢力の衰ふると共に其研究も遂に衰微し終つた、即ち記錄的の流は次第に涸れた有様になつて居る、が德川時代となつても、凡て實務に關する事は昔の官務、局務同様、其記錄、文案、日記等の故實に練達した者でなくば事に當らぬ事となつて居た、此處が史學の眞價値の儼然として存する處だが、只昔の政治は凡て機密を主とした爲、學者は只文學の花のみを吸ひ廻る蜂蝶の如き者と爲つて來た。之に反して物語流の大流は、既に平安朝の初から、宮中男女の間に弄ばれる、之を語るには節調子等の必要があるから凡て假名文字で書き表はした、當時假名文は女文と稱し、女に適した文章とされたもの、即ち國語を其儘に書き綴るので、深い理義なく只興趣多き物語類は是で書き傳へたものだから、漢文漢字の能く讀めぬ人も之を自ら讀みもし又人から聞きもして興味を感ずる事が出來る所より、貴賤男女の凡てに通じて愛讀された、其爲此種の書が最も廣く世に行はれ又今にも多く傳はつて居る。古き時代は勿論、南北朝以後の亂世となつても、此物語によつて幾分の史料を得、過去を知り未來に處するの歴史思想を養つたもので、此一大流は今日に於ても尙ほ人々の頭腦を支配し居るのである。斯る譯からして能く考へぬ人は、日本の歴史といへば凡て物語様のものと速了するけれども、實は物語は一の娯樂に屬し、其材料として幾らか事實を取入れた迄ほかない。

此物語と歴史との差別の國學家等に判然せぬ所から、中古の事實の誤解されたものが頗る多い、茲に其一例を引けば、有名な婦人の淸少納言が同じく有名な書家の藤原行成と私通し居たと言ひ做されて居る。此誤解の起りは物語といふを普通の話と同樣に混じたからてある。是は淸少納言の枕草紙に書かれて居るので、原文は左の通りてある。

頭辨の職に參り給ひて物語などし給ふに、夜いと更けぬ、明日は御物忌みに籠るべければ丑になりなば惡しかりなむとて參り給ひぬ。

斯う書き起してあるが、是は一條天皇の定子皇后の皇宮職の曹司に任まはせた時の事て、行成は辨官から藏人頭を兼ねて居たが、當時有名の學者且つ能筆て、其職の曹司に參り、物語の御催に加はつたもの、多分行成自らも其物語をした一人てあつたらう、が翌日は禁中の御物忌日だから、自分は頭辨故物忌に籠らねばならず、て夜半を過ぐれば歸らねばならぬといふ事なので、少しも其間に色氣を含んだ事はない。其次の文には。

つとめて藏人所の紙屋紙引き重ねて、後のあしたは殘り多かる心地なんする。夜を徹して昔物語も聞こえ明かさんとせしを鷄の聲に催されていといみじう淸げに、裏表に言葉多く書き給へるいとめでたし

とある、是は當時有名なる能書家、今でも能書家として推稱され居る行成が、紙屋紙といふ美紙を取り、引き重ねて書いたといふ文の概略て、今夜は是より段々進んて昔物語を聞かば一種興あらんものを、鷄鳴になり相になつて、聞き得ぬことの殘り惜しさよとの情をすら〳〵書いたといふだけの意味てある、扨て其次に。

御返りに、いと夜深く侍りける鷄の聲は、孟嘗君のにやと聞こえければ、立歸り、孟嘗君の鷄は函谷關を開きて三千の客纔に去れりとあれど、是は逢阪の關の事なりとあれば。

夜を籠めて鷄のそらねははかるとも世にあふ阪の關はゆるさじ

心かしこき關守は侍るめりと聞こゆ、又立歸り、

逢坂は人越えやすき關なれば鷄もなかれど明けて待つとよ

とあり云々

斯うある。是が今にも猶ほ人口に膾炙する淸少納言の行成と歌を詠みかはした事實だが、其實何でもない、只行成が物忌に行くとて職の曹司を去る時に、淸少納言は鷄鳴より史記の孟嘗君傳を聯想した、是も多分物語で聞き覺えた事を其際憶ひ出したのてあらうが、それて問答をした末に、即座に「夜を籠めて」の歌を詠みかけたによつて、行成は立歸り返し歌を詠んだ丈の美談てある、此樣に少くも此一條だけに於ては一寸も私に情を通ずるなどいふ事はない、それを、物語といふ

を只話すると同樣に解するから、職に宿直して居る淸少納言の許に夜更け迄も話した譯に見え、扨は可怪しいと思ふ。北村季吟の春曙抄には實際其樣に解釋して、「返しに此關は明けて待つぞといふは、淸少納言に言葉質を取られ、言ひやらん方なきに負けて言ひ倣したる歌なり、既に相談らふ中なれば六かしき言葉咎めも取り合はぬ心なるべし」といふ樣に、全く行成が淸少納言に忍び會つた樣に解して居る。凡て淸少納言をば其著した枕草紙に就いて、紫式部とは違ひ、數多の公卿達にあつたなどいふのは、皆此類の誤解である。其次の文に倘ほ。

初のは僧都の君の額をさへ突きて取り給へるとき、後々のは御前にてさて逢坂の歌は詠みへされて返し得せずなりにたる、いとわろしと笑はせ給ふ、扨て其文は殿上人皆見て知ろとの給へば、誠におぼしけりとは是にてこそ知りぬれ、目出たきこと人の言ひ傳へぬは甲斐なき業ぞかし、又見苦しければ御文はいみじく隱して人につゆ見せ侍らぬ志の程を比ぶるに等しうこそはといへば、斯う物思ひしりていふこそ倘ほ人々には似ず思へば、思ひ限なく惡しうしたりなど、例の女の樣にいはんと思ひつるにとて、いみじう笑ひ給ふ。

とあるが、此僧都とは皇后の弟隆緣といふ人て、是が行成の書いたもの故淸少納言に額を突いて懇望して持ち歸らるゝ。歌の贈答に就いては此の如く皇后の御前て色々に批評あり、御笑ひになり、殿上人も皆其文を見たといふなど、二人が忍びあつたといふ陰事などとは思ひも寄らぬ事實である。

　此例の如く王朝の時代からして物語て歷史思想を得て其批評をする、宮中などは特に之を以て文學的の趣味とされた程てあるから、此風習は後々迄も衰へず、武家の世となつても、凡ての武人は平家物語を聞いて歷史思想の資料とする。足利の末の武士などにも那須與市の扇を射た物語に落涙したものもある、或は佐々木高綱の宇治川先陣に感じた杯、德川期の初頃迄の史學思想は此物語によつて全く支配されたものである。

　此樣に上古より日本の歷史は物語的と記錄的との兩流に岐れて來たが、記錄によつて政治其他を判決するには、何れ其時の主務者が種々に批評もし、從つて判斷を加へて實行に移す迄にはそれぞれ研究を加へる所から、即ち有職故實の學をも爲したけれど、物語は元來娛樂的のものであるから、過半は拵え話或は噓談もある、て今鏡といふ書には最後に、作り物語の行方といふ題を起し、

左のみ形も無きことのなよび逆る藻鹽草、掻き集めなどといへば、其答にもろこしにもふみ作り、人の心を床しくし、暗き心を導くは常の

事なり、妄語などといふべきにあらず、白樂天といひし人は七十の卷物を作りて文章をいろひ、譬を取りて人の心を勸め給ふなど聞こえ給ふも、文殊の化身とこそ申すめれ、佛も譬喩敎などといひて無き事を作り出して說き給へるも虛妄ならず、

とあり、されば此書は作り話とは知りつゝも批評判斷をしたものである。

四

歷史を鏡といふは歷史を批評して來し方行く末を鑒みるの意味に據るもの、其初は支那の稍々古い時に起つたものだが、最も世に知らるゝのは、宋の司馬溫光が編輯した資治通鑑である、是は殷時代の詩に、「殷鑒不遠、在夏后世」といふ句から取つたもの、即ち前述の「來し方行く末を鑒みる」と同意味に因んで書名としたものである。此司馬溫光は我朝の白河帝時代に當るが、それより程なく日本にも大鏡なるものが出來、次いで今鏡が出來、それから武家の東鏡なるものが出來る、北朝の末には增鏡が出來、又水鏡も出來たが、此等の中東鏡の外は、皆假名書きの女文であるから、一見した所物語に似ては居れど、多くは過去の經驗を將來の心得にと書き置く意味を持つて居る。是が即ち今列記し來た如く、鎌倉の頃より物語的歷史思想の中から新に源を發して一つの流を爲したものである、併し其流を究むれば源は更に古く、既に一條帝の頃よりして、物語を聞くにも其批評判斷をしたものだとの事が枕草紙に見えて居る。それは長德三年、前の孟甞君の故事談よりは一年後の事、定子皇后の猶ほ職の曹司に居らせられた時で、斯う書いてある。

暮れぬれば參りぬ、御前に人々多く集ひ居て、物語り善き、惡き、憎き所などをぞ定め、諍ひ生じ、仲忠が事など御前にも劣り勝りたることなど仰せられたる、先づ是は如何にと斷はり仲忠が童生の惡しきを切に仰せらるゝぞといへば、何かは琴なども天人なるばかり彈きて、いとわろき人なり、帝の御娘やは得たるといへば云々、

とある、此仲忠は空穗物語の無形人で、仲忠の大將とて若子君といふ人の子。空穗の俊蔭が女の腹に生れた人、幼くて母に孝あり、樣々の奇特がある、琴を能く彈いて帝の一の方を其北の方に下し給ふべき宣旨の下つた事があると、其物語には記してある、其仲忠の事を皇后にも座にある男女と共に批評あり、善惡勝劣の判斷を面々にも淸少納言にも問はせられたのである、即ち物語の後に、其事の事實と否とに拘らず、其作に就いて直に歷史的判斷を下し、之を物語の興味の一としたもの、斯くして是より歷史批評には鏡といふ名を付ける事となつたのである。南朝の時に北畠親房卿が

日本歴代の皇史を批評を添えて書かれたのは即ち此種の批評的歴史であつて既に一つの流れを成し、愈よ徳川時代に至つて大日本史又は本朝通鑑などの著述が出て、從來の記錄的歴史に幾分の批評を入れ史的判斷を下す傾となつた、それから靖獻遺言の如き書も出來る、或は山陽の日本外史の如きものも出來る、此等は皆其傾向を以て進み、玆に一つの批評的歴史といふ大流を成し、之を最も史學の吃緊な事として居た。

五

左り乍ら德川一代の此類の歴史批評は、上來其淵源を說き來つた如く、源頭は浮誇なる物語歴史に在り、それに批評判斷を添えた流が、更に宋儒の性理學と抱合し、古代の「孔子春秋を作りて亂臣賊子懼る」といつた孟子の言葉などを經として更に道德的判斷なるものを其上に添えるといふ。其樣の考から起つたもので、夫の記錄的歴史が有職故實となつて研究され、專ら古記錄、古文書、古日記等に據り、政治的に實用する爲に研究したものとは全く其原理を異にして居る。

凡て小說で成り立つた物語は過半拵え話で、中には全く無形人もある、それ故此の如きものに根據を置く批評的歴史なるものは、恰も只一般男女が慰みがてらに物語類を見聞し、それに興味を覺えて、遂に一優一劣一善一惡の判斷を下すと何の擇ぶ處なきもの、之を眞に古來より吾人の祖先が事實と認めて來た複雜な事柄に就き、其過去の經驗の發達して現在の時局を爲す所以を見、それが將來に向つて更に結果する所を豫知すべき、眞成の歴史學として成立する其批評判斷とは元來の流が異なつて居る、霄壤の別がある。

けれども前に上古よりの我國柄を語つた通り、日本は百物豐足して生活も事業も餘り苦まずに成し遂げられて來た處から、國民の氣質が氣樂である、從つて其時代其國民の書き表はした歴史なるものは、今眞正の歴史的批評判斷を下さんとするに材料たるべく力が餘りに微弱である、まだ一般動物の來し方行末を計つて行動する位の知識と甚だ接近して居るので進歩の度が幼稚なるを免れぬ。今は時世既に發達し世態益々複雜になり、凡て人の生活狀態も昔と變つて次第に困難を訴へる時代で見れば、依然其昔の歴史思想界に定住し、物語的の批評に道德判斷を附け加へた見解などに、無用な興趣を樂む樣では、其萬物の靈長たる、史的知識を具備する人類の本分に於て、顧みて甚だ忸怩たるべき次第ではないか。



數奇傳（二）

——一小文學者の自敍——

田岡嶺雲

（五）自由民權論の感化

(1) 維新の兩意義

維新の革命には二樣の意義を含む、一は王政復古の名によつて象徵せられたる國民的統一、一は尊皇討幕の呼號によつて標示せられたる民權擴張、即ち是である。

王政復古は、即ち所謂黑船の浦賀來航よつて刺激せられたる我が國民が、對外禦侮の必要上、國家の政令を一途に歸し、全國民の力を擧げて其の祖國の强盛を圖らざる可からざることを自覺したるより起つた叫びである。外に對して擧國一致の必要を自覺したる我が國民は、其の擧國一致の爲めには、一方に主權の在る所を唯一にすると共に、一方に全國民を此の一主權者の下に平等なる國民たらしむるの時勢の急務たることを感得した。即ち德川幕府を顚覆して四民平等の政治を布くの理想に向つて驀進した、即

ち其旗幟とする所は尊皇討幕であつた。故に討幕は權勢の尊貴者に對する微賤者の反抗たり、閥閲に對する輕格者の攻擊たり、寡人政治に對する民權主義の勝利であつた。

一方に於て國民的統一、一方に於て民權の擴張、此の二樣の意義を有することに於て、日本維新の革命も亦之を佛蘭西革命以後の歐羅巴を震撼せる大風潮の餘波として觀ることを得る。但當時の風雲を叱咤して起つた所謂志士が果して自ら之を意識して居たや否やは疑はしい。而かも其の維新以後直ちに擧行せる政治によつて之を觀るも、彼等が少くも世界の知識に零無ならざりし事は察するに足る。五ヶ條の 御誓文は輿論政治の炳乎たる大宣言では無いか、四民平等の宣布は階級制度の滅亡では無いか、廢藩置縣は即ちフユーダリズム撤廢では無いか、剪髮廢刀は即ち世界主義の輸入に外ならぬでは無いか。維新の革命は決して全く世界の風潮より離隔して起つたものではない。

然れども外來の影響を受け得る爲めには、之れを受納するに堪ゆる內面的充實の既存を要とする、日本の民權主義と雖も決して一朝一夕にして卒然として生じた者ではない。

藤原氏の公家政治より源氏の武家政治に遷れるは、既に是れ貴族政治の敗北である、武家政治は關白政治に比して素樸簡捷なる平民的色彩を帶びた者である。建武中興の失敗の原因は、之を更に公家政治に引戾さんとした、時勢の推移に逆ふたる所に存する。足利氏は稍々貴族的臭味を帶びてゐた、而かも時代の思想は決して土佐繪の繪卷物に見る如き堂上的の纖麗で無く、雪舟の山水が示す如き禪僧的の疎宕であつた。文學の上にも、源氏物語に於けるが如き淫靡なる大宮人の情事の描寫でなく、狂言に於けるが如き、一般平民の日常茶飯事の反映を見た。足利氏の衰亡と共に階級思想は全く勢力を失ふた、戰國は即ち槍先の功名時代である、今日の下司下郞も明日は一國の主たり得る時代である、草履取りの猿面冠者は太閤關白となつた。戰國の無道德無政府の時代を收拾したる德川幕府は、

馬上に取れる天下を禮敎を以て治めんとした、最も階級的なる朱子學を一種の正敎(オーソドックス)として異學の禁を嚴格にしたるも、見よ、滔々として横流せる平民主義の暗潮は遮遏し得なかつたではないか。德川時代は浮世繪の時代である、黄表紙の時代である、淨瑠璃の時代である、幡隨院長兵衛が男を以て鳴り、紀國屋文左衛門が豪遊を以て著(あら)はれた時代である、武士の二本差は祇園豆腐の夫に喩へられて、所謂素町人の金權の前に其の威を失へる時代である。縱令表面上に武士は切捨御免の暴威を蓄へる一種の特權的階級であつたにせよ、實際上既に市民の爲め平民の爲めに其鼎の輕重を問はれて居たのである。纔に武士の權威を支へて居たものは封建の制度であつた、而して封建の制度は德川幕府の存立と始終すべき運命を有する者であつた。異舶來航によつて暴露せられたる德川幕府の無力は、卽ち德川幕府の乘ぜらるる所であつた、朱鞘の浪人は德川幕府を顚覆した、德川幕府の顚覆に次で來る者は卽ち封建制の破壞、封建制の破壞は卽ち武士の滅亡、武士の滅亡は卽ち階級制の撤廢、階級制の撤廢は卽ち平民主義の勝利である、維新の革命は卽ち鬱積せる民權主義の爆發に外ならぬのである。

故に板垣氏が唱道した自由民權論は、其の名は新らしき譯語なるも、其の實は必ずしも西洋輸入の思想では無い。自由民權論を征韓論の腹癒(い)せと見るのは誤りである、征韓論無くとも、板垣なくとも自由民權論は興るべき筈の者である。自由民權論は維新革命の必然の連續である、而して立憲政體は又封建制破壞後の國民が必ず到達すべき自然の要求である、維新革命は自由民權論によつて結尾し、立憲政體の設立によつて大團圓たるべきものである。

當時自由民權の説一たび呼號せられて天下翕然として響應せる狀を知る者は、其の説が如何に深く人心最奥の琴線に觸れた者であつたかを知るに足らう、此の説が其の名の如く單なる翻譯の附燒刄に過ぎざりせば、決して斯く迄人を動かし得るものではない、恰かも國民の民權主義の熱望に投じたからで無くて何てあ

らう。

板垣退助なる名は救世主の如く仰がれ、自由民權の四字は御題目の如く田夫野人の口にも上つた。

吾等の少年時代は恰かも自由民權論が颱風の如く吹捲く眞最中であつた。殊に土佐は板垣氏の生地である、謂はゞ自由民權論の本家本元である、土佐の青年は殆んど宗教的熱狂を以て自由民權論に對した。吾等の如き少年も亦此風に感染するを免かれなんだ。

(2) **長髯胸に垂るゝの人**

板垣氏の岐阜遭難は確か予が十二歲の時であつた。凶報一たび新聞紙上に傳へられし時、吾等少年も此一代の偉人の回春の一日も速かならんことを祈るの情に堪へなかつた。方に一場の演說を終へて、雷の如き喝采の拍手を後に聞きながら、悠々と歩み去らんとする背後より、人あり追ひ近づく、忽ち見る匕首一閃、銀蛇闇に流れて鮮血胸部よりサッと迸る演劇的光景を想ひ浮べた。道のために血潮の洗禮を受けた板垣氏は、吾等の眼に更に大なるヒーローとして映ずるに至つた。

板垣死すとも自由は死せずとの一語は吾等の血を湧かしめた、內藤魯一なる名は刺客相原を取つて抛げたる事によりて吾等の記憶に深く刻まれた、泰山北斗なる語を始めて覺えたのも、此の時副島氏の見舞の電文によりてであつた。

此の岐阜の遭難の二三年前、と思ふ、板垣氏が國に歸つたことがあつた。予は此時始めて一代の聲望を負ふた此の偉人の風采を視、又其の演說を聞いた。

演說會場は前に言つた玉水新地の劇場であつた。當時は集會條例によつて學校生徒の政談演說傍聽は嚴禁せられて居たるに拘はらず、吾等は如何にもして偉人の言貌に接せんとする好奇心に驅られて、法禁を犯して會場に潛み入つたのである。吾等の如き臆病者が警察官の眼を竊むの大膽を敢てして迄も其人を見んとしたのでも、當時に於て如何に板垣氏が世間より重んぜられて居たかゞ想像せらるゝではないか。

夜の暗さに紛れて入口に張番する警官の眼を免れ得

た者の、今にも後より一喝の下に襟首を捕へらるゝ憂目を見はせぬかと、疑懼の念に責められながら、小花道の傍に小さくなつてゐた。

板垣氏の前に數人の辯士が出たが、唯一人髮を肩迄延ばした色の白い背の小造りな岩神某といふ人の精悍な姿のみを記憶してゐる。

最後に板垣氏が演壇に起つた、吾等には何を演說したのか譯らなかつた。唯、頬のこけた、丈の高い、頭の髮を眞中から分けて、同じく眞中から分けた長い髯が、身を振る毎に胸に搖(ゆる)いだ、着物は黑地の洋服であつたと覺えてゐる。

(3) 獨身の畸人

當時土佐に於ける自由民權論の中心は立志社に在つた、(立志社は啻に土佐に於ける中心たるのみならず、亦全國に於ける自由民權論の中堅であつた)、而して此の立志社を中心として高知の市街の各處に數ヶ處の所謂『社』なる者が在つた。社とは今日の用語を以てすれば靑年團といふべきものである、但し當時の靑年團は報德宗の勤儉節用の如き爺(ぢゝ)むさい說法に耳を傾ける如き者では無い、眉を昂げ眥を決して、天下の政治を論じ、國家の經綸を談ずる客氣と血氣とに富んだ者であつた。此れ等の多くは固より自由民權主義の結社で、唯一つ共行社といふ水野寅次郎なる人によつて設立せられたる者のみが所謂官權黨として反對に立つて居た。

我が村にも此頃一の社が設けられた。住荒した草葺の、柱は歪(ゆが)み檐は傾き、天井もない屋根裏は、煤に黑みて雨の漏るに任ずる廢屋(あばらや)であつた。

此家の主人は村で畸人として聞えた人であつた。妻もない、子もない、親戚(みより)もない獨り者で、吾等の知つた頃は最う五十餘りの老人であつた。酒が好きで、醉ふと獨りで問ひ獨りで答へ獨りで唄ひ獨りで舞ふ。時には屋根の上に升(あが)つて、バラ錢を撒(ま)いては近處の小供に拾はする事もあつた。

其の老いて寂しい孤獨を酒に紛らした生活には、或は悲しい來由(いはれ)があつたらう。其の無欲恬淡な悟りには、

叩けば或は深い哲學もあつたらう。併し當時の吾等にはそんな深い事は譯らぬ、唯邑の人のいふ如く、畸人といふ者とのみ心得てゐた。

其人が死んで、住み人のないのを、其のまゝ社に利用したのてある。斯ういふ人てあつたから、固より家に修繕手入れをするなどといふ事はなかつたらしい、家は荒るゝまゝ庭も荒るゝまゝに任せたのてあらう。夫が又亂暴な若い者の集まり場處となつたのてあるから堪らない、寒ければ羽目板を剝がして薪にする、家は益々荒れる許りてあつた。

此の小相馬御所に、二十四五歲より吾等の如き十二三歲の者迄が毎夜集まつては本を讀む、詩吟をやる、擊劍をやる、相撲を取る、時には棒千切を持つて、隊を組んで練り歩いては、他町村の者など、出會頭に喧嘩をする、併し予等は此の喧嘩を賣りに出る時には毎もソッと家へ歸つて一處には行かなかつた。

此頃靑年の間に讀まれた自由主義の敎科書とも言ふべきものはスペンサーのソシアル、スタチックスを松島剛氏が翻譯した四册もの、社會平權論て、次では西周氏譯の奚般の心理學なども必讀書の一てあつた。予も人並に社會平權論を買つては見たものゝ、小學校生徒の學力で理解せられやう筈がなく、唯宗敎家の聖典に對すると同じく有難いものとして敬虔の念を此に捧ぐるのみてあつた、何ても道義感情といふ言葉が澤山あつた樣に記憶する。此の社會平權論は一册が確か二十錢てあつた、二四八十錢の金は米が石五六圓に過ぎなかつた三十年の昔、殊に吾等の如き小供としては不相應な大金てあつた、此れを買つて貰つた時は、寶物ても掘當てた樣に嬉しかつた。

明治二十八九年頃てあつた初めて松島剛氏を靑山に訪ねた事がある。社會平權論の譯者として久しく其の名を欽仰してゐた氏に對した時は覺えず襟を正した。

日本人の著書ては杉田定一氏の經世新論(?)が最も愛讀せられた。『馬を鳥拉の第一峯に立て』といふ如き調子の悲壯慷慨な物て、發賣を禁止せられてゐたから、予等は之を傳寫した者だ。「嗚呼三千五百萬の兄弟よ」

と書起した國會請願の檄文も朗讀的に諳誦せられた、詩ては波蘭滅亡の歌などが最も愛吟せられた。

(4) 三尺の童子

此頃は自由主義の宣傳時代て、從つて言論が最も盛なる時代であつた、就中最も行はれたるは演說て、雄辯法の練習は當時の青年に一種の必習課程てあつた。怒濤に向つて其の辯を練つたといふデモスゼニスの刻苦は模範として仰がれた者だ。

元來土佐人は南國の民の癖として、實行よりも理論に趨する傾がある、理論に趨する者は辯論を好む、況や時勢が辯論を要求する時代てある。土佐人が比較的に雄辯なりとして知らるゝは、此の辯を好む性癖と、聲音の較ゝ明快なるとにも由るべきが、當時の青年が競つて演說に習うた事も亦、一の原因として觀るべきものならんと信ずる。

今想へば慚愧千萬てあるが、吾等も屢々時の流行に感染れて演壇の上に而かも公衆の前に立つた。固より學生は政談演說を禁ぜられてゐる、學術演說の名を以て殆んど定期に會を開くのてあつた。會場は村の小學校の習字教室。學術演說は單に名義に過ぎぬ者と認めてゞあらう、警察官が三名位臨監する、演壇の側に席を設け、机の上に御用提灯を列べて吾等の演說を筆記する、聽衆も常に三四十名はあつた。

予は演說者の中の最年少者で、演壇に立てば首のみが卓上の上に出てゐる許りの歲頃（固より背も低くゝはあつたが）てあつたから、演壇に立つは立つ者の、一貫した議論を胸中に藏してゐる譯てはなし、直に言ふ事が支離滅裂になつてしまう、何を言つたか、何を言つて宜いか譯らなくなる、何時でも行詰つて途中て演壇を下りるのが例てあつた。此んな小兒の譫言までも眞面目に筆記せねばならない警察官を窃に氣の毒に想つた。

或時此んな事があつた、予は聞き覺えに覺えてゐた『三尺の童子も亦之を知る』といふ語を、得意にもなつて述べ立てた。壇を下りてから他の人々から自分が三尺の童子ぢやないかといつて散々に冷評された。

自目蛇物に怯ぢぬ此の少年時代以後、予は自己の訥辯を自認したると、及び面を公衆の前に曝すことが厭なのとて、演說といふ者は殆んど絕對に爲なかつた。

岡山に新聞記者をしてゐた頃、總選擧があつて、其の時犬養木堂氏の前座を勸めた、此の時も途中で聽衆と喧嘩をして下りた、岡山を辭して東京へ歸つた際、石川半山君の開催に係る講演會に出席して、又例の如く演壇の上と下とで評論を始めて厭になつて止めてしまつた。予の演說は何時でも尻切れ蜻蛉になることに極まつてゐる。予はどうしても演壇の人たる資格がないらしい。

(5) 水は方圓の器による

予が十三歲の時であつた、高知に自由主義の共立學校といふが設立せられた。

此頃土佐の中等教育の學校としては縣立中學校の外に海南中學校なる者があつた、此海南學校は舊藩主の保護の下にあつて、陸海軍々人の豫備教育を主としてゐた。新設の學校は元、立志社に一種の英語講習所ともいふべき者があつた、其の連續とも見るべき者で、地理歷史數學に至る迄一切を所謂原書で敎へる英語專門の學校であつた。最上級の教科書としてスペンサーの社會學やミルの自由之理の名が規則書に揭げられて在つた事は、頗る予の心を躍らした。

予は此學校に滿腹の希望を繫けた、小學校を退校して入校する事となつた。幸に少許り英語の素養があつた。爲めに一級上の學生中に編入せられた。此頃多少なりとも英語を學んだ者は、中學校か又は海南學校に在學した者で、皆吾等に比しては夐かに年長て、且つ漢學其他の學問に於て夐かに秀てゝゐる人々のみて、從つて此等の人々に追從するには、吾等の學問も知識も餘りに幼稚であつた。

入學して間もなくの事である、作文の題に『友を擇ぶの說』といふのが出た、小學校氣習の失せぬ予は『水は方圓の器に從ひ人は善惡の友による』と書き起した稚氣滿々たる者を作つて塗板に書いた。滿場は噴飯して笑つた、予は此時程侮辱を感じた事は無い、血がサ

ッと顔に上るを覺えた、其の後も屢々此の事て同級生の愚弄の的となつた、予は自己の學力の足らざるに發憤して、如何にすれば彼等の笑を買はぬやうな文章を作り得るに至るべきかを考へた。

予が家に家不相應に藏書があつた、百册許りの唐本の通鑑綱目、四十册の三國志等を大部の物として王陽明、魏叔子の文鈔の類に至る迄可成多くの漢籍があつた。此は叔父が其の微細な扶持米の全部を擧げて蒐めたもので、予等が此れから得た利益は頗る大て、又恐らく予の成人後の運命を決したのも此の影響てあらう。

此の叔父は維新後大阪の兵學寮て英語を學んださうて、英語の本も多少はあつたが、夫は教科用書類の物のみて、漢籍とは比較にならなかつた。

毎年土用に蟲干をするので此の藏書の書名だけは略暗んじてゐた。庫に入つて古文眞寶を搜し出して、殆ど諳記する迄之を熟讀もした。其後何かの題で、韓退之の『物其の平を得ざれば鳴る』に擬した樣な文を作つた時は、前半は剽竊に近いとして戒められたが、後半にはいくらか圏點が附いてゐた。其の以來予は作文に趣味を持つ樣になつた。

此の學校に一年許り在學して、グードリッチの英國史、ミッチエルの大地理學、コロネルの地文學、ロビンソンの代數學等を習ふまでに進んだ。固より譯讀を主とする所謂變則てあつた事は言ふまでもない。

十四の夏、予は長兄に連れられて大阪に遊學することゝなつた。

（六）郷關を出づ

(1) 悲しき汽笛の聲

『男兒立レ志出ニ郷關一、學若不レ成死不レ還』當時盛に諷誦せられた此の詩は尠からず少年間の青雲の志を刺激した者てあつた。自由民權論に浮かされてゐた青年の政治熱は、國會開設の大詔の一下と共に較々醒めて、志を講學に向くるに至つたものであらう、笈を負ふて上國に遊ぶことは青年の間の一流行となり、父兄の許

を得ざる者は、維新前の志士に倣ふて、脱走と稱して竊に家を脱れるを以て誇とするに至つた。

予も父母に遊學を請ふた、當時長兄は大阪の商船學校に、次兄は東京に大學の豫備門にゐた、邑の誰彼も上京した、親戚の者にも脱走した者があつた。予は燃ゆるが如き熱心を以て父母に說いた、許されざれば脫走すると脅迫した。父母はセメて十五になつてからとの意見であつたが、終に予の請を容れて大阪に遊學することを許された。

大阪は國に近いといふ事と、長兄が居るといふ事と、加之大阪の官立中學校は、其の前身の專門學校時代に、兄弟二人が籍を置いた因緣があるといふ事から、終に此の官立中學校に入學する筈て、暑中休暇に歸省した兄に連れらるゝ事となつた。

家族に送られて汽船に乘込んだ時は、宿望成就に氣も心も勇み逸つたが、愈々汽笛がポーと鳴つて、船が動き出した時には、流石に悲しかつた。

未だ幼い頃であつた、兄の上阪を船に見送つた事がある、其の頃は三菱が海上を獨占してゐた時代で、土佐通ひの船にまで高等船員には西洋人が乘つて、水夫には黒人も居た。家人に手を曳かれて甲板の上を步行いてゐると、背の高い、所謂唐人が後から來て、予の手を引ぱつた、予は恐ろしさに家人にしがみ附いて離れなかつた、スルと予等の目には珍らしい菓子を持つて來て予の頭を撫てゝ往つて了つた。其の時に比ぶれば、此時の遊學する予は我ながら成人びた者に想はれた。

(2) 南國の河童

船は神戸に着いた。船暈の醒めきらなかつた故でもあつたらう、初めての旅裝の、神戸の宿屋は黴臭く穢しかつた。

大阪の宿は谷町通りの薄暗い家であつた。田舍の晴々とした明るい天地から、俄に竹を植えた小庭に面した北向きの一坪にも足らぬ陰欝な一室に閉ぢ籠められて、息苦しい樣な感じがした。兄一人の外は言語も風俗も目慣れぬ人のみて、國訛りの口をきくのさへ遠慮

勝ちてあつた。五月となれば水に泳ぐ裸身を南國の日光に曝して、顏より足の爪先まで黑焦げに焦げたる予を、兄の、客に指して河童の樣だと笑はれた時は、今更のやうに身を顧みて其黑さを耻ぢた。

兄は夜になると予を殘しては外出して、晩くまでも歸らない事が數々あつた。予は、寂しさと心細さとに眠りかねて、毎も闇の中で忍び泣きに泣いた。宿の女中が、氣の毒がつて、よく來ては慰めてくれた。或時、予を可哀想なとおもつた餘りか、或は兄を困らせる惡戲半分であつたのか、予を兄の往き先へ車で送りつけた。西側の灯の華やかに明るい街の裏通りの家であつたと覺える、二階に上ると、廣い座敷に燭臺の光眩く着飾つた女が侍して、兄は同宿の陸軍少尉の人と、酒に興を遣つてゐた。予の東西も別らぬ他郷に只一人を恃みとする心細さをも察してくれず、自分は樂しさうに酒を飲んでゐる兄が一圖に恨めしく思はれて、予は兄の傍に坐るや否やワッと泣き出した。兄も場所柄といひ此には大に弱たらしい、予を細長い小座敷へ連れてこんで、添寢をしてくれた。予は直ぐに前後も知らず寢入つて仕舞つた。

此事は後までも能く家人の笑ひ話の種になつた。

(3) 山羊のやうな好老爺

予の入學した官立中學校は、大阪城の大手に面した加藤清正の邸跡と稱せらるゝ處にあつて、正門の横には清正の手栽と傳へらるゝ老松が時勢の變をも知らず顏に榮えと茂つてゐた。其頃大阪には中學校が二つあつて一は府立、一は此の官立の夫で、後者は模範中學校として文部省の直轄に屬し、從つて府立などよりは一等を抽んでたものとせられてゐた。教師にもマストル、オブ、アートやバッチエロア、オブ、アートなどの外國大學の肩書を有つた人や、又中學師範學校(今の高等師範)の卒業生なども數人居た。此んな事は、當時の中學校には外に例の無い事であつた。此の學校は我等の在學中に、東京大學に對立する關西大學設立の豫備として大學分校と改稱し、後更に又今の第三高等學校となつたのである。

予は此校の最下級(八級)に入學して、英語はＡＢＣより、算術は加法より習始めたのであるから、所謂輕車に駕して熟路を馳するが如く手易しかつた。勢力の餘裕は游戯として發現する、學課の上の餘力は内氣なる臆病なる予を相當な彎貊者に仕立上げた。

予は入學すると同時に寄宿舍に入つた。寄宿舍は青年舍と幼年舍の二つに別れて、十五歳以下の者は幼年舍に入る規則であつた、勿論予も幼年舍に入れられた。幼年舍生は學資金を學校に預けて、水曜と土曜とに、買物の品目、價格を書出して會計から入用なだけの金を受取ることになつてゐた。而して別に一顆五厘の菓子パンを四つ宛買つて貰へた。

此の一週兩日に我等幼年生の爲めに寄宿舍の舍監室に出張する會計の人は、極めて恬淡な、而して極めて親切な、予等にもかういふ祖父があつたならばとおもはせる、山羊のやうなアゴ髯をもつた好々爺であつた、添田壽一氏の嚴君て、氏が西洋留學よりの歸期を樂んで待つて居られた。我等は能く請求書に附け掛をしては、其錢て、西洋小間物と西洋菓子とを賣つてゐる老人夫婦の店(我等の間に『おばアとこ』と呼び慣はしてゐた)の奥の間へ上りこんでは、菊型につつたカステラ製の菓子を食つたものだ。買ひもせぬ品物に受取を書かせて、歸舍して其を差出す時には毎も、此の仙人の樣な老人を欺くことに良心の苛責を感じた。

寄宿舍へは又校醫が毎朝出張した、實際に鼻の下の長い厚い唇の垂れ下つた顔のダラ氣たやうな人であつた。極めて人が好いので、何でも我等の云ひ通りに聽いて呉れたからかも知れぬが、醫術は餘り上手では無いやうに我等には想はれた。怠けて學校を休みたいとおもふ折には、廊下を駈足をして、診察場の前で手を振つて脈搏を急にして醫者の前に出る、夫て舍監へは病氣として屆けられる事が出來た。

學生は地勢上、自然に、近畿の者が多かつた、西南の役に『又も敗たか八聯隊』と謠はれた如く近畿の者は概して柔弱であつた、此間に伍せる武骨なる吾等は雲客月卿の殿上人に對する木曾の冠者の如き者てあつ

た。吾等の非力なるを以てしても、强氣を以て彼等を壓するに足りた。弱者あれば茲に暴君を生ずる、學校にも暴君がある、小學校時代も共立學校時代も、常に臆病と年少のために人の暴威を揮ふに屈從してゐた予は、此時に至つて初めて一種餓鬼大將の味を覺えて、多少我儘を振舞ふ樣になつた。

『得意』の風に拂はれて、幼年時代の陰鬱な影は、次第に心の上に薄くなつた。恐らく予の一生に於て、最も明るい最も快活な時代であつたらう。

夫でも自分の手で蒲團や蚊帳を疊まねばならぬ時、又は外出から歸つて着替へた着物を行李に始末せねばならぬ時など、親の側ならばと、沁々と國戀しく家戀しく、我知らず涙さしぐまるることも屢々てあつた。

(4) 火と水

大阪に居た足掛け三年間に、内本町筋を燒拂つた大火と、河内の洪水とに遭つた。

火事は寒い冬の夜であつた、寄宿舍の二階の窓玻璃に映つた焰の光が、闇を壓して今にも迫り來らんかと見えた。

翌日の午後、外出して燒跡を見た、下は松屋町通より上は谷町通に至る數町に渉りて、内本町筋は唯灰燼の丘であつた。

早速國許へ大火の旨を報じた、燒失の戸數が百以上にも及んだと書いた。國に居る頃高知の町が四十軒許燒けた、其を珍らしい大火とのみ心得てゐた予には、百の數は蓋し想像さるべき、數のマキシマムであつたらう。後で千以上だと知つた時は、今更のやうに空地多き田舍に比して都會の人家稠密に愕いた。予の數の觀念に疎いのは少年時代からであつた。

洪水は河内よりかけて大阪に及ぶ淀川流域を一圓の水國と化した大氾濫であつた。家が流れてくる、人が流れてくる、牛が流れてくる、天満橋が落ちた、天神橋が落ちた、浪花橋のみは其頃既に鐵橋であつたが、夫も危かつた。城の附近の小高い丘から東南を望むと、唯漫々と涯も無い濁つた海であつた。其時雨の未だやまぬ間に、水を見に淀河畔へ出やうとして、疾風に傘

を吹き抜かれた事を覺えてゐる、何でも連日の暴風雨であつた。

故郷の鏡川も屢々出水した、父はよく黑漆塗に金紋の陣笠を冠つては、雨を冒して、水量を見に出て往つた者だ。洪水にはいくらか慣れてゐたが、此事ほどの洪水は初めてであつた。

(5) 赤襟買ひ

此の洪水のあつた頃は、兄が實地修業のため外國船に乘組んで遠航の途に上つた後の予の身變へて、伯母が國から監督に上つて來た、釣鐘町に小やかな家を借りて、一時其處から通學してゐた。

近邊に講釋の寄席があつて、予は毎晩のやうに通つた。昆布茶に柿餅を噛りながら、國定忠治の話を聽いた。

初めて大阪に着いて間もなく、兄に連れられて神明の落語の席へ往つた事があつた、其の口早やに饒舌るのが、全然で鳥の囀づる樣で毫も意味が譯らなかつた。客の笑ひ崩れるのを見ても、何が可笑しいのかと怪訝な顏をしてゐた者だ。其折に比ぶれば此頃は餘程都會化した人となつてゐた。

同級の通學生で何時でも級の二番を占めて居る男があつた、(首席は山縣五十雄氏であつた)、吾等よりは二三歳ほどの年長で、漢學は級中で最も優れてゐた。予が通學するやうに成てから、此人と親密になつた。講釋も大概は一處に聽きに往つたし、小說を貸本屋から一處に借りて讀むこともあつた。予が詩を作ることを習つたのも此人からである、平仄の並べ方を覺えると三四人で作詩の會を設けて、各自の詩を冊子に書いては回覽して批評することなどもした。予は赤穗義士を詠じた長い古詩を作つて獨りで得意になつてゐた事を覺えてゐる。

此人は我等よりも年長であつたし、既に折花攀柳の風流を解して居たらしい。或時欺されて連れられて往つたのは、格子の中に紅い衣に映の好い白い顏の女が居並んだ家の續いた處であつた。其の或家の入口へ立留まつて此男が並んだ女の一人の手から受取つた長煙

管て煙草を喫むてゐると、奥の方から老けた女が出て來た、此男と何か小聲て話してゐたが、軈て予の方へ振向いて『赤襟買つてあげましよか』となぶる樣な口調て言つた。予は此言葉をきくと艶然とした、半ば恥かしくあつたのてある、拉とむる袂を振りきつてツイと表へ出た、通りがゝりの車に飛乘つて、後をも見ずに逃げ歸つた。

(6) 闇に迷ふ金剛山上

伯母は久しからずして歸國し、予は復、寄宿舍に入つた。

十五歲を越えても依然幼年舍に置かるゝ人達もあつた、併し予は規定の年齡に達すると、直ちに青年舍へ遷された。幼年舍の治安を害する暴れ者と認られたのてあらう予は青年舍中ては最年少者てあつた。

春の學期試驗後の休暇の折てあつた、寄宿舍に殘つてゐた青年生連中て、金剛山行きの遠足が企てられた。其朝は宵からの雨が降續いてゐた、九時頃になると小歇になつて、折々雲切れのした間から日が射すので、同勢十餘名結束して出發した。

金剛山の上は野宿同樣だと聞いてゐたので、各自に毛布を持ち、別に米の用意までした。糒て有名な道明寺を通つた時、菅原道實公が左遷の道筋だなと芝居て覺えて居た事を想ひ出した。陰晴定まらざりし空は、山の麓近く來た頃、漸く霽れた。何ても腰掛に色の褪せた赤毛布を布いた茶店の二三軒ある處に休んて、山上の模樣を聞いた。米や毛布は無用だと敎へられて、一切此茶店に預けることにして、愈よ身輕になつた。

山の麓に達した時は午後四時過ぎてあつた、春とはいへど陽暦の四月初てある、暮るるに間も無い。山上までは五十町といふ。一行多少躊躇いたが、終に意を決して登り始めた。

坂は險しい、雨に泥濘んだ狹い逕を喘ぎ／＼仰ぎ攀ぢた、谿に離れて上へ上へと登るのであるから、水が得られぬ、一同は纔に笹の葉に溜つた雨の雫を掬んて渇いた喉を潤しながら進んだ。予は幸に平生から生水を飮まぬ習慣があつたから、水の缺乏は左程苦痛ては

無かつた。

脚の强い人達四五人はズン／＼先へ行つてしまふ、取り殘された足弱連は五歩に憩ひ、十歩に休み、牛のやうに步を運んだ。胸を突くやうな阪の、壞れた處まて來て、二人許どうしても此處を登れぬ者が出來た。其他の者も皆疲れきつてゐる、先進隊の救援を仰ぐ外は無い。較餘勇の存じてゐる者を擇んで先進隊の跡を追ふ事となつた。予は山國に生れて多少山野の跋涉に慣れてゐただけ、足弱連の中では强い方で、此の使者の一人となつた。

同行者は二人、暮れかゝる山道を急ぎに急いだ。雲に掩はれた峯が重なつて、一つを過ぐれば又前に一つ立つ、路窮まると見えては、また轉じ、往けども往けども山頂らしい處へも出てねば、家らしいものも見えぬ、黃昏の色は次第に足許に逼つて、心細さは愈よ加はる。但處々に曝れ朽ちた馬の鞋と馬糞との落ち散りあるを見ては、道に迷へるにもあらぬことを確め得たる心地して、纔かに意を安んずる。

途は大なる林の前に盡きて、日は全く暮れた。我等は黑暗の裡を不知案內の林中に闇を冒すに躊躇はざるを得なかつた。茫然として佇立して如何にすべきかに迷うた。

忽ち林中に火の光が見えて、漸く我に近づいた。之を問へば則ち先進者の既に山上の坊に著して、寺男をして後れたる者を迎へしむるのであつた。

坊に到りて先着者に事情を語つて、偕に與に往き援ふ手筈を定めた。坊の主の好意に成る粥と水とを携へて坊を出でた。夜に入つてより風が勁くなつた、長鳴りをして頭上を吹過ぐる林の風は凄じかつた。先に立つ寺男の提灯の光に危なき足許を照らしつゝ林の中をて進んだ時、風に煽られて火が消えた、四顧只黑闇々である、進むも得ず、退くも得ない。已むを得ず坊の方へ向いて、一同で聲をふり絞つて『灯が消えたア』と二度三度喚いて見た、併し林に吼ゆる風の音に紊されて聞えるとも想はれ無い『たア』と谺が闇の中に反響するのみで有る。

他に策は無い、寺男を說いて坊へ歸つて貰つた、折柄の稻妻を便りに路を索めて寺男は闇の中を去つた。一同は路に踞して其再び引返し來るを待つた。

傘を持つたものもあつた、粥を盛つた膳を捧げて居る者もあつた、予は水の入つた土瓶を提げて居た。ピカリと脚の下の遙に遠い谿底から大きな稻妻が上に向つて光つた、見ると我等は削つた樣な懸崖の際に居る、一步を誤まれば千仭の谿だ、一同悚然として身を引いた。

寺男は松火を持つて來た、併し裸火は直ぐに又吹き消される恐がある。寺男に、再び坊へ歸つて十分風に堪え得る灯の用意を爲て來ることを賴んで、寺男に別れて我等は松火を振り照らして進んだ、一丁許り進むと松火は果して消えた、誰彼の持合した傘をも燃したが直ぐに燃え切つた。我等は再び闇黑の中に立往生することとなつた。賴むは誰寺男の還り來ることのみである、夫も慣れたりとはいへ暗の小路を、果して再び無事に坊まで還り得たや否やは疑問であつた。

一同は再び路傍に踞んだ、風に搖らるゝたび萱の名殘の梢の雫が、雨のやうに降りかゝる。日本傘は燃してしまつた、僅に殘れる洋傘に最合つて凌いだ、身體半分は傘の外にある、傘を傳うて襟から脊筋に沁み入る雫が氷の樣に冷たい。予等はまだ袷を襲ねて着てゐた、况んや高山の四月は途に梅を見た頃である。予等は寒さと空腹と疑懼の念とに慄へた。

其頃の金剛山には狼が出ると聞いてゐた、坊の主人も其說に裏書した。我等は骨に徹る寒さを堪へながら、幸にして狼に死せずとも、熱病に冒さるゝ位のことは免れぬと觀念した。一同も同じ心であらう、平生痩我慢を以て聞えた男すら、吐息の外は沈默して言語もない。風の音のみ獨り高い。

予は此時死ぬるかも知れぬと思つたが、死ぬる事を左程恐いとも考へなかつた、頭の中では唯後に殘つて我等の救援を待つ人々の上をのみ想ひやつた。彼等は予等の此かる事情の下に在ることを知らず、嘸や予等を待詫びて恨んでゐるであらう、どうかして彼等を救

ひたい、セメテは彼等に、自分等が、使命を果す爲めに及ぶだけの力を竭したことを傳へたいといふやうな考のみに滿たされて、自分の危險などは却て度外に措かれた。

人間は唯物論者が考へるほど利己的主我的の者ては無い、死生の間に出入する際、即ち「我」の上に最も暗惱に最も危急なる際に於て、却つて美はしい沒我の精神が閃めく、義務の觀念が最も強く全き心を支配することがある者である。兄からも後に同樣の經驗を聞いた。兄が機關長として乘組んでゐた船が紀州沖で暴風雨を食つた事がある、綱が機關のスクリウに捲附いて唯沈沒あるのみとなつた。其の時には自分のことも父母のことも妻子のことも考へない、只管に我が職務の遺漏なきことをのみ考へたさうてある。斯かる精神の發作を單に功名の念のみに歸するは恐らく妥當てあるまい、斯る際に於ける義務の觀念は、功名心よりも強いやうだ。

待てども待てども寺男は還つて來ぬ。我等が待つた時間は隨分長かつた、或は待つ身の、殊に苦しい境に居つた爲めに、特に長く想はれたのでもあらう。我等は終に待ち草臥れた、寺男は或は闇を辿る途中で不慮の事があつたかも知れぬ、此處に何時まて便々と待つて居ても果しが無い、空しく狼の餌食となるのを待つよりも、同じく死ぬるなら、寧ろ寺へ引返す手段を採らうては無いかと、一同て議を決した。

一處に來た以上は一處に死なう、死ぬ者と生殘つた者とがあつては死んだ者の父母に申譯が無いとは、一致した一同の決心てあつた。一列に成つて、前の者前の者の帶を各自に確と握んだ、一人でも谿へ墜落する者があれば皆も共に墜落するやうに死の連帶責任を負ふたのである。而して先頭に立つ一人が電光の閃めく度に前途を見定めて歩を進める、十歩乃至二十歩宛を進んては立止まつて復た次の閃電を待つ。此くして夫てもやゝ一町許寺の方へ近いた時、嬉しや灯が見えた。

地獄に佛といふ、恐らく此時の我等の嬉しさは其れ以上てあつた。一同は一先づ坊へ引揚げて、更に充分

の準備をして再び落伍隊の救援に赴いた。予は最年少者の故を以て特に許されて再度の行には加はらなかつた。一行十餘名が無事に坊の本堂に集まつたのは彼是れ九時近くてあつた。落伍隊の者は、使として出した予等三人が、途中て禍に罹つた爲め救援の來ぬものと信じ、野宿の準備にかゝつて居たといふ。脊のヒョロ長い、河内あたりの鈍樸な氣質の失せぬ男が、其時御念佛を唱へたといふ事が、長く我等の間の笑柄に遺つた。

予等の衣類は下まて濡れ透つてゐる、乾かさうにも、爐が一つしかなく、加之粗朶も濕つてゐて、燻る許りて少しも燃えない。坊ては蒲團を貸してくれぬ、廣い板間に莫蓙が二枚ある許り、予等は裸に戰へながら、濛々と眼鼻に沁みる煙の中を、冷たい板間に横臥になつた。

翌朝は寺男が五條へ下りて買つて來てくれた酒に勢をつけて、山を下つた。

「金剛山上の怪美人」と題して、山上の坊に美人が居て。貴顯の人々を手玉にとつたといふ話が、新聞に出てゐた事がある。此の美人は恐らく我等が裸て本堂て寐た時には、未だ生れてゐなかつたらう。

此の金剛山行きの冒險から乘氣になつて、大和紀伊の境なる人跡未到の大臺ヶ原横斷といふ大冒險を企てた。大臺ヶ原から富士が見えるなどといふ話が、少からず吾等少年の好奇心を動かしたものだ、而し計畫中に事が泄れて、學校から差止めの命令を喰つた。

(7) 官制改革と胃病

官制改革のあつたのは、予の十六歳の時てあつた。予等の耳に熟れた太政大臣、左右大臣の稱は廢せられた、總理大臣なる新名稱は何となく典雅て無いやうな感がした。卿は大臣と改まり大輔少輔は次官と呼ばるゝに至つた。千年來の故格は破られて、藤原氏一門の獨占に歸して居た三公の位は所謂下素人の手に遷つた。五爵の制が定められて夥しい新華族が出來た、伊藤博文卿は伯爵を以て總理大臣となつた。大寶令の官制を唐の模倣とすれば明治十八年の改革は歐羅巴式の模

倣てある、前者を支那文明採用の結果とすれば後者は西洋文明採用の結果である、前者は四境靖安の潤飾として現れ、後者は立憲政の準備の下塗りとして現はれたのである。此改革は伊藤卿の衒耀を好む性質を遺憾なく表示した華々しいものであつた。

此の官制改革と共に新に文部大臣となつたのは彼の森有禮卿である、卿の學政に對する施設は頗る高手的のものであつた、學校を軍隊視し、學生を兵卒視して、學生の取締に壓制主義を採つた。兵式體操は學校の課程となつた、寄宿舍は軍營組織となつた、朝夕の點呼が行はれるやうになつた、他人の室に入ることが嚴禁せられた、掃除が嚴重になつた、舍生は窓玻璃(ガラス)をも拭(ふ)かされた、反故を庭に捨てゝさへ處罰せらるゝ様になつた。寄宿舍生の自由は甚しく束縛せられた、舍監は舍生の細故瑣事にまで立入つて干渉した。從來の寛裕に慣れた予等は此等に對して不快を感ぜざるを得ない、予等の不快不平は種々の形によつて爆發した。

就寝の鈴が鳴り舍監の巡回が濟むで其の床に入つたと思ふ頃を見濟して、舍生は一齊に床を蹶つて起つ、騒々しい音を立てゝ上と下の廊下を一廻り跣足で駈けて、舍監の床から起上る頃はもう舍に歸つて元の如く寝てしまふ。或は隊を組んで運動場に出て、哄と喊の聲を揚げては目附からぬ間に引上げる。甚しいのは其罪退舍に値する唯一の嚴禁たる幼年舍への闖入を敢てする、夫も大ぴらに大戶を開けて跳りこんでは逃げて來る。此の様な亂暴は毎に、口喧しく干渉する舍監の當直の際に多く行はれた。

予は茲に於て世の治者たるものに一言したい。如何なる場合に於ても壓制は善政で無い、壓迫は唯反抗を激する、刑罰の人を威し得るのは或點迄である、其以上此を以て抑へんとすれば、するほど却て反撥を招くのみである。此の理は必ずしも更めて予の言ふを要しないほど平凡である、併し近時の我が政府の思想の自由に對する施設が、此の平凡の理を事新らしく言はざるを得ざらしむる者あるを哀む。寄宿舍の刑罰は禁外出であつた、此の禁外出は十五日が最大限で、其以上

の極刑は即ち退舎である。予は最小限の一日より累加して、終に十五日の最大限の禁外出を課せらるに至る程、犯則を屢々した。幸に夏休が來たので退舎だけは免れた。

舎監室の横の廊下の半坪許が禁外出者の牢獄であつた、授業後から晩食まで玆に押籠められて一歩も動くことを許されない。併し舎監の席からは蔭になつてゐたので、舎監の眼を竊んでは、差入れと稱して、下の梯子段の處から、外出した者が菓子を買つては毎日もつて來てくれる。運動が不足する上に、加へて間食することが續いたので、予は終に胃を害して仕舞つた。

官制改革は間接に予を胃病患者にした。予の運命は是より暗澹に入る。

新領土の夏

朝鮮の夏

古谷久綱

朝鮮の夏に就て一言せよとの要求は、自分に取りて光榮に相違ないが、又難問と云はざる得ない。何となれば第一自分の見たる朝鮮は過去の朝鮮である、隨て朝鮮に關する自分の知識は今日では最早時代後れてある、第二自分の朝鮮在勤中四回の夏が來たが、其內一回は內地で過ごしたから、所謂朝鮮の夏なるものに就ては、自分は僅に三回の經驗を有するのみである、第三夏期に於て自分は京城以外に出でたることがない、

若し偶々之れありとすれば、内地に往復する際、仁川、釜山、又は馬山浦に汽車旅行を爲したるに過ぎないからである。斯く説明すれば自分には朝鮮の夏は愚か、京城の夏に就てすら滿足な記事の書け樣筈がない、是れ即ち自分の難問と云ふ所以てある。

乍併又一方より考ふれば、凡そ觀察なるものは微を穿ち細を極むるに越す事はないが、所謂皮相の觀察も強ち捨つべきものでない。吾々が新らしき事物に接して忽ち抱く最初の感想は往々其眞相に徹底することがある。如何なる珍奇の事物も長らく目に視、耳に聽き慣れては、不思議にも珍らしくもなくなる。自分の朝鮮滯在は幸か不幸か其期間短かりし爲、自分が滯在中に珍らしく思ひし事は眞に珍らしく、不思議に思ひし事は眞に不思議なるかも知れぬ。識者及眞の朝鮮通よりは迂濶千萬と嗤はるゝかも知れぬが、自分は右の道理を唯一の頼みとして、何處迄も皮相の觀察、最初の感想を書く積りて、左に聊か京城本位の朝鮮の夏に就て記述して見やう。

水道の完成したる今日ては最早昔話と成つたが、吾々の初めて京城に赴任した當時、四季を通じて困却したのは、水の尠い事てあつた、殊に夏期に於ては筆紙に盡し難き困難を感じた。成程朝鮮にも日本より一ヶ月後れて毎年七月に雨期が來る、其季節には歳に依り雨量に差異はあれども、我國の梅雨と均しく隨分嫌に成る程雨が降る。乍併御承知の通朝鮮の山には樹木がない、折角天が雨を降しても忽ち土砂と共に河に流して田畑に氾濫せしむるに過ぎない。吾々の官舍が其中腹に在る南山と云ふ山は、幸に古來朝鮮王室の靈山として、斧鉞之に入るを禁じた爲に、一面に松林てはあるが全山花崗石て、降雨があつても容易に土地に吸收しない、隨て山腹に深い井戸を堀ることも甚だ困難てあるが、尠からぬ經費を懸けて偶々堀て見ても容易に水が出ない、其れだから京城の居留日本人は、以前から朝鮮人を使傭して雜用水には南山の谷々に僅か許り流るゝ水を汲ましめ、飲用水には長き時間と多大の勞力を費し遠く嶮しき山道を辿りて滴々岩間を漏れ來る淸水

を汲み來らしめたものである。斯の如き有樣の處に明治三十九年統監府が設置せられて、俄かに日本人の數が倍蓰したのであるから堪まらない、居留民團役所で小規模の貯水池などを設けて見たけれども、到底間にも尺にも合ふものでない、白衣結髮の韓人が幾十百となく、毎日毎日粗造頑丈なる天秤棒の兩端に、石油鑵の明空の鏡を抜きたるものを水桶として、南山の谷々に水を獵る狀は、實に奇觀であつたが、其れは其筈である、自然否偶然に餘程水の利を得た家でない限り、其頃は何處の家でも皆韓人に尠からぬ給金を與へて、日々必要の水量を汲來らしめたものである、家族の少き家や、一人の韓人をも傭ふ能はざる家は、附近兩三軒協同して一人の水汲を使用したものである、又韓人の方でも孰れの日本人にも使役せられず、獨立專門に水汲を業として、日々數軒乃至十數軒の得意先に水を配達する者もあつた。斯く大騷ぎを爲しても、谷川になり井戸になり供給すべき水の在る間は尚忍ぶべきも、七月の末より八月九月に懸け日々暑熱燒くが如き時期に際し、旱魃の長く續く場合には、何うにも斯うにも仕方がなくなる。谷川は枯れて了まう、井戸と云ふ井戸は皆鍵が懸かる。鍵を懸けても夜間に之を毀す處があるから番人が付く、處々に火の出てる樣な喧嘩が始まる。已むを得ないから統監府構内の井戸で聊かでも水の出るものは會計課で嚴重なる監督を加へ、豫め切符を附近の官舍に交付し、朝夕時間を定め、韓人では不潔にする處があるから日本人を汲みに寄こせとの嚴達が來る、書生を養うて居る家は固より書生を遣はすが、書生の居ない家は、堂々たる御主人公や、大丸髷に赤い手柄の奥樣が傷々しき御手で、水貰ひに御出でになる。斯うなると最早絶體絶命である、風呂などと贅澤な事は云ふて居られない。日本人の特質として何處の涯に行つても、三鉢や四鉢の植木は持て居る、猫の額程の空地があらば草花位は培養して居る、自分の渇死する場合は致方もないが、左樣でない限り之れも枯らし度ないから、臺處で食器を洗ふた水は一滴も捨てず悉く植木に與る。自分は斯の如き經驗を嘗めて、坐ろ

に日本の如き雨の多き國に生れたのは、天恵の一てあると思ふた。忘れもしない或る旱魃續きの夏に自分等夫婦が媒酌して某女を某士に嫁せしめた、其女は京城に里方が居ないから、結婚の當日拙宅で化粧せしめた、其當時吾々は風呂に入らざること既に拾日を越えて居たが、如何に何でも花嫁に一浴もせしめずして華燭の典に列せしむることも出來ないから、非常に苦心して遠方に水三荷(約六斗)を注文して右の花嫁初め家内一同久々にて行水し、浴場の流しの下には盥や「バケッ」を並べて洗水を受け止め、一夜其儘に冷やし翌日之を植木や草花に與つた、然り而して其水三荷の代價は勿驚金壹圓八拾錢なり。以上は京城の話であるが、聞く處に依れば平壤、仁川、釜山皆水には隨分困つた模樣てある、飲料水すら右の始末ては衞生も何にも有つたものてない、故に初代の統監は逸早く各地に水道敷設の計畫を定めて、極力其の完成を急いだ、其當時或は貧乏なる朝鮮に、斯かる莫大なる經費を抛ちて、「ハイカラ」なる施設を爲すにも及ぶまいとの非難の聲を耳にしないても無かつたが、朝鮮各地の水道問題は、其當時高襟とか蠻襟とか、其んな呑氣な問題てはなかつた、實に日韓人就中居留日本人の死活問題てあつたのてある。

序に京城在住朝鮮人の水に對する觀念を少しく記して見やう。京城の地形は四方繞らすに山嶽丘陵を以てするが故に、首要なる街衢は恰も擂鉢の底の樣な處に位して居る、而も下水の排泄が惡しく、井戸の構造が不完全なる爲、市中の井水は概ね强き鹹味を帶びて居る、朝鮮人は之れ全く數百年來京城の低地に浸潤したる糞尿の鹽分が井水に混入したるものと皆確信して居る、自分は果して此一原因にのみ基くか否や、特に研究もして見なかつたから、茲に詳說することも出來ないが、兎に角も朝鮮人町の井戸は大半鹹き水を有する事は事實である、此水は飲料にならぬのみか、石鹸が溶けないから洗濯用にもならない。然らば朝鮮人は飲料水は何うしたかと云ふに、此處にも亦水汲なる者が在りて、市中に指折り數へる程しかない比較的鹹味の

少き井戸より各戸に運搬したのである。故に京城の朝鮮人が古來淸水を尊重した事は非常なものである。京城附近の山谿より稀に滴り出づる岩淸水は、彼等之を水とは思はない、藥と思ふて居る、其證據には之を藥(ヤク)水(ムル)と名けて居る。今の總督官舍即ち以前の統監官舍、更に遡れば即ち帝國公使館の敷地に在りし建物が昔より綠水亭と名けられたるも、敷地内に藥水が出るからてある。斯の如く苟も藥水の出る處は夏期に於ける京城の名所娛樂地てある。年中惡水汚水に苦めらるる朝鮮人は、春先きより夏に懸けて、一家内老弱男女相伴うて、菓子、飴及石持の鹽干物を携へ、瓢(ふくべ)を半分に切りたる柄杓を用意し、暑を忍びて山阪を攀ぢ藥水の滴る處に到り、群集する他の人々と共に順番を作りて之れに近づき、一滴又一滴之を右の瓢に受け、其間多大の忍耐を以て樹蔭に憩ひて待詫び居る家族の傍に搬び來りて、倶に共に之を賞味するのである、斯くなると水も中々貴重てある、眞に藥てある、現に婦人の如きは先づ藥水を充分に飲みたる上は、之を手拭に浸し、頭痛、婁麻質斯等を去ると確信して、頭部又は四肢を濕すのである、斯の如くにして朝鮮人の一家族は酒氣一點もなくして、一日乃至半日最も樂しき「ピクニック」を爲すのである。

朝鮮人の如何に淸水を愛するかに就ては更に記述して置かねばならぬ事がある、其れは夏期三伏の候盛に行はるゝ濯足と云ふ事である。親しき朋友相誘うて遠く城門外に出て、淸潔なる水の多く在る場所を選び、先づ衣服を脫して、名は濯足と云ふも其實全體を洗ひ淸め、場所次第にては水瀧にも打たれ其れより携帶せる行厨を開き、上戸は夏期の飲物たる燒酎の杯を傾け、下戸は傍の冷水を味ひつゝ放論快談、詩作を爲す者もあり、歌ふ者もあり、舞ふ者もあり、終日無禮講を爲すのである。此遊は京城に於ては上下を通じ盛に行はるるのである、貴人富者は別莊又は知人の家に宿泊して三四日引續き濯足を爲る者もある、如何に貧賤なる者も三伏の内一日は必ず濯足の爲に門外へ出る、御抱の車夫ても一日丈けは公然主人に暇を請ひ、小遣錢迄

も惠まれて濯足に出懸ける、是れ全く清水が彼等に一種云ふ可からざるの快感と慰藉を與へるが爲てある。

以上概説したる事柄は孰れも皆一方に水道敷設せられ、他方に生存競爭の激烈なるに隨ひて、漸次廢れて行はれなく成るてあらう、否最早行はれないかも知れぬが、舊時代の朝鮮を見たる自分には、特に珍らしく感じたから先づ之を筆にした、是より他の問題に移らう。

朝鮮の山野も夏に成ると冬とは全く其趣を異にする、野も山も冬枯れに枯れ果てゝ、何處までも赤禿の山脈、堅氷の張り詰めたる大河小川、白雪に掩はれたる田畠を見て、如何にも物凄く、如何にも貧弱の感に打たれた者も、滿山の草皆緑に、方數里乃至數十里の平野皆見渡す限り稻を以て青く、緩かに流るゝ巨江皆舟運の便開かるゝ夏の朝鮮を見ては、如何にも別天地に在るの思なきを得ぬ。早い話が同じ京城ても冬期倭城臺に上れば、遙か彼方の外國總領事館、領事館が手に取る樣に見ゆれども、夏は館内一面に繁茂する白楊樹の葉の爲に、白堊赤壁の大厦高樓も全く見えなくなりて、竿頭高く各國旗の飜へるのみてある。序に記して置く白楊は特に京城の地質に適合するものと見へて、成木の盛なることと實に驚くの外ない、加之根元より梢頭まて其葉の繁く許り密生する爲め、日避けには最も妙てあるから、京城在留の日本人も西洋人も從來盛に之を其の邸宅の周圍に植付けたものて、今日ては夏期京城の一美觀を爲して居る。

朝鮮の夏は如何にも暑い、吾々の官舍は京城の中ても比較的高燥の位置に在つたが、毎日午後二三時頃は室内て華氏九拾三四度乃至五六度に昇つた、下町は定めし百度にも達したてあらう。唯聊か助かるのは空氣の乾燥して居る爲に同じ暑さてもカラッとして居ることと、極暑の期間が日本に比すれば稍々短きこととてある、此温度て蒸暑かつたから一層苦しい事てあらう。百度に垂んとする暑さては、實際何を爲るのも懶くなる。朝鮮人も日中は屋内に休息するものと見え市街も頗る淋しい。時々親しき西洋人などから五時の御茶に

招かれると、御親切に對しては濟まないことだが實際難有迷惑に感じたことも度々有つた。斯く暑さに苦む場合に魂も身に副はぬ程爽快に感じたのは稀に來る驟雨てある。朝鮮の夕立は實に壯觀てある偉觀てある、孟子の所謂大旱に雲霓を望むの時、油然として黑雲の起ると見るや、小石の如き大滴の雨が非常なる速力を以て落下して來る、其勢の凄じきこと篠突く雨とか盆を覆すが如しなどの形容詞では中々物足らぬ氣がする、斯かる驟雨て暑氣を一掃し去りたる後の心氣は何とも筆ては書けない、宜しく讀者の御推察を願ふ外ない。加之此驟雨は京城に取りては、天然の大掃除てある。之れが爲に大道、小路、溝渠、河川に堆積停滯せる汚物を洗ひ浚ひ漢江へ流し込むのてある。雨足の如何に強いかは、一夕立ある毎に統監官邸内の急勾配道路は特別なる排水の設備あるに拘はらず、路面に幾條となく小溝の如きもの現はれ、其都度多少の修繕を加へざれば、馬車を驅るに不便を感じたる事に依りても一通り想像が出來る。

自然は誠に好く出來て居るものてある。朝鮮の夏も日中は苦熱堪へ難きも、夕景より濕氣の無い得も云はれぬ涼風がソヨ／＼と吹いて來る。朝も定めし涼しいのてあらうが、京城の如く緯度の高い場所は、夏分夜の明け方も亦早いから、自分等の如き晏起黨は朝の涼しさを充分感ぜずして終つた。夜の涼しさは又格別だ。避暑にも出懸けず、海水浴も爲さゞる朝鮮の同胞をして絶えず蘇生の思あらしむるものは此夜である。偶々月明の良夜窓前に閑坐して、何處ともなく朝鮮人の吹奏する哀れぽつい胡笛の音を聽くときは、自分の如き鈍物も亦一種の感に打たれざるを得なかつた。京城ては漢江の涼船と云ふものがあるが、平壤の大同江も定めし同一の遊びが行はれて居るてあらう。漢江の納涼は朝鮮ては有名なもので俚歌にも讀み込まれて居る。之れは龍山迄出懸けて名にし負ふ大河の水に棹すのてあるから、寒い程涼しいことは涼しいが、夕陽に面して一里の道を龍山迄往き、夜更けて又一里返るのは考へものだ。日既に暮れたる後、倭城臺や泥峴の散

歩の方が結局眞の納涼になるのである。其れに就けても自分は常に京城にも東京の緣日の樣な夜店があれば、慰みに成つて良いと思つて居たが、自分の去る迄は終に行はれなかつた。

夏の夜朝鮮人町に行きて見ると一驚を喫せざるを得ないのは、大人も小兒も街路に莚を敷きてゴロ／＼寢て居る事である。京城の日本橋とも云ふべき水標橋上でも盛に寢て居る。貧民街の方面へでも行かうものなら町幅の狹い上に街路も殆んどないから暗夜には、人力車の通行は愚か、迂つかり散步しても人の頭や足を踏む虞がある。聞く所に依れば、中流以下の住宅は部屋も少く且非常に狹隘であるから、自然屋外に寢るのださうであるが、日本よりも遙に空氣が乾燥して居る爲に夜露の下りることも少いから、吾々の想像する程健康に害もないと云ふことである。幼時よりの習慣だから宜い樣なものゝ、如何に短い夏の夜でも、吾々が若しも此流義を試みたら堪まつたものではあるまい。其れに就けても嘗て耳にした氣の毒な話がある、京城に電車鐵道の敷設せられて間もない頃、「レール」が路面より少し高くて好個の枕であると思ひ、一夜一韓人が心地良く熟睡して居る處に、突然電車が全速力で疾走し來り、頭丈け粉な微塵に碎かれたと云ふことである。

夏の夜は朝鮮婦人に取りては中々忙はしい、吞氣に寢て居る譯に行かない。何となれば彼等には洗濯と云ふ一大任務があるからである。普通朝鮮人の夏衣は麻か白木綿であるから、大暑の候一日之を着て外出し、大汗でも發き暫らく坐はらうものなら、忽ちベト／＼クシヤ／＼に成つて了まう。其れであるから朝鮮の妻君連には夏は洗濯が一苦勞である、晝は則ち暑さを冒して衣類を洗ふ、洗ふにも市內の井戸は前述の通り鹽分があるから、遠く市外に出て淸水を探さねばならぬ。夜は則ち僅な夜露で濕して之に火熨斗を懸ける、隨て夏の夜何處の家でも細君の手は深更まで忙はしく働かざるを得ないのである。汗で思ひ出したが、極暑の候朝鮮人は汗で腕に袖のベタ付かない爲に我國の茶人が

篏める籐を粗らく編んだ腕貫の長いものを篏めて居る、之を籐吐手と云ふさうである。中には又籐衫と名けて胸膈及腹部全體と衣服を隔離するものを着て居る人もある。先づ籐の「チョッキ」を素膚に著ると思へば大差はない。是なら細君も幾分か助かるであらう。

次ぎには一見小問題の樣で其實大問題なる蚊と蠅とに就て一言しよう。朝鮮の他の都市は知らぬが、京城は下水の不完全と掃除の行屆かざる爲に、夏分晝は蠅の爲夜は蚊に攻められて、自分等は隨分苦い思をした。時々滿室蒼蠅拂難去とは斯の如き狀態を指して云ふものならんとツクヽ感じた事もあつた。又毎晩涼しく快よく成るにつれ、此蚊軍さへなくばと常に思うて居つた。此蚊と蠅とは衛生上最も注意を要するもので、之れが晝夜到る處に傳染病の媒介を爲すかと思へば、實に寒心に堪へぬのである。今蠅の多かつた一二の例を擧げて見れば、秋の央過ぎに成ると蠅が段々弱つて、天井板一面に附着して、身動きもせず靜かに死を待つ樣になる、其時吾々は之を箒て掃き落して疊の上て掃き集めて見ると實に夥しきもので、悉く之を火に投じて燒棄てゝ居つた。又或る朝鮮通の話に、夏朝鮮の田舍の飲食店に入りて大椀に盛つてある米飯を見ると、其色が黒い、之れは飯の上一面に群かつて居る蠅と其糞との爲てある、朝鮮人は箸て黒い部分を掻き除けて、下の白い部分を食して居ると云ふ事てある。餘り仰山な話だから、自分は果して事實か否か斷言を致し兼ぬるが、半分に聽いても大變てある、四半分に聽いても氣味が惡るい。乍併朝鮮人は蠅に對して頗る平氣なもので、嘗て故丸山重俊君時代に警察から京城の飲食店主に對し店頭に陳列する食物には必ず蠅除けを懸ける樣に嚴達したが中々實行せぬので、警察官は蠅が病毒を媒介することの如何に恐るべきかを懇々諭示した所が、其内一人の陰口が面白い、日本人は其れ程蠅か恐ろしいなら、強て蠅の多い朝鮮に居らないても皆早々歸國すれば良いと云ふたさうである。其れは兎も角も、自分は京城滯在中常に此蚊と蠅とを出來得る限り退治せねば、人口の増加するに隨うて非常なる害

毒を傳播するてあらうと恐れて居つたが、今春四月、二年目て京城に官遊して、下水の排泄も道路の掃除も、非常に良く行屆きたるを目撃して頗る痛快に感じた。二年前の彼の狀態を此程度迄改善する當局の苦心諒察に値すると共に、之が爲に日鮮人の享くる幸福は實に推量の出來ざる程てあると思ふた。是より京城名物の蠅も蚊も著しく少なくなるてあらう。蚊と云へば、朝鮮人は蚊帳を用ひぬ。每晚蚊軍の攻め寄せる頃を計り、盛に蚊燻しを以て之を追ひ拂ひ、各室の障子を締切るのてある。蚊燻しは上流社會では香を燒き、又蒼朮と云ふものを燻らすも、普通の家ては只木を燃やし其上に青草を懸けて盛に烟を上げしめるのてある。朝鮮には前陳の如く蚊帳は無いが、中流以上の家の障子は夏分目の大きい麻て張つてある。之れが晝は蠅除け夜は蚊帳の代用となるのてある。

此れから飲食物に及ばう。京釜鐵道開通後の京城は、飲食物の上より云へば、內地と何の異る處もない、魚鳥獸肉、野菜、菓子、果物の類に至る迄、先づ內地同樣と云ふて差支ない。若し彼地に產せざる物があらば、內地から必ず移入せられて居る。現に自分等の居た頃から東京流の鰻の蒲燒もあれば、大阪流に煮たる鯔も口にすることが出來、長崎流の「カステラ」も京城の菓子屋が製つて居つた。其頃ても某大官は多分馬關から河豚の煮凍ごりを取寄せて常食とせられて居つた。今春も山縣總監の晚餐會に招かれて席末を汚し、食後に不圖も向島の櫻花を示され、言問團子の饗應に與かつた。聞けば總監の御親族とか御友人とかが、新領土に重任を奉ぜられては、春が來ても隅田の花も見えまいからと云ふて、態々小包で寄贈せられたものだそうてある。斯の如く京城ては先づ日本の物は何も不自由はない。支那西洋の食料品も輸入稅の低い爲頗る潤澤てあつた。今後も尙ほ九年間は現行稅率て行くから朝鮮に居る人々は仕合せだ。夏分の飲物として朝鮮人は皆燒酎を用ゆる、酒は一滴も口にしない。日本人は內地より移入し又は釜山仁川邊て釀造する日本酒を飲むは勿論てあるが、中には日本酒はどうも下痢を催す處が

あると唱へて、夏丈けは葡萄酒のみ用ゆる人も尠くない。關稅が增すと此連中が差當り大打擊を被る譯てある。

朝鮮人は春、秋、冬は每日午前九時より拾時の間に一回と、午後四時より五時の間に一回、都合二度の食事を爲すのみてある。上流社會には稀に早飯と稱へて朝早く輕い食事を爲す者もないてはないが、普通は二回てある。然るに夏になれば何人ても必ず食事を三度宛する、即ち朝餐が八時より九時の間、晝餐が一時より二時の間、晩餐が六時より七時の間てある。彼等は夏好んて冷し素麵を食べる、又彼等が上下を通じて甜瓜を嗜む程度は、內地人には到底想像も出來ない。最も之を嗜む者は一度に拾五位平げる。何處の家庭ても老幼に至る迄皆之を好み、食事の代りに甜瓜を食して濟ます者も多い。京城ては甜瓜が出來ると米の需要が減るから米價が低る。中々東京の薩摩薯などと比較に成つた話てはない。長く舊韓國の宮中に奉仕した人の話に、夏に成れば每日千個內外の甜瓜が典膳司（大膳寮）に上納せられ、三伏の日は其都度壹萬以上も買上げられたものださうだ、是れは皆宮禁に奉職する臣僚に、一人に付三拾乃至五拾宛賜はる爲てあつたとのことてある。朝鮮人の甜瓜を愛することに就ては自分も面白い事實を目擊した、其れは或る夏の午後自分が知友兩三名と共に、京城より電車て龍山に赴く途中てあつた、單線だから或る場所て向ふより來る電車を待合はす必要がある、待合はすと云ふても其時間は二分か三分で五分とある筈はない、然るに電車の停止するや否や、車掌先生も運轉手君も申合せたるが如く、車の前後より飛び下りて、路傍の甜瓜店に走り盛に甜瓜の立食を始め、遂に行違ひの上り電車の發車したる後にて裕々と代價を拂うて滿面笑を浮べつゝ己れの車に歸つて來た。甜瓜は朝鮮中何處ても出來るが、京城附近ては京畿道の廣州果川等が特に有名てある。朝鮮の甜瓜は實際美味て價も亦頗る廉だ。克くは知らぬが最上等のものも一個貳錢五厘位て、其以下は壹錢のも有れば、壹錢に貳個のも、五厘に貳個のも有るらしい。

甜瓜商の之を賣る方法も亦近頃の言葉て云へば、振つて居るとても云ふものてあらう。彼等は幾百千となく之を途上に積み上げ、宛然小城壁の如くにして、顧客の來るのを待つて居る。自分は或る晩景散策して、街上不圖此瓜壁に賣主なきを見て、後方に廻れば賣主は今や盛に商品を食して居つた。之れが定めし彼の晩餐てがなあつたらう。自分は此の樣子ては甜瓜の二つや三つ盗まれても彼は氣付くまいと思つた。序に記して置く、朝鮮に產する夏の果物は、左程誇るに足るものはない。黄海道鳳山の梨は結構と云ふ事だが、產額も少く運搬も困難なる爲、頗る贅澤な者てなければ容易に口にし難い、林檎も不味てはないが、形が小さくて尚ほ頗る改良を要する。櫻桃(ゆすらうめ)、杏は流石に澤山出來るが特に其味を賞讃するにも當らぬ。獨り僧頭桃(スントウボクサ)と稱する毛無し桃は產額も多く味も亦捨て難いものがある。

最後に朝鮮人の年中行事の夏の部に就て見聞したる所を略説して此稿を終らう。舊暦五月五日は日本ては男兒の節句てあつたが、朝鮮ては正反對て女兒の爲の節句だ、此日女兒は特に菓子を與へられ、樹木の枝に繩を懸け盛に「ブランコ」をして樂む。七夕は朝鮮ても昔から祭つて居る、日本の樣に笹に短冊を結び下げる事は聞かないが、友人などを招きて饗應し共に詩作など爲(す)る。京城内には寺院の建立を古來嚴禁してあるから、盂蘭盆に就ては特に自分も注意しなかつたが、後にて聞けば舊暦七月十五日は城外の寺院に、中々參詣人も多く頗る賑かな趣てある。年中行事の一として記すは穩當てないかも知れぬが、暑中朝鮮人の上流社會ては、鹿血を飲みに行くと云ふ遊がある。其れは會心の友數人相誘うて、遠く江原道邊の山間奥深く入り込み、地方の獵師を傭うて倶共に鹿狩を試み、打止めたる鹿の咽喉を即坐に切り開きて生血を出し之を飲むのてある。朝鮮人は斯くして飲む血は非常に滋養になり身體の組織を一變する迄健康上有益なものと信じて居る。果して鹿血其物が有効なのか、清潔なる空氣を吸ひつゝ深山幽谷を跋渉する事其れ自身が健康に有益なるかは自ら別問題に屬するが、兎に角に暑中斯の如き

遊は奇抜と云はねばならぬ。尙ほ其時節の牡鹿は皆若角即ち袋角を持つて居るが、朝鮮人の之を珍重して嗜むことは又鹿血以上て、京城に於て其價格一對三四百圓てあると確聞した。

（終）

樺太の夏

志賀重昂

樺太の夏と云つても涼しい事はない、樺太の夏全體を兩度越えて居るので、經驗の上て能く夫を知り居るのみならず、氣象上て見ても北緯五十度直下即ち日露境界の處に到つてすら、天幕の中て攝氏の四十二度即ち華氏百八度に上つた事が一日あり、攝氏の四十度即ち華氏百四度に上つた事が二日あつた、それから八月に、西海岸のマオカては平均溫度六十七度（華氏、以下皆同じ）、內陸の豐原即ち樺太廳所在地ては平均溫度六十五度であり、東海岸のガルギノウスコエては平均溫度六十二度て、高極に至ると百度近くになるといふ樣な次第てある、之を樺太といへば甚だ涼しいと思ふのは大間違てある。現に私は一回樺太て夏を過し、自分ては餘程樺太通だと任じて居たに拘らず、其翌年の夏季には單衣を二枚位しか持ち行かず、其れが爲め汗ビッショリて通し、是ては樺太通の自分免許も返納せなければならぬと思つた程てあつた。

併し樺太の夏が內地の夏と違ふ所は、暑いといふも八月即ち酷暑の月だけて、前の月の七月、後の月の九月となると溫度はズーッと下る。此に至ると內地と比較は出來ぬ、其變化の樣が急激てある、加之酷暑の時といつても朝と夕方とは低度てあり、特に夜半の二時半には晝の暑さはスッカリ無くなり、能くも此樣にな

つたものと思ふ程に寒くなる。中部では九月一日には霜が降り、同月十日頃には初氷を見る。此樣に一日にしても暑い間は極めて僅であり、夏としても其期限が短いから、要するに矢張り樺太の夏は暮し宜いと思ふ。

「あら忙し花見る中に越の夏」といふ有名の句のある如く、北方は花見る中に夏が來る、況んや樺太の如きは春かと思ふと直ぐ夏である。菜の花黃色に咲く處に馬鈴薯の花白く開き、小麥は半ば黃み、甜菜の葉は紅を染め、キャベツは綠滴らんとし、燕と鴫と雲雀と蒿雀と頰白とか私語いて居る。又其邊の露人の曾て住んて居つた小屋に行くと、パンジー(三色菫)、蝦夷菊、雛菊、龍膽だの櫻草だのと咲き亂れて居るから、如何しても春かと思へば、直に夏が來るといふ趣がある。春草褥の如くになつたと思ふ所に幌向躑躅花が雪の如くに咲く、と思へば初鰊が取れる、少しすると又鮭が取れる、縞鼠が出て來る。黃鼬が出て來るといふ譯で、南方人の口から見ると春夏ゴッチャ混ぜの樣子に見える。

今一つ内地と違ふ所は、百度位の溫度に上るから堪らなくなり、河に水泳ぎに行くと、冷たさ堪えられず、十分間と入り居る人は殆んどない。井の水も從つて寒冽で、それにビールなり、サイダーなり、平野水なりを二十分漬けて置くと全く氷の樣になる、それから魚の洗ひを作るに水の冷たい爲め肉が緊まつてコリ〱する。外は百度近い溫度の所に氷の如きビールを酌みコリ〱した魚肉を味ふのも又一種淸爽の感を覺える。

私も東京に居る時には每夏必らず早川に往く。早川は函根山を負ひ、太平洋に臨み、又早川の淸流を枕にし居る故、特に月に宜しく、地は小田原に近く、物資も多くあり、魚も澤山取れるし、從つて價も安く、生活の低度我々貧乏書生に協ふ所から、夏及び歲暮より新年にかけては行くことに定めて居る。私には非常に氣に入つて居る。柳澤淇園は夏日の七快を數へて次の樣に言つて居る。

浴して髪を梳りたる。掃除して打水したる。枕の紙を新にしたる。雨霽れて月の出てたる。水を隔てて燈の映りたる。淺き流に魚の浮みたる。月の射し出てたる。

と、私は早川に於て此皆川淇園の七快を併せ得ると思つて居るけれども、若し之を言へば唯清といふ事てある、爽といふ事てある。快といふ事てある。壯といふものはない。それから自然の氣象なるものに乏しい。然るに樺太の夏になると、此清と爽と快とのみてなく、其天然の林、天然の水、そして有りの儘の原人生活など、要するに人も自然も絶えて矯飾が無い所から、全く壯と自然の氣象とが溢れて居る。夏は誰人にも樺太に遊ぶ事を勸告する。（談岡）

臺灣の夏

大島久滿次

臺灣の眞相は、夏に行つて見るのが一番よく分らうと思ふ。世人は一般に、臺灣といふ所は非常に暑い處だと思うて居るが、世人の思ふ程暑い處てはない。成程屋外ては百度以上の事も往々あるが、室内ては平均九十一二度。極く暑い日ても九十六度から七度位のものだ。そしてそんな日は一年に僅か數日しかない。尤も同じ臺灣ても、北部と南部とては氣温も餘程違ひ、從て天然の風光も同一てはないが、北部の方は氣温の低い割合に、水蒸氣が多いから蒸し暑くて堪え難く、南部の方は氣温が高いが、空氣がカラッとして居るから比較的凌ぎ易い。其證據には南部の方ては、じつとして居て汗が出るやうな事は滅多にないが、北部ては

毛穴に玉を綴るやうに發汗する。

只よい事には、あゝいふ島國だから、始終海風が吹いて來る。その爲めに暑さが餘程減殺されて居る。夕方になると風が少し凪ぐが、夜の九時頃から又涼風が吹き來つて一日の暑さを忘るゝことが出來る。又月夜などには、空氣の關係でもあらう、月が內地よりは餘程鮮明に見えて、夏の最中に於ても已に內地の中秋の月の如く澄んで見える。だから月夜の愉快は遙かに內地に優るのである。然し晝間は隨分暑くて、事務を執るにも汗が滴つて苦しい事は間々ある。けれども風土病のペスト、マラリヤなどは暑中には殆んどない。かういふ惡病の流行するのは却て春とか秋とか時候の移り變りの時に多い。だから臺灣を視察する人は、却て夏に行つた方が安全だらうと思ふ。

臺灣の北部と南部とは餘程違ふといつたが、北部は多く晴天が續き、南部は每日二三時間の驟雨がある。驟雨の過ぎた後は實によい心持だ。尤も北部でも時々は急雨が來て、餘程暑さを和げて居る。

臺灣は水は餘りよい方ではないが、暑中でも水に缺乏するやうな事は殆んどない。尤も臺北などでも水道の出來ない中は旱魃などになると、堀井戶の水が減ずるやうな事があつたが、常用水に不自由を感ずるやうな事はなかつた。今の處水に缺乏して居る所といへば先づ嘉義位のものだ。臺北の方は最う水道を据ゑ附けて居るが嘉義には適當の水源地を發見するに困難を感じて居るやうだ。

先づ臺灣で一番困るのは、蠅と蚊だ。晝は蠅、夜は蚊。これには少からず弱らせられる。食事などするにも、蠅が眞黑に集つて、之を追ふに忙しい。然し今日では下水の設備が餘程出來たから、臺北などには蠅が餘程減つた。でも田舍に行けばまだ隨分多い。蚊は春夏秋冬四季を通じて多い。冬でも蚊帳を釣らなくてはならぬ。一番蚊の多いのは夏の始と終とて、暑さの最も強い時には却て蚊が減る。此點から見ても夏の盛りが一番旅行者に便利だ。

臺灣の樹木は冬でも殆んど落葉しないから、夏にな

つても餘り景色が變らない、平地は土人が樹木を切り盡して、植林しないから、見るに足るべき樹木が少いが、足一度び蕃地に入れば古木大樹欝蒼としてなかなか内地では見られぬ光景である。平地では相思樹とか榕樹とかいふものが可なりあつて、夏、光線を避くるによい。南部ではソワヤといふ樹が多い。山へ行けば樫、椎、胡桃等が主もなるもので、上の方へ行けば檜などが多い。

臺灣の着物は別に特徴はないが、一般内地よりも白いものを多く用ゐる傾がある。食物は夏でも別に異つたといふものがない。一體臺灣人は餘り生水を飲まない。氷水などは殆んど飲まない。て臺灣では氷屋は一向繁昌せぬ。土人はどんなに暑くても熱湯を飲む。物を冷して食ふといふやうな事は多少あるが冷たい水や氷を直接に飲まない。内地から旅行したものが、よくサイダや氷などを多量に飲んで、胃腸を害ふ人があるが、之さへ注意すれば夏の臺灣旅行は極めて安全だ。

家屋はみな夏の暑さが凌ぎよいやうに出來て居る。土人の家は成るべく窓を少くして光線が入つて來ないやうにしてある。内地の人は庇を深くして光線を避けるやうにしてはあるが、日本人の癖として矢張り窓を多くして明け放しにするやうに建てる。が暑を凌ぐには矢張土人式の方がよい。此點は將來土人式を折衷してやつたならば都合よからうと思ふ。

果實類としてはソワヤ、蓮房(レンブ)、蕉實(バナナ)、鳳梨(パインアップル)、水瓜、瓜の類など澤山出るが、けれども臺灣の果實の特徴は冬の柑橘類にあつて、夏には格別誇るに足るべきものがない。先づざつとこんな話で御免蒙りませう。

水菓子

黒頭巾

其一

●昨日、颶風一過、梅雨時には稀有の事なり。花卉も、薬物も、振り飛ばされ、强きダリヤも氣を喪ひ、勳章艸もネヂ廻はされて、風に備無き梨は、ポタリ〳〵として落つ。

●風力は低きをも掃蕩して、トマトオの畑の荒らされしこと、惜みても餘あり。

●今夏の水菓子は、恐らくは慘憺たるを免かれじ。吾輩も亦た、筆を此篇に染めて、先づ、愛惜の辭を述べざるを得ざるを憾とす。

其二

●或は謂ふ、吾輩が、トマトオを愛するは、その南瓜に酷似するを以てのみと。蓋し、會津あたりの小南瓜、朱塗の光澤を爲し、頗る愛玩に適するものあり。一見、トマトオと、殆んど相分たず。

●然れども、トマトオの妙は、その蓬々として、青く畑に蔓がる野趣に在り。青葉のかげより處々、赤きトマトオ見ゆ。

●トマトオの味は、生食の美にあり。此の味、舊日本に未だ之あらず。淡泊なれども、墨畫にはあらずして、水彩畫の味也。

●吾輩、嘗て、大町桂月とトマトオを食ふ。彼、忽ち、吐出して止む。いふ、如此、ハイカラもの食ふ可らず。

●この頃、吾輩、人見東明の詩集『夜の舞踏』を見るに、トマトオの一篇あり。月夕のトマトオを描き、其の間に、八百屋の娘を點出す。戀あり、詩あり。彼も亦たトマトオの畫趣を解する者に非ずや。

●吾輩も亦たトマトオ畑の月夕を愛す。殊に、畑を遶りて小川あり、夜は、野情を神秘ならしめて、南風ソヨ〳〵として薄き月光を吹く。何等の詩景ぞ。

●然りと雖も、朝のトマトオは、夜のに優れり。殘月に、小川の囁き、永遠の戀を語るが如く、微茫たる光、トマトオを浮ぶ。

●東明は、月明のトマトオを歌ひて、未だ殘月のトマトオを識らず。吾輩は、他日、彼が、這般の情趣を歌はん事を祈る。

其三

●中京の人、吾輩に、南瓜の畫幅を贈り來る。落款を

詳にせずと雖も、凡手に非ず、一たび之を壁間に掲ぐれば、野趣、書齋に湧く。

●此のごろ、吾輩、古油畫の南瓜を得る。豌豆、胡瓜、など夏の菓物を點綴し、眞中に雄大なる南瓜を描く。蔓の斜に切放ちたる、筆力の奔放するを見る。司馬江漢の筆也。彼も亦た、南瓜に詩趣を感ぜしか。

●吾輩、此の南瓜の兩幅を樂みつゝ、文情の寂寞たるを慰めつゝ、以て、水菓子の篇を草しつゝある也。

其　四

●夏の初は、青梅こそ心地善きものなれ。青葉の繁れる枝に、眞青の、まろき實の珠をなせる、美しといふよにはあらねど清々し。

●口中に入つて、始めて涼味を生ずるは、水菓子の上乘といふ可らず。青梅は、見たるまでにて、涼しく、聞くだけにても、早や、涼風の舌根を襲ふあり。

●青梅を談ずれば、炎天、渴を醫するに足る。此の味、青梅の一時に在り。梅花清冷、梅干清酸なるも、共に及ばず。

●夏に涼しき人は、必ずしも極めて艶麗なるを要せず、また必ずしも楚々として弱腰なるを條件とせず。中肉の淺黑き中に、涼氣を湛えて、人を涼殺すること、青梅と一斑の妙味あるものなり。

●例へば、拔けるほど白き人の、濃き絞りを著たらんか、涼しく見ゆる如く、涼は、色にあらず、味にあり。

●青梅の涼味を解する人は、以て、夏の人を談ずべく、以て、涼風を樂むべし。涼の趣味は、青梅に在り。

其　五

●涼は、數にあらず。例へば、夏の清閑は、簡易に歸す。水菓子のコテ〲したるは、嬉しからず。然れども、サクランボの少きは妙ならず、多く之を清冷の玻璃盤に盛るときに、涼風を生ず。

●サクランボの涼趣は、全く、青梅と相反するもの無くんばあらず。青梅は、眞青の珠を二三顆、小皿に盛るに宜しく、此は、數十顆を累々として、盤中に、光陸離たらしむるに妙あり。

●サクランボの味は、必ずしも美ならず。其の小さく、光りて、風情あるところに生命あり。例へば、清少納言の文の妙處の如く、垢拔けしたる短句の雜出するに依て愛せらる。

●夏の酒は小酌を可とす。小酌に、下物の大なるは涼氣を減殺す。宜しく、小盃を擧げて、小菓を採るべし。

●此のごろの滴翠の庭に、ウヰスキイの一杯を傾けて、詩を話す。サクランボは、絶好の下物なるべし。
●日本の櫻實は食ふ可らず。葉蔭は、太だ風情あり。その下に、陶製の腰掛を置きて、眺むるに宜し。

其六

●「林檎喰ふて牡丹の前に死なん哉」此の句、子規、歿前四五年、既に之を言ふ。水菓子の詩史に、子規の名を逸す可らず。
●苹は、寒國の菓なり。關東以北には、梨、漸く苹の味を帶び、關東以西は、苹次第に梨に近し。
●梨は粗にして、苹は精。なほ南國よりも北國の美人が、生目細やかなるが如く、苹は、遂に梨よりも美也。
●苹の味、必ずしも梨を壓するに至らず。然れども、其の大にして美なるものは、津々として詩趣を生ず。詩人の食物とすべきは林檎なるべし。
●尙ほ且つ、苹には、豪宕の味あり。之を花に配すれば牡丹花ならずんばあらず。且つ牡丹花の瓣も亦た食ふべし。而して、やゝ苹と相似たるの風氣を帶ぶ。
●林檎を喰ふて牡丹花に對するは、床柱を背にして海を眺むるが如し。子規は豪宕なる詩人也。
●苹は舊日本に無し。其の味も亦た新日本の特調あり。芭蕉、蕪村に梨の味ありとせば、子規の句には、自から苹の味あるを覺ふ。
●林檎の肉は、宜しく之を露出せしむ可らず。忽ち陳化するを嫌へば也。
●老人の菓を剝ぐは、先づ、其の全身を露出す。肉、風に觸れて新を失ふ。新を失へば、苹の妙無し。
●苹を剝ぐは、詩を作るが如し。其の皮を保留し、其の肉を割きて、口に入るまで其の清新を保たしむべし。清涼ならざれば詩情無き也。

其七

●百合球を洗つて、水晶盤に盛り、清冷の水を以て之に濺ぐ。夏の涼風、此の一點より生ず。
●百合球を、層、一層づゝ剝ぎ來りて、漸々其の眞を露出せしむれば、清冷は、ますます清冷。球を開きて花となして、水晶盤に映發せしめなば、箱根山中の白百合の巨葩の、苔清水の畦に咲き匂へるに讓らざるの詩趣あるべし。
●鳳來寺百合といふもの、三河の特產、巨葩、巨根、百合花の一覇王たるに足る。而して枝細く葉長く、香氣、風に散じて一庭を涼しくす。
●試みに、其の一花を、瓶中に挿みて、小座敷に薫ぜ

しむ。詩を思ふ人に、終夜、福音あらん。

●鳳來寺山は、藥師あり。東照公は、其の申し子なりと傳ふ。惜むべし。此の花、此の英雄と、何等の交渉ある話を傳へず。

●吾輩、嘗て、三河に游びて、鳳來寺の幽勝を聞き、郷人に一游を勸めらる。謂ふ年を渉りて蚊無く、夏、冷々として、涼氣凝結して百合花となる。

●鳳來寺百合、一佳話あり。其の根球の特に大なるを以て、中京の植木屋、つねに之を横濱に送りて、外人に輸出し、高利を得る。

●嘗て、横濱にて、富人の結婚式ありしとき、鳳來寺百合を竹籠に盛り、之を宴席に飾る。球は、一顆、一金或は數金に値す。巨葩を放てば也。

●式終るの後、富人相識らず、巨球の美味を想像して、盡く、煮て之を食ふ。「花も實も無く」せるは此の事也。花は定めて腹中に開きしならん。

其八

●人の未だ夏に馴れず、水菓子の、恰も拂底あるとき、夏橙、市場に出づ。風貌、堂々、殆んど八百屋の店頭を壓す。

●夏橙は、唯に、之を陳列するだけにても、其の能事は畢れるかの感無んばあらず。

●帝都の人は、葉陰に香へる夏橙を知らず。濃綠の硬き葉の繁れる枝に、夏橙の金色に輝く夕を、庭に水打つて、月の昇るを待つ。這般の情景、夏橙國の涼趣第一を推さずんばあらず。

●夏橙は、見るばかりにして涼味あり、其の肉味の美なるものほど、外皮に、光澤の麗るはしきものあり。

●夏橙は、皮を剝ぎて、房々したる實を、愛看するも亦た可也。其の肥へて、新たらしきは、露も滴たる可く見ゆ。

●夏橙の本場は、長州也。今、萩城下、舊士族の產業は、專ら夏橙に在り。三巡の園、夏橙を種ゑざる無し。

●松下村塾を環りて、夏橙の薫ずるあり。松陰先生は、夏橙の畑の草を拔きつゝ、門人に歷史を話し聞かせたり。

●幾多、佐命の功臣は、夏橙の香氣の中より出でたり。今、橙皮を煮て、菓子となし、萩の薫の名を以て賣る。夏橙の生命は、潑溂たる新鮮の生氣にあり。煮製は、抑、末也。

●蜜柑は、紀文を聯想し、輝く大なる夏蜜柑は則ち松陰先生を憶起す。蜜柑は、富を作り、夏蜜柑は、時代

を作れり。

其　九

◉博士坪井正五郎の歐行するに臨み、好むところの水菓子を問ふ、彼いふ、無花果第一、西洋には、能く之に匹敵するもの無し。僅にイチゴあるのみ。

◉足立北鷗を西原農園に訪ひしとき、彼も亦たいふ、無花果第一、然れども詩趣は拓榴に在りと。

◉坪井は瘠せて眞面目に、北鷗は肥えて笑を含めり。此の兩極端の體質の二人者が、同じく無花果を愛するを見れば、趣味は、風貌に依て斷ずるを得じ。

◉吾輩の知るところを以てすれば、鐵路に沿ひては、廣島より岩國の間、殊に無花菓多し。無花果の賣聲、プラットホームに溢つ。

◉此の地方の人は、無花果を「おしゃれの木」と呼ぶ。水畔に生育し、尺餘の大葉、つねに、水鏡を照見しつゝあるを以ていふ乎。

◉無花果は、甘つたるし。吾輩を以て見れば、此のものや、葉に、樹に、姿態の媚めきて、暑くるしきに似ず、妙は、その葉の仙風道骨を帶ぶるに在り。

◉吾鄕に無花果稀也。吾輩の園中に一本あり、殆んど珍とす。鄕人、呼びて「羅漢柹」といふ。蓋し、此のものの頸小さく、頭ズルッと丸く大きくして、五百羅漢の中に、珍らしからざる型也。

其　十

◉バナヽと鳳梨との詩趣は、新體詩の詩趣なるべし。此の兩者、舊日本に無し。詩趣を舊詩歌に求め難し。

◉鳳梨の鑵詰には景情伴はず、その生新なるものは、之を雜菓と共に、籠に盛れば、また一種の書趣無くんばあらず。

◉芭蕉に至つては、俳人、詩人、畫人、皆喜んで採用し來る。芭蕉は、旣に、俳壇の巨名となる。而して、從來の情趣、唯だ雨窓の芭蕉に在り。

◉芭蕉の靑き巨葉、婆娑として、窓を打つ。風に宜しく雨に宜しく、いづれか詩人の詠題に入らざる。

◉然れども、バナヽは、古人未だ之を見ず。その一莖群果、新鮮の凉味を漲らすは、唯だ洋畫家の品題に入るのみ。

◉鳳梨は、之を割きて、滴る水に凉風湧く。バナヽは、皮を剝げば、情趣索然たり。取つて之を食ふとき、須らく風聲月影の時を想像す可きのみ。

其十一

◉吾輩は、水菓子の書趣を憶ふとき、石川寅治の油畫

を聯想せずんばあらず。

●石川の油畫、濃艶の致を極む。其の雛壇を描くを見るに、少女は活き、菱餅や、桃花や、いづれも、人をして實在を感ぜしむ。

●就中、石川が水菓子を、一面に畫くものに至つては、林檎や、葡萄や、個々、生色を帶び、一々、取つて喰ふべし。毫も、畫趣の掬す可きを認めずと雖も、若し、眞物に近きを以て名畫とせば、彼は、確かに、一種の大家なるべし。

●水菓子は、畫に、其の味にあらず。取る可きは、其の詩趣、畫趣に存ず。サクランボに莖無く、バナヽに莖無く、水蜜桃に葉の添はざりせば、風情を減却す可き也。

其十二

●桃栗三年、柿八年の俚諺は、支那より傳來す。忠臣藏にも、大石淸左衞門を桃栗先生と綽名するの佳話あり。

●東洋に於て。花菓の文學の、尤も豊富なるは桃也。而して桃太郎に至つては、則ち御伽噺の國民的なるもの也。

●「枯枝に烏のとまりけり、秋の暮」一句、能く俳壇の舊套を道破す。而して、此の句を想へば、秋晩、寥天、萬木落盡して、紅柿ばかりの枝に殘れる畫趣、眼前に浮ぶ。

●乾柿は到處に在り。その美なるものは、別種の畫趣を催ふす。山口に乾柿の老舖あり、その巧を極むるものに至つては、善く十數年のものを貯ふ。

●此の柿や、味に依らず、看板に依つて著聞す。店の障子に、釣柿の二字を大書するもの賴山陽と傳ふ。張替へ毎に、筆蹟ばかり、上張りして、今、既に頗る渾厚なるを致す。また山口の一名物たるを失はず。

●廣島は、牡蠣と柿とに名高く、大垣は柿を自慢とす。その柿羊羹は、汽車の土産に數へらる。

●吾が笑話の一半を占らるものは、小僧と馬鹿婿と吝嗇者となるべし。而して「吝嗇坊の柿の種」の俚諺あるを見れば、柿も亦た、早く、俗文學の材料たる也。

●石田三成、就刑の前、熟柿を勸められしも、下痢の患者ありとて食はず。乾坤一擲の壯圖、失敗の前、柿は彼の好物なりし也。

●柿の詩は、澁柿又多し。千代女が「初ちぎり」の句、世に著聞す。今、歴史小説家に澁柿園あり。

●澁柿は若き柿なり。澁柿園は不思議にも、いつまで

も若く見ゆる人也。

其十三

◉吾輩は、柿を推して、日本の菓王と爲すに躊躇せず。甘美にして豐滿なる、その肉、黄葉の疎らなる、秋風の大木に、紅く熟したる、食ふ可く、畫く可く、舊來の菓物第一也。

◉柿は、枝を添へたるが佳し。小さく、丸き、柿は、殊に、枝を束ねて、山のみやげとするに宜し。

◉日本の菓物の、喬木なるは、柿の外には、唯だ楊桃あり。楊桃は常綠樹也。柿は青きときは、實も、葉も、水際立ちて青く、葉の赤くなるとき、實も亦た眞紅に、楓葉、櫨葉の外、別種の紅葉の秋を現出す。

◉柿の皮を剝ぐは、庖刀の小さきが似つかはし。銀のナイフは宜しからず。柿は、どこまでも日本の趣味也。

◉吾輩「趣味の日本」を研鑽するの志あり、而して、柿を以て、日本の風景美の一要素となすもの也。

其十四

◉いちごは、極めて心地宜きもの也。彼の紅玉の燃ゆる中より涼味の湧き出づるこそ殊に面白けれ。これを玻璃皿に盛りて、純白の砂糖をかくれば、滿開の紅梅花に曉雪のふりかゝれる趣あり。

◉趣味の家庭には宜しく、いちごを栽培すべし。勞少くして樂多し。或は、リウマチスの妙藥となるとも聞けども、兎も角も、梅雨期の、潑酵しゆく鬱熱を散ずるの適劑なるべし。

◉山巡に、野いちご紅きを見るも、いぢらし。殊に、山の畑に沿ひて、ところ／＼いちごを拾ふは、崑岡の珠を採るの心あり。

◉楊桃は、喬木のいちごならずんばあらず。此のもの、關東に無し。關西、駿國の特産に屬す。七月を、その季節とす。いちご漸く盡くるの時、天は、半空のいちごを人間に、寄與して、俗界に凉風を鼓吹するものなるらし。

◉楊桃は、極めて腐敗し易く、遠地に輸送す可からずと雖も、其の樹葉は、共に堅實也。關西の小兒は、密生する葉蔭に、玉椿に似たる白き樹を攀ぢて、菓を採るを初夏の樂とせざる無し。下ノ關海峽、南北より以西の人物、その少時、這般の樂事を享有せざりしもの、恐らくは少からん。

其十五

◉浴衣に似つかはしきは西瓜なり。大なる西瓜を半截し、氷と砂糖とを、眞紅の菓肉に混入し、スプーンを以

て、掬ひつゝ味はゞ、風無くも、浴衣の袂の翻へるべし。

●「谷の清水」の涼味も、大江の急灘の涼味も、ともに、西瓜の断面より迸り出づ。西瓜を半截したる刹那には、潑溂たる生氣噴出す。

●西瓜を抱いて深淵に投じ、石を拾うて、之を水底に抑へ付け、身挺して浮び出づべし。西瓜に先だちて、水面に出るを得ば、水泳の達人たるも失はず。

●西瓜を沈むるは、猫兒を捨つるが如し。沈むる人に先だちて、ブク／＼として、早や西瓜の浮び上るを見ん。

●眞桑瓜の類は、夏の水菓子とすべきもの少からず。然れども、いづれも屑々たる小味のみ。西瓜の、ひとり、倨然として、天地清凉の氣を占斷するの慨あるには比す可らず。

●輓近、中京の鳳瓜、漸く帝都に知らる。その、大きく、白く、涼しき趣味は、中京美人の鳴海絞りの浴衣に適應すらん。

其十六

●八月、炎天の節、食慾減却す。時ありて、水菓子の國に往かばやと思ふ。

●甲州は葡萄の國也。「月の雫」の一語、人をして神往に堪へざらしむ。山に水晶あり、地に「月の雫」あり、吾儕、未だ甲州を見ず、東海道の富士川を渡るごとに、水源の美しき國を想像す。

●藤棚と葡萄棚とは、屋外に有るべき家庭の棚ならずんばあらず。藤は、白花を宜しとす、紫は葡萄にゆづる。葡萄棚を茶の間の外に築きて、その下がれる房に、夏の風を樂しみ、秋の月を迎ふるは、清樂事たるを失はず。

●若しそれ、葡萄棚をして、ひろく、遠く野にひろがりて、秋の初、氣の澄むの夕に遭はしめば、月の雫の滴りて、葡萄の房となるの夢を、涼みながらも見るならん。

●甲州の葡萄の、善く熟して房々したるを盆に盛り來るときは、仙人の食物を見る心地す。古來、富士山に棲老したる山人は、或は、月明に、甲州に下りて、葡萄棚の下に徘徊せしならん。

●御伽噺あり。狐、葡萄のユラ／＼したるを仰ぎ見て、美味らしきに垂涎して已まず。飛び付けども／＼得ず。去るに臨みて、彼の葡萄は酸ッパイといふ。

●甲州の人物、著聞する者少からず、若尾逸平の如き

は、九十歳を過ぎて、元氣衰へず、葡萄の仙丹を以て善く養ひ得たる人瑞ならずんばあらず。

●甲州には、葡萄國の神話や御伽噺や、趣味あるもの、少からざるべし。彼の逸平は、定めて、多く之を知れるなるべし。

●關東より東北に渉りては、梨の國也。林檎の國也。帝都に近くしては。川崎の梨畑、花の頃、月夕に風情あり。

●「梨花一枝帶春雨」、支那にありては、梨花は、美人を形容す。日本の梨花は、這般の美多しと雖も、月を帶びたる姿は極めて氣高し。

●梨の上乘に至つては、皮を劈けば、仙液迸り涼風湧く。這般の涼味、水蜜桃と共に、夏の雙美とす。

●「米のなる木」の國は、また「水蜜桃の國」也。水蜜桃に葉を帶びたる小枝を付けて、水盤に浮ぶれば、桃太郎の母桃が、谷川を流るゝ詩趣を喚起せしむ。

●「水蜜桃の國」の人は、甘つたるく、「梨の國」の人は、きび〱す。此の二者は、齊しく雙美といふとも、その味は、その人物と、一樣の相違あり。

●長州は夏蜜柑の國、鳴門の沿岸は、鳴門蜜柑の國、茶の駿河路は、また、近ごろ蜜柑の國となれり。

●蜜柑の國は、紀州也。すべての柑橘は、紀州に適せざる無し。佛手柑の如きに至つても、容易に繁殖す。然れども、滿谿皆な蜜柑なるは、有田郡也。此の一郡は、蜜柑の畑の内に在り。

●蜜柑、キンカン、ネーブルス、すべて皆、善からざるは無し。而して、その大小、金色、珠玉、綠葉を壓して、枝に密布せるは、限り無き豐滿の氣あり。若し、その殊に、富裕なる一樹を採つて、盆栽とせば、まさに、寶船の趣味なるべし。

其十七

●吾輩の少時、越前に在りし時、郷里より大なる蜜柑を送り來る。之を學務委員に示せば、天產か人工かと問ふ。彼、既にして之を小學校に齎らし、兒童を集めて、之を示しつゝ、如此、大柑を產する國ある事を說く。

●雪の國には、昔し、大柑を見ず、鬼柴田も雪に封鎖せられて、戰機に合はず。今や、鐵路延長し、吾輩の小學物語は、早や御伽噺となりぬ。吾が半生を回憶するも、水菓子普及の一事、明治文運の大發展を徵するに足らずんばあらず。

●雪の國は、柚の國也。柚は、暖國に少くして、日本

海岸の雪帶に多し。其の奇峭の枝ぶり、寒古の果、李國の白兎と一般、奇寒の凝精也。

●柚、柚味噌、山僧に似つかはしく、禪寺にあるべきものらし、自から禪味あり。

●北國には、杏、李多し。春風、杏、李、滿目、雪後の新天地を華やかにす。杏の漬物は、梅干に代用せらる。

●花は、桃李相對す。水菓子に至つては。桃は涼に、李は寒し。

其十八

●文、野を通じて、水菓子の人ならざるは無く、水菓子の國あらざるは無し。

●吾輩も、他日、海外に航して、別種の水菓子に、別世界の趣味、人文を味はふの日あらんことを待つ。

●食ふ可らざるの水菓子あること少し。唯だ蠢人は、迷信に依つて、食はざるの種類あり。

●支那の如き、仙人教の國に在つては、仙界の水菓子と目せらるゝもの、亦た少しとせず、仙桃の如き、佛手柑の如き、畵趣に仙趣を交ふ。

●吾が日本に於ても、迷信を伴ふ、水菓子少からず、枇杷の如き、棗(なつめ)の如き其の一也。棗(なつめ)は美味ならず、唯だ、炎威に疲れたる初秋の畑を飾るに宜し。

●枇杷に至つては、初夏の片涼たるを失はず。然れども、吾輩を以て見れば、其の葉太だ可し。殺ぎて長き、厚き裏白の數葉の眞中に、黄玉の顆數個を藏す。初夏の畵趣、甚だ愛すべし。

其十九

●今日、家居して筆を執る。珍客、續々、遠きより到る。則ち、ベルモットを酌みて、水菓子を割き、且つ語り、且つ想を煽ほる。

●前日の大風、小園、幸に無事、唯だ柘榴の一枝、折れて垂る。衆兒、その紅熟時を想ふて、太だ愛惜す。

●吾輩、一女兒あり、稚時、太だ病弱なりし。兒の弱き者、その親、鬼子母神に祈る。吾輩、また嘗て、雜司ヶ谷の鬼子母神に賽す。

●鬼子母神は柘榴を愛す、母神、もと赤兒の肉を愛す、柘榴には人肉の味あり、故に代へて勸むといふ。柘榴は則ち、赤兒の犧牲也。

●柘榴は、花も葉も餘り、引立たず。唯だ其の實、日本畵に宜しく、油畵に宜しく、之を盆栽にすれば、花よりも畵趣あり。

●柘榴の全きものは、畵趣を推す。その一片々々の小

粒果に至つては、愛賞の値あること、萬果に類を見ず。

◉柘榴の小粒片は、極めて美し。その味も亦た淸冷、仙味第一ならずんばあらず。

◉彼の小粒片は、靜かに、之を玩味すべし。彼の一分立方の中、人の滿身を凉化するの靈液津々として盡きざるあらん。

◉水菓子に透明なるものある無し。唯だ一の柘榴あるのみ。試みに、之を陽光に透せば、玲瓏として、極めて純美の水晶也。若し、水晶に味あらしめば、則ち柘榴ならずんばあらず。

◉柘榴の花は、パットせざれども、綠樹の中に交はりて、一種、人を引くの色あり。やゝ其の精華を蘊みて、秋の實に至つて、遺憾無く之を發揮す。

◉水晶の極美なるものと雖も、柘榴の粒片の紅色美あること無し。

◉柘榴粒の、紅、淡紅より白にうつるの色彩美は、天造の花果と雖も、比類あらず、暫らく、之を人間美に對照せしめば、愛らしき稚兒の、麗はしき皓齒に、京紅の淡く粧はれたるにも似たらん乎。

◉詩經に「齒如瓠犀」といふ。皓齒の形容、此に盡く。然れども、詩經詩人、果して柘榴粒の皓齒美を想見したりしや否や。

◉柘榴粒は、鬚髯の厳めしき口に挿むに相應はしからず。須らく、天人のやうなる、麗はしき稚兒の、罪無き唇に含ましむべき也。

天、陰にしてやゝ凉を催ふす、梅雨期の天氣甚だ人に佳ならず。此の篇を草するとき、前年、病弱なりし女兒の、屢々、卓前に來りて、吾儕を慰問す。近き神祠にて擊つらし、森を隔てゝ鼓聲聞こゆ。

黑頭巾記

人物評論（十八）

島村抱月論



△島村抱月氏

白鳥

抱月氏に始めて接したのは、早稲田の教室で、その時支那文學史とか審美學とかを教へられた。教師に成り始めの際て、氏の講義振はあまり上手ではなかつた。それに場馴れないため、教室をあちらこちらと歩きながら講義するのが癖て、目まぐるしいらか、教場の散歩は止めて貰はうぢやないかと、僕等が陰で評議したことがある。これが帝大出身の講師だつたら直接に申出たかも知れぬが、同校の先輩だといふので、氣の

等で誰れも云ふものもなかつた。しかし僕等の卒業時分には講義振りも上手になり演說も巧みになつた。卒業の少し前から、僕等三四人が抱月氏の家で會をして讀賣の日曜附錄へ評論を書くやうになつたが、あの時分僕の書いたものは、氏の筆で所々添削された。

氏の作物では、歐洲滯在中の者が最も面白かつた。外國の演劇をあれほどに明晰に書いた者は外に類がない。讀んでゐても目に觀るやうだつた。樗牛に與へた文章など力强いものだつた。紀行や隨筆や、「滯歐文壇」中の者は皆面白かつた。

氏が洋行中僕は腦も惡かつたし、勉强する氣もなかつたし、新聞の種取りぐらゐしてゲヅ〳〵して暮らしてゐたが、氏を横濱に迎へた時は、何となく羨ましかつた。世間の囑望も盛んだつたし、氏自身にも意氣が盛だつたらしい。で、僕は、「私はあなたの留守中何もしませんでした」と云ふと、氏は「何故です」と落着いた聲で、非難するやうに云つた。頻りに書くことを勸められた。

早稻田文學再興當時、僕は雜誌に關係しなかつたが、氏を取纏ひていろんなゴタ〳〵のあつたことは、噂に聞いてゐた。氏のやうに人を統御して行く地位にある者はつらい者だと思つた。今でも境遇上左右に氣を兼ねなければならんだらうと他所ながら察せられるが、若し學校の關係を離れて獨立して、文藝に全力を注ぐやうになられたら、氏のためにも面白い事が出來るだらうと思はれる。

氏は寂しい人だ、地味な人だ。竹越氏が讀賣主筆時代に僕に向つて、「島村君の文章は衒氣がある。大町君の方がいゝ」と云つたが――西園寺侯文士招待人選の際評論家として大町氏を推したのはその時の話――僕は衒氣といふ事は最も抱月氏に緣の遠いと思ふ。

嘗て田山花袋氏から聞いた話に、從軍中鷗外氏に向つて、「島村君が西洋から歸つたから大に活動するでせう」と云つたら、鷗外氏は「いや、さう華々しいことはないでせう、島村君は私などと同じやうでせう」といふ意味の事を云つたさうだが、僕は鷗外抱月春雨三氏は同じ石州の人として、何處か似寄つてゐるやうに思ふ。鷗外氏には一度も會つたことはないが、他の二氏は人となりが似てゐるやうに思ふ。二人とも僕の知友の中で最も地味で紳士らしくて、決してハシタない事をしない人である。言葉でも行爲でも如何なる場合にも常規を逸するやうな事はない。

△抱月論

阿部次郎

子供の時分に何かの雜誌で抱月氏の寫眞を見たことがある。其時自分の心にとまつたのは其瘠せた躰と、外から襲擊して來る者に備へる樣に心持肩を揚げた姿勢とであつた。自分は此寫眞によつて、抱月氏は恐ぐ小く固まつた人、忠實に神經質に自己を守る人だらうと想像してゐた。又一兩年前さる本屋の會があつて上野の精養軒に行つた時、遠くから抱月氏を見たことがあつた。其時には當日の他の會衆（それは大抵教育家と稱

せられる人達であつた）に比較して何處か調子の高い處がある人だと思つた、其小さい眼の中に輝くものは單に世間並の怜悧に止らずして、正直と誠實との光もあると思つた。自分の抱月氏に對する感想は大體此二つの印象の綜合である。未だ此以上に自分の感想を檢査する機會に接しないから、果して當つてゐるかどうかは自分でもわからない。

自分は思想家としての抱月氏には餘り重きを置いてゐない。氏の思想には綺麗に整つた輪廓があつても、強く鮮かなる傾向（テンデンツ）の表現と、此傾向の自然にして獨立せる發達の痕とが見えないからである。他人の思想を理解し註釋する明はある。時代思潮に追隨して後れざらむとする努力はある。併し氏自身の内生活は多くの場合に於て漠然と大きく張つた輪廓の中にしよんぼりと孤坐してゐるに過ぎない様に思ふ。抱月氏は思想の註解者（インタープレーター）であつても、思想の創造者（クリエーター）ではあるまい。學者としては小手利であるが、思想家としては貧弱である。

抱月氏の才幹から云へば思想家よりも遙に多く學者である。着眼にオリヂナリテイに乏しいと云ふ難はあつても、色々な材料を綺麗に纏める手際は可なり鮮かなものだと思ふ。細部を仕上げて行く忍耐と忠實とも備つてゐる様である。但一時早稻田文學に續出した卷頭の論文は綺麗に纏める手際を濫用し過ぎて、本質に徹せざる拂拭的（スキーピング）な註解と、吟味を缺いた覺束ない材料の臚列とに陷つたものが少くない様であつた。此點から云へば學者としての抱月氏と高山樗牛氏とは不思議にも共通の缺點を持つてゐる。唯抱月氏の謹嚴らしい態度が樗牛氏の疎放なる態度に比して世間の信用を購ふに便利であるに過ぎない。併し自分は此缺點を雜誌記者と云ふ忙しい職業の咎に歸して抱月氏自身の才幹の缺乏には歸したくないと思ふ。如何にオリヂナリテイに乏しいと云つても、世間に有觸れた學者に比すれば抱月氏の着眼に新しい處があるとは爭はれない。此新しい着眼を氏の持前の忠實を以て仕上げて行つたら現今の日本には珍らしい新研究が出來るかも知れない。自分は讀んだことがないが、氏の著「新美辭學」などは學者としての氏の長所を示してゐるといふことをきいた。此方面に於ける一層の沈潛を希望したい。

併し抱月氏は學者を以つて滿足する人ではない、氏は世間を相手にして仕事をして行くことによつて始めて生活の充實を覺える人であらう。仕事の人としては民間の一批評家よりも文藝委員の方が寧ろ抱月氏に適してゐるかも知れない。

現在の處抱月氏の學殖識見鑒識が群少に卓越してゐることは云ふ迄もないが、單にそれ丈ならば外に幾許も代りが出來さうである、思想家の天分が乏しい爲か、どうも氏の言説には一個の人格としてコンヰンシングな處が足りない。氏が批評家として今日以上に延びるか如何かは隨分疑問である。併し氏は自己の意見に就いて責任を持つ人である、氏の自己を守るに忠實なる處、拘泥の多い處は其意見に實行力の粘り氣を與ふる利益を持つてゐる。從つて文藝委員としては他の人達よりも確かに押しの利く人となるに違ひないと思ふ。

抱月氏は外部との接觸に於て特に鋭敏なる神經を持つてゐる人てあ

る。而して其鋭敏なる自己保存の神經に觸れる者に對しては豪猪の樣に直に毛を竪てる人である。併し氏は隨分下らないことに怒つたり、遠廻しに當切れの惡い厭味を云つたりすることがあつても、茶化したり遊んだりすることの出來ぬ人である。器が小さいと云ふ非難はあつても兎に角正直で眞面目である。此點が文藝委員としての氏の强味であると思ふ。文藝委員の顏觸れを見渡した處、見識の氏より優れた人はあり相である、併しそんな人は大抵茶化して了ひ相に思はれて仕方がない。又三鞭と正宗との相異はあつても酒三行にして直に意氣投合して了ひ相な人も亦少くない。此の如く遊い人や甘い人の多い中で兎に角眞面目に自分の意見を主張するのは賴母しいことである。而して抱月氏は此賴母しい人の筆頭である。新しい文藝を代表してやる處迄やつて見て貰ひたいと思ふ。物分れになる迄押して行つて貰ひたいと思ふ。

△文才よりも學才の人

生田長江

從來の文學者に、頭の惡い人や、學問の嫌いな人が多かつたのも事實であるが、文學者とさへ云へば、皆が皆無學のもののやうにきめて了ふのは、かの自ら學者を以て任ずる人々の、あまりに專橫過ぎた臆斷ではあるまいかと思ふ。

故人高山樗牛氏なぞも、文壇の人として立つてゐたばつかりに、學者としての天分なり修養なりを、實際よりも輕く見られてゐたやうだ。

抱月氏なぞの場合もさうで、若し氏が文士でないとしたならば、今日拂はれてゐるよりも、遙かに多くの敬意を、學者連からして拂はれるに相違ない。

學者としての抱月氏は、固より、學識よりも學才に於て取るべき人だらう。

一口に文壇の才人と云ふ中にも、氏の如きは、文才と學才とを兼ね備ふるもの、或は其學才が其文才を凌駕する位であるかも知れぬ。

由來、才人は多く書を讀まぬ。餘りに多忙なのである。必ずしも讀むを須ひないのである。乃ち氏が所謂讀書家の風を帶びざるもの、異むに足りないのである。

漫然たる多讀は、好事者と、通人と、腐儒とを作り上げるに止まる。特に批評家として立つ人々の場合に於て、讀書の多量なるは、その多方面なるに及ばない。

氏の讀書は可なり多方面なるもののやうに想像される。

讀書の多方面なる爲めでもあらうし、かく多方面なるを得る所以でもあらう、氏の趣味がまた隨分と廣い。

少くとも、概念的に取扱はれる限りに於て、氏は常に、如何なる問題に對しても、興味を有つ。

如何なる方面の問題に對しても、一通りの興味を有つと云ふのは、氏の大なる强味であるが、それぞれの方面に於ける、それぞれの流派や傾

向に對し、滿遍なく同情を注いで行つて、結局、自家特有の立脚地を決定するに苦むやうな、歯がゆいことになり勝ちなのは殘念だ。

氏が自然主義運動に參加したのは、內省の避けがたき要求であるよりも、ヂヤアナリストとしての立場からであつた。如何なるイズムにもせよ、イズムを偏執するに適當なる人でない。偏執や我執のないのは、文人としての抱月氏の大なる長所でもあり、より大なる短所でもあらう。

獨創はどうしても自己中心の傾向に伴ふ。我執はまた濃厚なる個人性の一面の色合である。

氏の議論には、樗牛氏ほどの獨創もどうかと思はれる代り、樗牛氏ほどの個性的色彩もどうかと思はれる代り、樗牛氏よりも遙かに公平で、親切丁寧で、獨斷が少い。

花袋氏や泡鳴氏の藝術論思潮論ほどにも暗示的なるを得ない代りには、其等の人々の放漫なる斷片的感想を通觀して、其間に脈絡をさぐり、統一を見出し、議論らしい議論の體裁をとるところまで、整頓して見ると云ふ仕事の上に、頭腦の精透を證明する。

抱月氏は、決して冷かなる人でない。されぱとて、熱烈の人では無論ない。ただ飽くまでも溫かなる人である。文章を讀んでも然う思ふ。まのあたり其人に接しては、より多く然う思ふ。

氏を以て、理智一偏の人とするのは當らない。氏はなかなかに情意の生活を輕く視ない人らしい。輕く見られない人らしい。

ただ惜むらくは、情意の精錬が、理智の修養と並行するところまで進してゐない。從つて、其文章のうるほひとなり、味となるものが、專ら單純なるセンチメンタリズムにのみ限られてゐるやうだ。

私共は氏の鑑賞力よりも、より多く氏の註釋と說明とに敬服する。とりわけ當代の小說や詩や脚本を品隲する場合には、氏よりも寧ろ相馬御風氏や、中村星湖氏などに聽いた方がよいと思ふほどである。

遺憾なく自らを知れる抱月氏は、常に其品鑑を多數者の評價に問ふて、私見を挾むことを敢へてせぬ。輿論を正しいと思ふ筈はない。流行を追ふより外に、取るべき道がないからではないか。

鑑賞の上に控目なる抱月氏は、談理の上にも用心深い。餘りに用心深いと云ふのが定評となつてゐる。

衒學者ならぬ氏は、知らない事を知つてゐるやうに見せる人でない。知つてゐる事をも默つて居られる人である。ただ潜に思ふに、氏の如き君子人と雖、知らないところを見られたくはないらしい。

知る知らぬの問題に關して、餘りに神經質になり、餘りに大事を取るやうになつた人を見る毎に思ふ、餘りに早くから、世間の注目を集めるやうな、顯要な地位に立たせられるのもよしわるしだと。

抱月氏の此頃の創作は、用心深い人のやり相にもないものだ。

それでも、脚本『平清盛』を讀んで大に敎へられたと言ふ人がある。他山の石としては、何人も敎へられるところがあつたに違ひない。

抱月氏の創作熱は、一時の氣まぐれであつて貰ひたい。あまりに長く、評論の筆をとることを廢せられるのは、文壇の爲めよりも氏の爲めに取

らぬ。

近く文部省の文藝委員としては、氏が最も適任の人であることを思ふ。何よりも先づ深切で、正直で、徹頭徹尾眞面目であるのを頼母敷思ふ。私共の委員會に對する期待の大半は實に氏の上に繋がつてゐる。此際特に、委員會の將來の爲めに、氏の健康を祈るものである。

△文壇の外務大臣

上司小劍

島村さんに會ふと私は直ぐ小村壽太郎と云ふ人の顏を思ひ出す。小村と云ふ人にはお目にかゝつたことはないが、何時であつたかアメリカへ、ロシアのウイツテと云ふ人との談判に行つて歸へられると、大變に世俗の評判が惡くて、危害が一身に及び兼ねないとか云ふ噂さすらあつた時、私は偶然其の人が新橋のステーションから馬車の前後を游のやうな幾本かの騎兵の劍に圍まれて、嚴重な護衞の下に霞ヶ關の方へ走つて行くのを見たことがある。其の時私は初めて政治家など云ふ空疎な頭の人にも、あんな沈痛な色を顏面に現はすことがあるのだなと思つた。其の折の小村と云ふ人の顏は政治家など云ふものゝ顏として見るには——特に日本の政治家の顏として見るには——勿體ないほどのよい顏であつた。

每日目黑から新橋へ汽車で通ふ時分に、私は新橋のプラットフォームで伊藤博文氏が大變な景氣を付けて朝鮮から歸つて來たのを見たことがあつた。七十に近いお爺さんが金色や赤色で頭や胸を飾つて、子供が手遊品を買つて貰つた時のやうな嬉しさうな顏に『この乃公を見よ』と云つた得意の色を漲らしてゐるのを眺めて、私は前に見た小村氏の沈んだ暗い顏を思ひ出した。

其の後小村氏の顏は時々見た。鳥の羽を突ッ立てた帽子や、金や赤の光る服を着た多くのえらさうな人の顏に混つて、小村氏の寂しい、物を考へてゐるらしい顏が、何の飾りもない黑服に包まれた瘦せぎすの身體の上に載つかつて、冷やかな笑を漏らしてゐるのを、遠くから見たこともあつた。流石にアメリカの談判地から歸つた時ほどに深く沈んだ色は見えぬが、政治家としては出來過ぎてゐる顏を私は屢々小村氏の上に見た。

話は小村氏の上ばかりに馳せたが、小村氏によく肖た顏を有つてゐる島村さんは、顏ばかりでなく、身體つきから、話をする時の身振り手振りまでがよく似てゐる。それで私はこの二人の人の間に妙なからぬ共通點があるやうに思はれてならぬ。島村さんが政治界——或は官海——に泳ぎ出すと小村氏になり、小村氏が文壇に現はれると島村さんになつたであらうとすら思ふこともある。島村さんはイギリスに行つてゐたイギリス風の紳士、小村氏も同樣で、この點は云ふまでもなく一致してゐる。

島村さんは冷靜な個人主義の人であるけれど、また情熱が高く友誼に厚い人である。さうして私等のやうに一人で納ん張つて虫のかゝるのを

待つと云ふ蜘蛛の生活を好むものでなくて、蟻のやうに社會的に活動し、建設しやうとする人である。集團的勢力を作るに力めて或る點までは世俗と合體し、調和することを苦痛としない人である。この點に於て島村さんの人物は甚だ大きい、度量も廣い。

島村さんがイギリスからドイツを經て歸へられた時、大隈重信氏を會頭にした文藝協會と云ふものを作り、復活早稻田文學の第一號に『囚はれたる文藝』を草し、『我れ伊太利ナポリの港に舟がゝりして……』の花々しい文章に其の時の青年を醉はしたなぞの活動振りは、政治界の出來事のやうに賑かであつた。それで近頃はまた文藝委員會の一員になつて、世間の無責任な冷評惡罵なぞを耳にもかけず、少しでも國家と云ふものゝ力を文壇の上に利用しやうとしてゐられるやうに見える。私は島村さんをば差し當り文壇の外務大臣だと思つて見たい。

島村さんはまた新聞と云ふものゝ世俗的勢力に趣味を有たれ、最近に會つた時にも『新聞を一つやつて見たいやうにも思ふ』と云ふ意味のことを云はれた。クロポトキンは『今日の新聞と云ふものは議會の討論や政界の情僞で塡められて、個人の絶大なる日々の生活に就いては、警察事故ぐらゐに數行を費すの外多くを記さない。今日新聞を讀んだのでは全人類に就いて毫も考へ到ることが出來ぬ』と、或る論文の中で云つてゐる。私が曾つて島村さんから聞いた對新聞紙意見の中にもこれとよく似た言葉があつたやうに思ふ。島村さんが若し新聞の社長とか、主筆とか云ふものになられる時があつたら、報道の精確とか、敏速とか云ふことを別にして、新聞と云ふものが、今日とは稍進んだ基點の上に坐することがあるかも知れぬ。

終に云つておく、島村抱月氏と云へば必ず早稻田派と云ふ言葉を並べなければならぬやうになつてゐるが、早稻田派と云ふものが若し早稻田大學に學んだものゝ集團と云ふ意味ならば、甚だ詰まらぬもので、其の勢力は校友會など云ふ形式的の聯結に過ぎない。島村氏の周圍に有力な黨派とも云ふべきものがあるならば、それは學校を離れた意味の一種の同志で、島村派とでも呼ぶべきものであつて、早稻田派の名は當らないであらう。今の自由な世の中では同じ學校に學んだと云ふことは同じ電車に乘り合はしたと云ふことよりもまだ緣が薄い。人の往く先きは皆違つてゐる、袖振り合はした緣だけに依つて一致の協力を望むのは古臭い考へである。

△抱月氏に就いての感想

安倍能成

抱月氏の昔の物は一つも讀んで居ない。自分の讀んだのは、氏の「近代文藝の研究」に集めた者から以後の者ばかりである。其の以前は唯高山氏や登張氏のニーチエ鼓吹に反對して居られた(?)文章を見たといふ樣な事實を記憶する許りである。從つて自分は昔の氏が文壇に對してどういふことをしられたかは一向知らない。自分のいふ所は、歐洲から歸ら

れて早稲田文學で自然主義を主張せられた時分からの氏についてだけてある。

自分は兎に角氏は今の文藝批評家の內では、天分も聰明であつて、素養も多い人であらうと思つて居る。其れに氏は一方に於てタレントがあると共は、又中々エナージエチックな努力主義の人ではあるまいかと思ふ。これは故の綱島氏の友人に送られた手紙の中にも、確か抱月君の努力は驚くべしといふ風なことが書いてあつたと思ふ。だから氏の議論にも比較的細かな用意と、緊張した努力とは大抵見える。議論の結構とか布置とかにも苦心があつて、システマティックに自分の考を叙べやうとする所がある。しかし議論の大切な所とさう大切でない所を分けて、議論の筋道を鮮かに論理的にグイ〳〵と進んで行く所は、どちらかといへば缺けて居ないかと思ふ。餘りに委曲周匝を欲して、却てくど〳〵しく迂回して、本筋の運びが舒び〳〵と行かない樣な弊がある。情理兼ね盡した批評といふことは、恐らくは氏の心掛けて居られる所であらうと思ふし、又或る程度まで其れは氏の論文に於ても實現せられて居ると思ふ。殊に氏は論文家中では、文章に對する敏感のある人であるから、心持の說明などには文章上にも隨分苦心が見える。

しかし自分が氏の文章に對して一番物足らなく思ふのは、氏の詞がいつも腹の底から出た樣な力がないことである。何となく用心してビクビクした樣な所がある。色々な解剖や反省が、氏の內生活の核心を貫いて居ないといふことである。これは氏の純文藝論よりも一層實人生に對する議論に於て、より深く感ずる所である。

氏に近い人から聽くと、氏は若い者の考へて居ることには。中々熱心に耳を傾けて、苟もこれに遲れまいと忠實に心掛けて居られるといふことである。こんなことは氏の美質だらうと思ふが、又一方から考へれば、氏が自ら先だつて憚らざる文壇の率先者となり、問題の提供者となることがなくて、何となく新しい所を所をと追隨する形がある所以ではあるまいか。自分がさういふことを深く感じたのは、氏が懺悔の心持について陳べられた時であつた。あの當時早稲田文學に出た氏の文章を書かれる動機の告白なども、何だか自己獨自の必然性に從つたといふよりは、他から動されて告白したといふ樣な所がある。だから自然な謙虛の心持と人を動す力とに乏しかつた。人の內生活に立入つたことをいふのは、餘りに失禮であるが、自分は氏の宗敎的氣分といはれる者などにも、大分附燒刄的な所があると、其時に感じた。

嘗てニーチエの鼓吹に對して非常な反對を試みた氏が、自然主義論に於てコンヴエンションを排した眞實の人生といふ樣なことを言はれたのは、確かに變遷であり、進步であると思ふ。嘗て自然主義論の方で人生觀上の問題がやかましくなつた時に、惠美光山氏はこれを樗牛氏梁川氏の問題を足場を換へて論じ出したのに過ぎないといつたのは、慥かに當つた詞である。純文藝上の方の議論は暫く留く。人生觀上の方でも自然主義論者は、自分が始めて新しい自覺をした者であると樣にいふのは、自分の今迄しなかつた經驗にエムフアシスを置く餘りに、他を見ること

な忘れた者である。樗牛氏梁川氏はこの點に於ては確かに彼等よりも先覺であつた。この事實を正當に認めずに、徒らに樗牛は淺薄だとか梁川には自覺がないとかいふのはいけない。話が横にそれたけれども、抱月氏の議論には、あまりに自分達の事業に價値を付け過ぎるといふ傾向がある。言ふだけのことはドシ〳〵構はず言つて、價値は人の付するに任すといつた樣な放膽な所が乏しい。

放膽な所が乏しいといへば、抱月氏は餘り神經質である。これは氏をして一方に於て思切つたことを言はしめないと共に、他方に於て氏をして下らぬことに氣をもませる。そして用心深い氏をして動もすれば、「控へ張」とか「個人的告白」とかいふ、一種の女性的憤懣を發表せしめる樣にさす。この點は氏の爲めにくれ〴〵も惜むべきことである。こんな場合には、つまらぬ誤解もあるし、勘違もある樣である。氏の意見に反對した者に對し、其の意見其者を虚心に觀察しないので、其の反對といふことが氣になつてたまらぬといふ所がある。氏の聰明がこの感情の爲めに屢々蔽はれることを憾む。

氏は近頃創作をせられる樣である。氏の創作の方の技倆のあることは、故の綱島氏などもよくいはれて居た。しかし自分の見た二三では、氏の創作は、固くなつて生命の流動のない樣に感じた。氏の近頃試みられる創作は、自分はまだ讀まない。

兎に角自分の見る所では、氏は透谷氏樗牛氏の樣に、身を以て自分の問題に倒れ、時代の犧牲になる樣なインテンスキヤラクターではない。氏はやつぱり所有（ポツシエツシヨン）の世界に生き難さを歎く人であらうと思ふ。其れで動搖と不安はありながら一方ではそこに落着を得る所もある人だと思ふ。新しさといふ者に對しては常に心を用ゐ、其の爲めに苦勞する人である。しかしながら自分の見識を棒の樣に無遠慮に立て得る人ではない樣に思ふ。かくて氏は一種の敏感と聰明と忠實と、それからエナーセチツクな努力で、比較的長く文壇に生き得る人であると思ふが、濃厚に强烈に一つのエポツクを造る人ではないと思ふ。

△文藝委員として適當な人

中島孤島

問　抱月氏は聰明な人で、極めてよく時勢を諒解する頭腦を持つて居るといふのが一般の評のやうですが、貴下の見る所は如何です。

答　一寸然ういふ所もあるやうですね。聰明といふ意味を「智に明かな」といふだけの普通の意味に取つたら、如何にも聰明な人といへるでせう。碎（くだ）いていへば「分りのよい」人でせう。けれども「智に明かな」といふことは、必しも「情意の深み」といふことを含んでゐない。却つて此二つの要素は互に相牴觸するやうな場合が往々ある。普通に「分りがよい」といふ種類の人には「情意の深み」の淺い人が多いやうだ。兎角世の中のことは考へれば考へる程解決がつかなくなる。あまり深く物事を考へない人の方が一寸「分りがよい」やうに見えるものです。だから取分け實行

方面の人には「深く考へろ」といふことは禁物になつて來る。成るべく物事を淺く見て、一通りの解釋に滿足して、ずん／＼先へ通り拔けて行く。世にいふ利口な人ですね。島村君には然らいふ所は確かにある。其の意味で聰明といふ字を使つたら確かに聰明な人でせう。けれども然ういふ種類の人に眞に時勢が諒解されるでせうか、眞に時勢が味はれるでせうか。又眞に時勢を洞察することが出來るでせうか。人生の表面に觸れただけで、人生の上皮を舐めただけで、又人生を冷たい頭で瞥見しただけで、眞に時勢が諒解出來るものでせうか。それは私の判斷には及ばない。それに聰明といふ文字の意味に就いても、今言つた解釋だけでは滿足が出來ないやうにも思ふ。

問　抱月氏は極めて公平な人で、よく他人の美點長所を認識する人だといふ世評ですが、これはどんなものでせう。

答　誰だつて意識の平靜な場合には、他人にも自分にも公平であり得るものでせう。たゞそれに複雜な感情が添はり、利益の意識が加はるので、いざ實行に現れる場合になると、誰だつて本當に公平といふことがあり得なくなるのでせう。島村君が、現在の立場から言つて、公平無私を心掛けて居るといふことは、信じ得べきことだと思ふ。又世間から公平無私だと信ぜられることが現在の立場から言つて最も必要な態度でせう。僕は現在の島村君の態度が、少くとも公平無私を心掛けてゐるといふことを拒まない。けれども僕一己の印象から言ふと、島村君といふ人は他人に對して公平無私であり得るためには、餘りに自我心の强い人だと思ふ。殊に黨派心の最も旺盛な人である。由來私立學校の出身者には、境遇上、經歷上から一種の僻見があつて、官學に對して敵愾心を持つてゐるものが多いが、其中でも島村君位昔から「我が黨」といふ言葉を口にした人は尠ない。近頃のことは知らないが、或は尙更然うでせうか。今日島村君が黨中に黨を立てるといふやうな態度も決して今日に始まつたことではない思ふ。して見ると公平無私といふことを立てやうとすれば此黨派心を抑えなければならない、又黨派心を棄てないとすれば、公平無私といふことは望み得ないとになる。面白い矛盾ですね。「分りのよい」人だから勿論他人の美點や長所の分らないとはないでせうが、それに對して公平で有り得るといふことは疑問でせう。又若し公平といふことが、單に愛憎の情に打克つといふ意味ならば、それは或は公平で有り得るでせう。けれども不偏不黨で、利害に制せられないといふやうなことは島村君としては斷じて出來得べからざることでせう。

問　抱月氏の批評家としての地位をどうお考へですか。

答　批評家は島村君の文學者としての本領でせうが、其の批評振りは「大きい」とは言へないやうですね。一通りは見て居る、割合に廣く隅々まで眼が屆く、けれども敢て深く入らうとはしない。だから僕は未だ曾て島村君の批評によつて敎へられたといふことはない。つまり後から利口に說明はして行くが、先覺者として人よりも先へ行く人ではない。坪內先生や死んだ二葉亭なぞと全然種類を別にした批評家だと思ふ。タイプとしては寧ろ鷗外博士なぞと同じ種類別に入る方でせうか。斯ういふ

批評家も多少は必要だと思ふが、たゞ其の必要な理由は、文學の内容に感化を與へるといふことよりも、寧ろ文學者の世話を見て行くといふ外面的な方面にあるのでせう。實際島村君の事業としては、現在でも批評家としてよりも、寧ろ早稻田の文科の教務主任として、及び一個の雜誌記者（ジャーナリスト）としてより多く、成功して居はしまいか。此の意味に於て（又前々に答へて來た種々の點から見ても）文部省の文藝委員なぞは最も島村君の適所ではなからうかと思ふ。

△立派な紳士

せいせつ

抱月君が當代の文藝批評家として優に一方に覇を唱ふるに足る人であるとは事實が證明してゐる。僕が氏に對する個人的の觀想と云ふと、實は早稻田文學などで見る論文は稍々迂餘曲折が多くて、何となく「煮エキラヌ」と云ふ樣な感を禁じ得なかつた。とは云へ、その主張は往々世間一般の所謂る平凡な或は穩當な主義とは頗る違いものがあるので、常に何等かの新しい研究にのみ腐心してゐて、實は自分自身でも十分な自信は出來てゐないが、何でも穩當なと云はれてゐる平凡な說に反對して見たいと云ふ樣な態度の人であるのではなからうかと。……甚だ失敬な話ではあるが、正直な所、さう思つてゐた。然るに、先日來僅に二三度ではあるが、文藝委員會に於て氏の提案や說明を聞いて見ると、案外にもかゝる俗事に對しても十分な常識を備へてゐる、のみならず、到底出來さうにもない相談を强ひて持ちかけて見ると云ふ樣なことは毛頭ない。かゝる委員の顔振ならばこんなことまでは通過するだらうと云ふ見當もよくついてゐる。俗吏としても十分に成功する人たることは殆んど何人も疑ふまいと思はれた。豫て想像してゐた抱月君とは全く異つた人であつたことを悟るとともに、往日の疑は全く氷解したかといふと、そこまではまだ達し得ない。抱月君――敍事文風の論文――自然主義の鼓吹――文藝と行爲との差別觀――俗才ある人……嗚呼僕の抱月觀は依然としてまだ「煮エキラヌ」ものである。但し、氏が溫厚な人であつて、正直な人であると、文藝上の人としてでなくて、俗人としても確かに立派な紳士であつて、所謂る文士とは全然その流を異にしてゐると云ふとのみは、誰が見ても確であらう。

△アイ、アイラッシ、アネクドート

中村星湖

私共は餘りに接近してゐる。「近いから解るだらう」と言ふのは間違ひだ。眼（アイ）は睫毛（アイラッシ）を見ることが出來ない。けれど假りに離れた積りで考へて見よう。

「島村氏は稀に見る聰明な人である。」第一に斯う言へる。

『氏は皮肉の言へぬ人である。少くとも言はぬ人である。』第二に斯う言へる。

『聰明なるが故に計畫の多い人である。』第三に斯う言へる。

『計畫が多過ぎて、やゝともすれば實行の伴はない人である。』第四に斯う言へる。氏自らはこれをその躰質の餘り强健ならざるに歸してをらるる。

まづこんな事より外私には解らない。頭のさきから足の裏までインテレクトづくめの人は、よく物事を皮肉に取扱ふものらしいが、氏にその皮肉の見當らないのは、何處かにナイヽヴなオネストな心持が存するからであらう。もし氏がムカツ腹を立てる場合があるとすればこの爲で、もし氏が他から誤解さるゝ場合があるとずれば、やはりその爲であらうと思ふ。

故樗牛や筑水氏に比すれば、氏はパッシヨネートの性質を缺いてゐる。氏の特色はやはりナアヴスな點にあるやうである。

氏を思ふ場合に、私はよく森鷗外博士を思ひ合はせる。同じ石見の人である故か、全然とは言はない、いくらか似た所があるやうな氣がする。鷗外博士には違つた事は無いが、聰明は勿論私共の言ふまでもない、皮肉さうであつてやはり正直な人らしい。

二人の比較とは何の關係もないが、私は次のやうな話を聞いた事がある。

島村氏がまだ佐々山の苗姓を名乘つて郷國の郡役所だか裁判所だかに勤めてをられた少年の頃、同じ石見の人で森氏と同窓で大學の一年までとか一緒に行つたと言ふ人が、病氣で中途に學問を止めて島村氏と同じ役所に勤めてゐた。島村氏に文學熱を鼓吹したのは其人で、東京へ出て早稻田へ入る前に森氏に逢ひ、學校の選擇に就いて意見を叩いたのも其人の紹介に依つてゞあつた。其時森氏は帝大の方を勸めたが、島村氏は或事情から結局早稻田へ入る事になつた。其頃島村氏は森氏から幾らか金を借りればならなかつた。其後無沙汰が續いて、何だか行き惡くゝなつてゐるうちに、佐々山姓が島村となり、學生が卒業生となり、雜誌記者となり、新聞記者となり、辭書の編纂者となり、早稻田の講師となり、英國留學生となつた。英國から歸ると氏は島村と言ふ名刺を添へた手土產を持つて森氏を訪れて行つた。森氏の母堂が玄關で迎へられたが、氏をもとの佐々山であると知つてゐたやうであつた。

アネクドートはこれだけである。ずつと以前に聞いた事ゆゑ、細かい所は間違つてゐるかも知らぬが、大筋はこんな事であつた。

『氏は隨分生活の苦さを嘗めた人である。』最後にこれを附加へて置きたい。『氏の子弟に對する親切は多く此所から發するやうである。』

△島村君について

森林太郎

○批評家としての島村君には、今日までの處でも、二つの大なる成功・

がある。これは一しよにして一つに勘定しても好いが、先づ二つとする。

坪内君の後を承けて、早稲田文學に二度目の花を咲かせたのが一つ。
それから所謂自然派を世に紹介したのが二つ。

自然派の紹介はラスキンがP.R.B.の紹介をしたのに較べても好い程の成功で、島村君はこれ丈で事業を廢めても、恥しくない過去を有してゐる。

○詩人としての島村君は未知數である。

今日まで外に現れた形迹に就いて判斷することを許されるものとすると、からである。僕は頃日ドストエウスキイを讀んでゐるが、或る獨逸人があれを評した詞に「ウウフエルロオス」といふことがあつた。岸がないといふことである。此詞は長處をも短處をも指してゐる。島村君は全くその反對であるらしい。自家批評に長じてゐる。きちんとした作を出す。大失敗の作といふものは決して出すまい。此邊は自然派の批評家が近年僕(森)に下した批評を取つて、其儘島村君に献じても好いかと思はれる。どれ丈えらい作を出すだらうかは、問題である。それが未知數の未知數たる所以である。

○島村君は恐ろしく遠慮深い人である。これまで直接に僕を評したことは一度もないだらう。何か書くのに、僕の體の周圍に圏を書いて、丁寧に避けて通つてゐる。

僕も直言や無遠慮を以て人に傲る資格を有せない。又そんな資格を得ようと努めてもゐない。併し島村君ほど遠慮をしない。そこでいろんな事をしやべる。

○文藝委員會はまだ目も鼻も明いてゐない。併しあの會では島村君のやうな人のゐるのを、僕は頼もしく思ふ。

△抱月氏

秋聲

「早稲田文學」が文壇に對する功勞は、先何を措いても文藝を世のなかへ引張出したと云ふ一事に歸せねばならぬと同じく、抱月氏などの功勞も亦文藝を實世間へ接近せしめた點にあると言ひたい。

抱月氏は犢牛の如く、一代の思潮を動かすやうな問題を作出す人でない代りに、時處に應じて紛糾せる文境の思想を綜合し、同情ある調節を試みやうとする人である。その人物も溫和、頭腦も論理的で、大した獨創の見には乏しいまでも、理解力批判力に富んでゐることは言ふまでもない。まだ是と云ふ深い大論文もない代りに、時々の評論には穩健な文章が多い。

一寸した隨感やうなものを、をり〳〵書かれるが、そんなものも餘り得意でないと見えて、餘り鋭いものは見あたらない。純なる文藝的評論も素より一世の師表であるが、いつか「讀賣」の紀念號に載せた「文藝の將來」と云ふやう文藝對社會と云ふやうな性質の問題には非常に穩和で

有益な意見が覗はれる。

是迄の抱月氏の態度は、どこかチミッドで、惡く言へば煮切らないやうなところもあつたが、氏も漸く年四十に達して、造詣も深く、人としての所信も强くなつて來てゐるであらうから、今迄のやうに左右に顧慮するとなしに、文壇に働かれることであらう。近く文藝院に於ける行動などは、高い意味に於ける文藝的事務家としての働きに過ぎないけれど、僕等の最も同感するところである。そして抱月氏が、かう云ふ處で其の技倆を發揮する人ではないかとさへ思はしめるものがある。

氏はまた始終創作的氣分を失はない人である。「新著月刊」當時に書いたものには、傑作も可也にあつた。紅葉先生なども其才に敬服してゐた一人で、單に文章の點に於ても寧ろ宙外氏よりも重きをおいてゐたかにも思ふ。無論他の平記者とは違ふが、新聞記者になつたことも一度はあつた、しかし氏は矢張書齋の人で、頭腦も多方面だから、一方へ走ると云ふことをしなかつた。一つは內氣な其性情が、然うさせなかつたのでもあらう。けれど其様な氣分は今でも充分あるやうに見受けられる。

氏は鷗外氏をもつと、おとなしく平たく通俗にしたやうな型の人である。逍遙氏のやうに一時に一つの事に執着する人ではないらしい。

△聰明な人

内田魯庵

○島村君は極聰明な人だ。義理明晰、何事にも能く徹底してをる。隨つて議論も穩健着實で且極めて公平である。或る方面には早稻田の臭が島村君にコンセントレートされてるやうに噂されてるさうだが、必ずしも爾うで無い。島村君のやうに常に諸生を薫陶しつゝある人は時としては諸生の爲めに謀らねばならぬ事があるのは當然で、一面には門下を提撕すると同時に一面に於ては世間に紹介してやらねばならない。之を直ちに黨派心や何かのやうに云ふのは誤まつてをる。

○島村君の論文は八面玲瓏、實に申分が無い。が、學者の說には多少誰のにも其傾きがあるが、殊に島村君は餘りにプルーデントで、始終揚足を取られまい取られまいと苦心してをられる痕跡が見える。隅から隅まで行屆いてをるが、動やもすれば、プルーデントに累はされて言切らない處がある。隨つて何處かに喰ひ足りない處がある。學究的だといふ人もあるが、學究的では無い、問題の窮所に徹してをらんのだ、敵のトヾメをさゝんのだ。が、之は島村君がプルーデントである爲めに、玆に島村君の苦心がある。例へば居合拔が今にも刀を拔きさうで、長々と口上を陳べてゐる。ヨウ拔くか拔くか、ト待つてろが何時まで經つても拔かない。アハヤ拔きさうな素振までして見せるが到頭拔かないのとおなじである。

○であるから島村君はファイターとしては不十分である。火花を散らす事の出來ない人だ。トヾメを刺す事の出來ない人だ。八方へ眼を配る。眼を配るだけならいゝが氣兼をする。氣兼をするに留まらないで神經を躍らせる。ファイターとして強い人では無い。尤も聰明な人は物の兩面が能く見えるからムキになつて猪突するわけには行かぬが、最一つ云ふと島村君は中々利口な人だから利害の關係も明かに見てをるから勢ひファイターとしては讓る處がある。島村君自らファイターたるを期してはゐまい。尤も玆に云ふファイターといふは岩野君のやうな人をいふのでは無い。

○島村君はアレで社會的野心も相應に持つてるらしい。早稻田とは義理もある、切つても切れない關係がある、からではあるが、一つは帝國大學を除いては早稻田は學界の堅壘であるから、此堅壘に據つて事を成さうといふのではないかとも思はれる。或は然うで無いかも知れぬが、然うらしくも見える。故高山樗牛が帝國大學に對する態度と早稻田に對する島村君の態度を比較すると、其關係が同一程度でなかつたからではあるが、著るしい差違がある。島村君の力量材幹が優に文壇に覇を稱するに足りてゐながら、僅に早稻田の一角を守るが如き觀あるは之が爲めでは無からう乎。然うでなければ幸ひだが、萬に一つソンナわけがあるならお氣の毒だ。早稻田に縛られなかつたなら最う一層伸びる人である。

○が、此頃風說子のいふ處に由ると、文藝協會の慰勞會とかで、島村君は世間はいつ迄も坪內先生のシエークスピーヤに感歎しておらんから更に向上して社會劇に移らなければならぬ、といふやうな意味の卓上演說をしたさうである。此說の眞僞は知らない、又其當否は云はない。が、小坪內と云はれるほど如才無い島村君が坪內君の前でコンナ事を云はないまでも臭はしたとすると、島村君は少し態度を更めたか知らん。文藝委員會で島村君一人が背負つて立つたやうに氣焔を吐いたと新聞に見えるが、若し眞實なら島村君の爲めに祝する。何しろ學問識見兩つながら勝れた人で、文藝委員會は島村君一人の爲めに千鈞の重きをなしてゐると云つてよからう。が、實は島村君を能く知つてをらんのだから、當つてをるかをらぬか、事に由ると丸で見當ちがひかも知れぬが、マアこんな事で御免を蒙むつて置かう。

編輯だより

▲餘白を藉りて諸君に一言申上候。次號よりは欄の分け方及び編輯の體裁等に些か改善を加へ、又讀み物等も餘程斬新にして趣味あるものを載せたき考にて社員一同大車輪に働き居り候。內容を一々申上げ候事はお預り致し候へ共諸君の歡迎を受くべきとは堅く信じ居り候。
▲竹越與三郎氏は次號に論文を寄せらるべく、又德富蘇峯氏の「大久保利通論」も多分次號には掲載するを得べしと存じ候。金子筑水氏も久し振りにて論文を寄稿せらるゝ筈に御座候。
▲田岡嶺雲氏の「數奇傳」は次號よりいよ〳〵面白くなるべく候。今迄のはホンの發端にて氏の波瀾重疊の生活、苦惱煩悶の歷史は次號以下に描き出さるべく候。されば此篇の價値は次號以下に發揮せらるゝものと御承知あり度候。「藝備日々」の主筆前田三遊氏より「數奇傳を讀みて」といふ一文を寄せられ、又ハガキにて批評せられたる讀者も尠からず候へ共、頁數の都合にて皆割愛いたし候。然し著者の方へ廻して著者の參考に供し候。御承知有度候。
▲本號に掲載せらるべかりし水野葉舟氏の小說「親」は都合あつて次號の誌上を飾ることゝ相成り候。近頃流行の高野さんを信心する母と若夫婦との感情のそぐはぬ所を描きし物に候。
▲季、梅雨の候に入りて天候甚だ人によからず。切に讀者の御健在を祈り申し候。(一記者)

(中付の一)

日本アルプス 第貳巻

裝釘及び繪畫寫眞

表紙木版三度刷畫學紙　中澤弘光
見返石版三度刷　杉浦非水
扉紙石版三度刷　中澤弘光
越中劍ヶ岳（油繪三色版）　中村淸太郎
富士山下古驛（水彩畫三色版）　茨木猪之吉
富士山（網版水彩畫）　大下藤次郎
信州飛驒境上日本アルプス連巓（八ツ切三枚續き大版コロタイプ）　高野鷹藏印畫

小島烏水新作

第一巻 は山岳研究諸論文と日本南アルプス白峯山脈縱斷旅行記の二大篇より成る

林田春潮氏『都新聞』に評して曰く『自分は自然の日本アルプスを讃美するが如くに此**藝術の日本アルプス**を稱揚する……自分は此書を譯して就中**アルプス自慢の歐洲人に見せたい**と思ふ』と

毎巻讀切挿畫及び地圖コロタイプ●石版●三色版●木版十五圖版◎定價郵稅第二巻に同じ

菊版三百頁　美術裝釘
金緣付函入
定價貳圓　郵稅十八錢

挿繪 コロタイプ大版木版淡彩二度刷三色版亞鉛凸版寫眞網版等計十六圖版及び木版數個

第二巻 には**富士及び裾野**●**日本北アルプス**の立山槍ヶ嶽兩大山脈及び**山谷研究**論文等長短**二十有八篇**を收む就中日本アルプスは本州中央を橫斷せる高大無比の**大山系**にして高山深谷氷雪森林雲霧の**深秘**なる大自然に富み最も變化せる**風光**と複雜せる地質構造と**高調の色彩**を有し從來の**地理文學繪畫**より削除せられたる境域なりしを著者**連年**の踏査を俟ち世に紹介せられたるものなり文中の**繪畫及び寫眞**の全部は悉く日本山岳會員の實査作成に係り從來未だ世に公にせられず**學術上**より見るも極めて有益なる**作品**なりとす

發兌　東京市京橋區中橋廣小路六番　振替貯金口座東京四一〇九番　**前川文榮閣**

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

七月號

婦女界

一冊十五錢 郵税一錢五厘 六冊九十錢

振替口座東京一三五

東京 神田 同文館

（中付の四）

◎信仰に活きよ……近角常觀

◎自覺せよ若き女……内田魯庵

▲虚榮心より起りし悲慘の實例……山室軍平

▲近代思潮と若き娘の長所……海老名みや子

▲涼味は到る所に滿つ……大倉桃郎

▲訪問した時された時……笹木幸子

◎轉地と婦女の衛生……醫學士 大瀬貴明

◎初夏の小兒衛生……醫學士 豊福 環

◎小説『とみくじ』……内田魯庵

◎婦女と旅行の趣味

▲岩手山と八ケ嶽……野口幽香子

▲赤毛布式の旅行……目賀田逸子

▲壯快なりし富士登山……日向きん子

▲懷かしい相州三崎……竹越竹代子

▲娘の爲に選んだ旅行方法……加納諡子

▲富士山を紹介したい……野中千代子

▲旅行は活動的である……下田次郎

◎顔容と髪の結びぶり……伊賀とら

▲夏向の香水と使用法……佐々木玄兵衛

▲お茶を甘く飲ませるには……山本嘉兵衛

▼懸賞 新題 一等五圓 以下數十名 ‖ 懸賞、和歌、俳句、繪畫、習字、一等二圓 以下數等

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



春から秋まで

眞山青果

一

ここから靜岡へ行つたおせつは、三年經つて、臺灣の方から又この家へ歸つて來るやうになつた。

彼土では、兎も角、或る請負師の妻になつて居た。今度歸つて來るにしてもこの家からと云つては、連戻しに行く父親の旅費を出して貰つた丈の事、別におせつの軀に結いて借金と云ふは無つた。それは、この一月だつた。

前から種々の噂が傳へられた。こちからては皆、世帶に窶した、病み窶れたおせつの姿を見ることと思つて居た。で、國府津の旅宿から電話が掛ると、主女は先づ、人に見られて耻しくないだけの着物を風呂敷包に用意

した。然し、行つて見ると、おせつは思つたより揃つた扮装をして居た。たゞ、京都から穿いて來たと云ふ、淺黃緒の麻の草履だけは脫がせて、自分の履物と換えさせた。

尤も、荷物らしい荷物は無かつた。彼士から道中持つて來たと思ふ籐細具の大きな果物籠には、香の高い暖國の果實が殘してあつた。外に、櫛道具や細々した物を入れる舊るい更紗模樣の提げ袋と、昔風に皮紐の付いた父親のズツク鞄とが、襖の際に片寄せてあつた。

この旅屋の湯場は、四方ともガラス張になつて居て、おせつの見馴れた相模の海が前に擴つて居た。襟のある着物を肩にかけた瘦せた姿は、窓のガラス板に顏を觸けるやうにして、冬の日に濃い海を眺めて居た。

「おかみさん、これでも又、出られませうか。」

際立つて赤いおせつの唇が斯う笑つて云つた。そして、透明な湯の快く溢れる、乾き曝された板間を入つて來た。湯槽の底、木目の間に砂が沈んで居た。

おせつの舊るい名の市松は、牛込から來たと云ふ背の低い女が名乘つて居た。また、齲齒を病んで泣き〳〵して居たお榮は、萬作となつて背が見違える程伸びた。その後、新しく來た者もあつた。前と少しも變らないのはお袖一人であつた。一人二階に引込んで居て、然う懷しさうにもしなかつた。おせつは出るならば、前の名の市松で出たいと思つて來た。この名は、桐生からの名であつた。

何時も背筋をシヤンと伸して居るおせつの父親は、用にも滅多に口を利くまいと云ふやうな人であつ

た。何所か斯う、氣慨を藏してゞも居るやうな此の老人は、時勢を追ひ得なかつた自分の不明を深く耻ぢ、好くも惡るくも娘の一生へは口を出すまいと、固く心を決めて居るやうにも見えた。おせつは疎々しく見えるほど、父の前を畏れて居た。自分の思ふ事は一切女主の口を通じて云ふやうにした。父親は云ふ通りに、約定の實印を捺した。そして、その三日目に東京へ歸つて行つた。

丁度この頃、近い濱々は鰤の大網に賑つて居た。白く九枚笹の紋を縫つた羽織を被けたおせつは、お袖の挨拶を賴んで、その方の人達の座敷へも出て見た。中には、まだ前のおせつを覺えて居る網主等もあつた。男を追ふて臺灣まで行つた頃の噂を聞いて居て、好く客に揶揄れた。それよりも却つて同情らしい事を云はれる方が煩さかつた。醉ふと泣き出す癖のある市松や、家に居るとは全るで別の人のやうに燥ぎ立てるお袖なぞの間から離れて、おせつは橫の方に袖を掻合せて坐つて居た。

舊るい城下の影をまだ殘して居るこの町は、新開の土地ばかり見て來たおせつの心を妙に寛がせた。昔のまゝのお濠、見付跡の高い石垣、松林、昔の宿場を思はせる町家の土間作り。おせつは好く夕方から然う云ふ所を一人歩いて居た。海岸にも立つた。そして、市場橫町の木地曳の所に嫁いて居る、先の下女のお源や、寫眞屋を廢めて小さな西洋料理の看板を出して居る宇佐山の家やを思出しては訪ねて見た。

おせつが今度初めて但木に遇つたのは、その後間も無くてあつた。用あつて帳場へ下りて來ると、そこの肥つた女中頭が、おせつを低い聲で鉢前へ呼び出して、囁いた。

「へえ、私を。」
おせつは斯う云つたのみで、裾を引いてまた座敷へ戻つて來た。そして頭を抱いて寢仆れて居る但木の顏を笑ひもせずに見て居た。但木は市松を呼んで居た。

日に一度ぐらゐづゝ、おせつは又思出したやうに離れの中二階へ上つて行つた。そこには、背髓を疾つてる庄太郎が、今も小兒のやうな顏して仰向きに寢て居た。それでも、おせつの顏は覺えてるかして、初の時から見て笑つて居た。

蒲團から唐紙、窓掛まで總て青い色を揃へて居るこの部屋からは、城跡につゞく足柄の連山が廣く眺められた。おせつは讀本など持つて來て、こゝに小半日横になつて居る事もあつた。

「お前、傍に居てくれるのは好いが、惡るい話など聞かせちや困るよ。」

氣の忙しい、高聲の女主は、日に幾十度となく玆へ出たり入つたりして居た。そして、心配さうに斯う云つて行つた。

春の雪は、降つては溶けた。午前の日のカッと明るい障子に、屋根から溶け落つる點滴が雨の降るやうに映つた。縁側を濡した。

障子を明けると、山々が、日に〳〵近く歩いて來るやうにも思はれた。

二

但木はおせつの前へ來て、ひどく燥いで見たり、又沈んだりした。この人と前の高助との間は、おせ

つも聞いて居た。あれは戰爭のあつた後だ。後備の隊から歸つて來た但木は、嚴しい家から金を搬んで來て、この町に新聞のやうなものを創めた。それから何年になる――自分ばかりでも、その後隨分種々の事が過ぎた。この人は何時まで斯う云ふ所を彷徨いて居る人なのだらうとも、おせつは思つた。

或る晩但木は雨に濡れて來た事があつた。ひどく悄げ切つて居て、短い口髯を嚙みながら、「駄目だ、駄目だ。」と自ら叱るやうな事を云つて居た。何んでも傍にあるものを取つて、戲書するのが、この人の癖になつて居た。遲くまで待つて見たが、返事ばかりあつて、市松は到頭來なかつた。おせつはその晩、そこへ泊つた。

斯うして降るこの頃の一雨ごとに、おせつは、足音もなく忍び寄る春の呼吸を嗅ぐやうに思つた。野に淺い麥の綠が、顫えるやうに夕暮の濕りを吸つた。濱の漁師に聞くと、黑潮が日に〳〵陸へ近く流れて來ると云ふ。立つて指示する方を見ると、大伊豆の岬から掛けて、濃い紫色の縞目が沖合に烟つて見えた。

「お源、お松は居る。」

晝からメッキリ長くなつたこの頃の午後など、道の濡れた魚市場を逦り拔けて、おせつは廂の低い木地曳屋の臺所を折々窺いた。そして、肘の節のくびれた兒を這はせて遊んで居た。家から迎ひの者が來ても、立上る迄が臆劫さうに見えた。目に沁みる柊の臭を嗅いて、ボンヤリ立つて轆轤鉋の廻るのを見て居る事もあつた。

座敷へ出てもおせつは妙に張合なさゝうに灯を見て坐つて居た。又、帯を締めてから急に厭になつて、そこに坐つて了ふ事もあつた。それでも女主は、『好くあの氣性で、それを見て居ますね。』と他に云はれながら、別に責めるやうな事は云はなかつた。

「あれも一時だよ、あゝ云ふもんだよ。それに、身體も餘程いぢめてるやうだ。」と、然う云つて外の者どもを斯うなだめて居た。おせつもその事は――その身體だけは思はない譯に行かなかつた。自分から、醫者に見て貰ふ氣にもなつた。

斯う云ふおせつに、氣を詰らせない人は但木であつた。何か斯う、充されない渇きを心に持つて居るやうな渠は、他の心の中まで入つて來るやうな事は爲なかつた。おせつが默つて居る間は、何時までも膝を搖りながら考事をして居た。そして、時々思出したやうに、『何うした。』と笑つた目を上げる。舊るい家の家長に供なつた鷹揚な威嚴、然う云つた態度でもつて他に對して居る但木を見ると、おせつは忘れて過ぎた桐生の人を思ひ出させられた。

但木は二日ぐらゐ、三日ぐらゐ、この町から歸らなかつた。何が面白いのだらうと、家々で怪しまれながら、晝は寢轉んで何か考へたり、又急に跳ね起きて、低い餉臺に凭れながら何か書いたりして居た。それを、市松が知らないのではなかつた。或る朝、肘にヨジームを塗つて居るおせつの前へ行つて、市松は態とらしい丁寧な言葉遣ひをした。

「堀は來ますとね。」

「えゝ、來ますよ。」

「この頃も、塔の澤へ來てましたつてね。」

「えゝ、來ましたよ。」

眼瞼の長いおせつの目は眞直に、毛に癖のある市松の總髮を見て、次の言葉の來るのを待つて居た。

市松は立つて行つた。その但木の家はこゝから四里も離れた、堀と云ふ山村にあつた。

おせつは、市松の目から避けやう〳〵とする但木を齒痒ゆさうに見て居た。

三

南からの烈しい風が、耕地の方から砂埃を卷いて來た。山の方も海の方も、遠い中空に、鐵の鏽のやうな赤い色が澱んで動かなかつた。おせつは夜中幾度となく惡夢から目覺めて、懶るい耳に海の唸りを聞いた。洩れ所のない生溫さの闇が寢苦しく壓し付けて、毛の生際から汗を滲み出させた。濱の言葉で云ふこのカッレ空が二三日の間續いた。そして、烈しい雨を眞夜中から寄來した。

雨の後に、靜かな曉が來て居た。

雨戸を一枚繰り明けた。同時に、まだ蒼白い闇の殘つて居る狹い庭から、或る新鮮な閃動がおせつの網膜をパッと揺がした——朝燒けの雲を思はせるやうな明るい薄紫の色。それは、昨日まで見て居た山霧島の下枝が、唯一晩に、然う云ふ鮮かな花を簇り咲かせて居たのだ。葉のない眞直な枝からは、ボトリ、ボトリ、と濡れた土へ露を滴らして居た。

おせつは足の裏の冷たい緣側に踞んで、長い肘を腿の下に組んで、そのシーンと頭の底へ滲みて來るほど爽かな、雨の後の土の香を何時までも嗅いで居た。

次の部屋には、萬作と今一人の若い女が、縋り付くやうにして同じ寢床に寢て居た。眞直に流れて來る朝の光を拂除けるやうに、萬作は目の澁い溫かい頰を枕から上げたが、直ぐに又蒲團にもぐり込んで、若い時の睡に陷ちて了つた。市松もお袖も昨夜は居なかつた。

暗らい臺所の方から、板に水を灑ぐ音がして高く嗽する聲が響いた。女主は斯うして、十何年かの間、その不具な子の爲めの信心を一朝も怠らなかつた。おせつは其所にあつた草履を足へ掛けて、外の方へ出た。

『だア、せつちやん。せつちやん。』

斯う云つて、庄太郎は寐て居る襟の邊を探すやうな目付した。おせつは女主に賴まれて、然う云ふ時には枕元に坐つて居た。

『そして、紅皿歌ふ。』不具な兒は蒼味の深かい目を上げて促した。

『何よ、庄ちやん。』

『そして、そして、紅皿――歌ふ。』

身體中の關節が解けたこの兒にも、不思議に、悲を聞く耳だけは殘つて居た。おせつは未だ小さい時、

奥州の方から來た旅繪師に敎へられた、悲しい紅皿鈌皿の歌を思出しては唄つた。小兒は睫毛の深かい目から穩和しく聞いて居た。

おせつは又、三味線を持つて來て、昔稽古した上方歌など低く唱つた。唱つて居るうちに、何時の間にか自分が引き入られて居る事もあつた。

この中二階の廂に、雀が巣を掛けた。毎日、その下の縁側へ落して行く藁屑や小枝で氣が付いた。おせつはこゝに立つて、毎日變つて行く山の色を眺めた。この頃の雨にそゝぎ落された櫻の枝から、軟かな青葉が芽を出した。洗つたやうに透明な空を吹いて來る微風は、青い野の匂を持つて來た。

臺灣から寄來した手紙は、矢張りこゝに寢轉んで居るおせつに渡された。心配さうに窺いて見る女主にも見せながら、おせつは膝の上に擴げて見た。それは然し、思つたよりサッパリした手紙であつた。おせつが今のやうに暮して居る事も薄々は知つて居るらしかつた。

『然う云つたッて、お前、お前だッて隨分苦勞したんだもの。』

隙のある齒並を見せて、女主は笑つて居た。

『いゝえ、本當ですッて、誰が最う。一旦斯うと決めたら、死んだつて然うに通さなくつては。』

おせつは解けかゝつた繻子の帶を締上げながら、然う云つて立つた。そして、障子に手を掛けて、午後の日の下に煙る山の襞を眺めて居た。

『ですがね、おかみさん——。』

暫くして斯う云つたおせつが氣が付いて見ると、女主は小兒の口に一口〱攪んで居た匙をそこへ置いて、勝手の方へ何か取りに立つて行つた。

おせつは又外を眺めた。

頸筋の根をガッシリ攫まれて居るやうなこの三年の生活。それを厭ひ〱、身踠きしながらズル〱に引摺られて居た自分、おせつは始終それを思出す度毎、口惜しさに身體が顫えた。裸な肩を擡げて、穢ない幣を家の中に振廻すやうな、あゝ云ふ思切つた事を爲るのには、好く〱思案にはとけて、長い間の用意もした事なのだ。それが、手もなく見破られて、相手にも爲れなかつた時には、拍子拔けして張詰めた意地も何も無くなつて了つた。

『此奴ばかりだ、此奴が。』始終斯う思つて、目の底から凝つと睨めながら、その癖、矢張りこの男を遁れる事が出來なかつた。おせつは今でも時々、日のキラ〱燒ける際涯のない礫磧の中を、穢ない苦力のトロックに押されて行く自分の姿や、驟雨の後に息が詰まるほど匂ふ樟林の下のテントだの、蝎や守宮が灯を慕つて這ふ黒い壁だの、その當時の事を夢に見て、目を覺した。

四

後に箱根の山を背ふて居る此の町には、夕暮が早く下して來た。そして穩かに長く通り過ぎた。

おせつは市松の顏を立てゝ、今日の晝前から今まで辛抱して、海の見える家に附合つて居た。市松は貰つた紙幣を皆小さな銀貨にくづして、大業に口惜しがりながらそれを壁へ投付けた。掌の白い船員ら

しい客は、目に入る葉卷の煙を横に咬へ直しつゝ、笑つて、その銀貨を自分の前の餉臺へ積上げた。おせつは潮を沸した湯から出て、そこにとゞいてあつたセルの單衣に着かえた。そこにある、輕るさうな下駄を穿いた。

こゝから、町の通りへ出る間には、舊るい松並木が濃やかな影を落して居る所があつた。その下の砂地に音を立てゝ踏む自分の足が白く遠く見えた。そこから、小流れに沿ふて生垣の細い道になつた。草葺の或る一軒家の前へ來ると、堀にひたしてある菖蒲の根から、静かな匂を夕闇の中に漂して居た。肩に手をあてゝ見ると、シットリと濕つて居た。

籠の行燈から灯が、青葉を洩れて來る、町の曲り角まで來た時、不意におせつの背に飛上つた者があつた。逞しい犬は少し退つて、前足を伸べて、振切れるほど尾を鳴らした。ステッキに鎖を結び付けて、町の方から但木が來た。

「あら。」

「おゝ。」

二人はそこに立停つた。

「何うしたの、その髯。」

やゝ暫く行つてから、おせつは思出して笑つた。

「これか、むゝ。」

但木は重いやうな腮の髯を掌て鳴らした。

『お前に話さうと思つて居たがね、俺ア來月までこの髯を剃るまいと思ふんだ。もう、自棄だ』と云つて、それでも笑つて居た。

『それでも、書くには書いた？』

『むゝ、書いた。然し、駄目だ。』

斯う云ひながら女の後に付いて、或る家の細い露地口から入つた。

無いと云いても、家の中には風があつた。但木は灯の搖らぐランプを壁際へ持つて居つて、黑い嚢の中から罫紙の帳面を取出した。そして、ドシリと腹這ひになつた。

『讀むよ、好いか。羽虫――これが題なんだよ。』と云つて、少し灯を引寄せた。

それは、山の村に爲る事もなく暮して居る青年が、唯々都の生活に憧れて居る、焦慮の心持を書いたものであつた。丁度、障子の棧の間から、外の明るさを慕つて翅を疲らせて居るやうな境遇を羽虫に譬へたのであつた。

おせつは開放した閾に踞んで、灯がスッと闇に流れる、外の青葉を見ながら聞いて居た。そして、この人の口から一度も聞いた事のない、山村の生活を心に描いて居た。一生俯向いて土臭を嗅ぐ外に欲を思はない痩せた父親、指の節の太い、齒の大い母親、亞米利加へ勞働に行つた夫を待つてる姉、然う云ふ山に育つた人だちがボンヤリ目に見えた。

『俺ア最う好い、駄目でも好い、山の中で土龍(もぐらもち)のやうに死にさへすりや好いんだ。』

讀終つてから、暫く待つて居た。然して、兩手に頭を抱へて、斯う云ひながら仰向に寢返つた。おせつは、別の事のやうに斯う云つた。

『そして、この初節句はするんでせう。何うなの。』

『親父(おやぢ)は祝ふッて云つて居た。小兒の節句より俺が何うなるんだ。小兒の顏を見る氣もなくなつた。』

但木は疲れたやうな生欠伸を嚙みながら、部屋の中を歩き廻つて居た。

冷々とした風が、海の方から吹いて來た。おせつは痩せた肩の骨を窄めた。

雀の巣は餘程出來上つた。若葉に降りそゝぐ日に翅を光らして、二羽の親鳥が出たり入つたり、急しく藁屑を搬んで居た。おせつは、この頃から初めた押繪に倦きて、懶るい肘を揉んで居た。眩しい障子から、顏が少し充血して居た。

『庄ちやん。』と、呼んで見たが、返事がなかつた。明るい日に疲れて、不具な兒はスヤ〳〵眠つて居た。氣が付いて見ると、下の方もヒッソリして居た。

靜かに梯子段を下りて、窺いて見るやうにして長い四疊の襖を開けて見た。こゝの障子も取拂はれて、明るくなつた。隣の土藏壁との間から、外の風が薫つて流れた。

『今日もかい、萬ちやん。』

そこに萬作は、筆の軸でカチ〳〵歯を叩きながら、足を投出して長い手紙を書て居た。家に居ると寢るのを役のやうにして居るお袖は、他に頓着なく搔卷を被つて居た。
「些と承ひませうか。今日も。」
「あら、其所どこぢやないのよ、姉さん。」
色の白い萬作は、胎毛のやうに薄い眉毛を上げて、櫺子窓に腰掛けて居るおせつを見上げた。おせつはユッタリ微笑しながら、若かい人の取留も無い願ひや訴へを聞いて居た。萬作は、本當の年十九であつた。
「そら、出た、萬ちやん。」
おせつは急に聲を取換えて指示した。
「噓よ、姉さん。」
萬作は話の腰を折られて、少し慌てゝ赤くなつた。それでも袷の膝をつゝんだ。
「出やしないわ。」斯う云ひながら、又話しつゞけた。
そこの、簞笥の上には、西洋菓子の箱を雛段にして、萬作の玩具にしてる大小の人形が丁寧にならべられてあつた。好きな、小三金五郎の本もあつた。
「姉さん、私この頃、妙な事を考へて爲樣がないんですよ。何んだか、斯う苦勞がして見たくなつたの。お袖姉さんに然う云つたら、酔狂な人だッて。」

萬作は又こんな事も云つた。
「今だつて、お前さん、苦勞があるぢやないか。」
「駄目、こんな苦勞は。最少し何うかなつた、悲しい苦勞。何んだか、今だけぢや詰らないやうな氣がするわ。」
「然うさね、私もその中に一つ探してゝ上げやうよ。」と、おせつは笑つて居た。
「いゝえ、冗談でなく本當に然う思ふわ、夕方なぞ。」
そこへ、市松が醉つて歸つて來た。おせつは中二階の方へ立つた。

五

右の肘の痺が日に擴がるやうに思はれた。今日も昨日も、青葉にそゝぐ雨の濕りが通して、指の先に濡れた紙でも貼られてるやうにあつた。斯う云ふ日は、氣分も重かつた。塗枕を中二階へ持つて行つて、本を讀むでもなく、ポンヤリ暮した。三年の間、穩しく撲たれて、突倒されて、一日も自分の日と云ふではなかつた。その苦勞が唯この疾患を殘したと思ふと、自分の身體ながらシミ〴〵傷ましいやうな氣がした。
「何うせ、又斯うなるんだつたら。」と、今になつて齒痒ゆくその時を思出される事が幾らもあつた。
雌の雀は最う塒について居ると見えて、雄の一羽が雨に濡れて、急がしく出たり入つたりして居る。こゝから見て居るおせつの目を知ると、廂の手前からヒラリと外れて、やゝ離れて黐の木の天頂から、

慧しい目付して油斷なく隙を窺つて居た。馴らさうと思つて稗などこぼしして置いても、顫えて近寄らなかつた。餘りシツコク恐れられると、却つて驚かしてやりたく思ふ事があつた。

庄太郎も何所となく弱つて居た。喰べる事は常より進むくらゐだが、傍から話掛けられても、煩ささゝうに下目遣ひして居た。少し醉ふと最う今頃から肌拔ぎになりたがるほど肥つた女主は、晩酌の膳からも幾度となく見に立つて來た。

『好し〳〵、今日はお母さんが揉んで上げるよ。』

女主はわざ〳〵手拭で鉢卷などして、兒が眠り付くまでの苦勞を厭はなかつた。身體中の關節〳〵を靜かに揉んで貰はなければ眠れないやうな癖が付いて居た。

雨の中にも折々、雲の破れ目を出て、強い日光が土を射る事があつた。斯う云ふ日の一日、おせつを乘せた靑い幌の俥は、舊街道の松並木の間を走つて居た。

町から一里ばかり離れた、海岸の貸別莊に住んで居る但木の友人の所へ、東京から若い西洋畫家が來て居た。その畫家が但木と二人して來て、是非その姿を書きたいと云つた。その描いた繪はその友人の書いた本の口繪になつて世間に出るのだからと、但木は賴んだ。

烈しい日光は搖れもせず、眞直に土に落ちた。何年もの夏の塵埃を浴びた茅葺の漁士町の屋根〳〵は、白く光つた。長い木橋を渡つて、少しの間田圃道を行く時、靑草のいきれがムツと顏にあたつた。

農家の軒には新しく白い繭を日に乾してあつた。

そこの主人、但木の友人は今朝東京へ行つて居なかつた。但木の後から、若かい書家は白い筒袖に細い兵兒帶を締めて出て來た。髮を眞中から長く縮らせて、娘のやうに身體を捩りながら話する人であつた。

海に向いて開放したこの二階を、風は烈しく吹拔けた。その邊に引散した雜誌や本がヒラ〳〵と翻るのを、書家は矢立だの茶碗だの、手當りまかせに壓にかつた。

『好うがすか、然うてす、然うてす、些いと斯ふ云ふ風に。』

・書家は自分のに肩に癖つけて、少し訛のある言葉で、丁寧に姿を直させた。但木は二階を下へ行つたり來たりして、パレツトの上に合せる繪の具を珍らしさうに見詰めて居た。二十分ぐらゐ書いては休んだ。

『何うか又、お夏さん。』

書出す時になると、書家は斯う戲れながら、仰向けた掌をおせつの坐る所へ指した。そこの壁隅には、屏風の代りに襖を二枚結び合せて、烏丸通りの舊るい大經師の店に立つてる、あの西鶴のお夏にかなうやうに光線を調節してあつた。その爲めにと思つて三四枚用意して來た着物の中から、書家は薄お納戶の浴衣を擇んで着せた。

見られる人が却つて見る人となつて、おせつは書家を見て居た。茶を飲んでオレンヂを剝いて居る時

の人と代つて、刷毛を持つて畫板に向ふ畫家の顏、特に曇らした眉の邊に、何んとも云はれぬ險しい表情が浮ぶのに氣が付いた。伸した手に持つた刷毛の柄を尺度にして、凝つとこちらを見詰められると、その鋭い目が自分を責め憎んで居るやうにも見えた。おせつは特にこの頃になつて思はれ出した。あの桐生の人の仕事に向ふ時の目付が新しく思はれた。

夕方、東京へ行つたこゝの主人が、香の高い果實の籠を下げて歸つて來た。

「うゝ、こりや好い、好く出來た。」と背の高い主人が、浴衣の帶を締めながら繪とおせつの顏と較べて見て居た。

波の音が落ちて、周圍がヒッソリと靜かになつた。木羽葺の屋根へ、ハラ／＼と降る松の葉か聞えた。おせつは疲れた身體を搬んで、野の見える方の窓に立つた。そこから、酒匂川に沿ふた足柄の田圃が遠く開けて植付けたばかりの水田がそよぎも見せなかつた。

六

一年のうち、おせつに最も苦しい夏が來た。腕を捲り上げて、白い股引を穿いた繭買人の群が、何所からともなく町へ入つて來た。青梅の繁茂がムッと日を吸ふ梅雨晴の日に、あの旅商人の姿を町に見ると、おせつは妙に、季節に別れる寂味と云ふやうな心持を受取つた。――あの靜かにうら悲しい晩春の夕暮は、今年も最う行つて了つた、と。

斯うしては居られないと、急がしく思ふ時もあつた。然し然う云ふ時ほど、傍ては却つて、靜かに落

付いたおせつを見た。

懐に乳を垂れ下げたお源が、丁度適當な間を見付けて來た。そこは、病を養ふ人達の爲に、海岸の砂地へ建てられた家であつた。屋根の茅葺が氣に入つた。おせつはこゝに出養生することは、但木にさへ知らせなかつた。

『おせつ、お前には私は默つてるんだよ。あの、堀の事だつてもさ。そこさへお前に承知して居て貰へば、それて好いんだよ。』

女主は斯う云つて、存外器用におせつの申出を聞いてくれた。

『えゝ、私もそこは好く知つて居ます。――堀だなんて、市松さんてすよ。』

と、おせつも可笑しくなつて笑つた。

病人どもは部屋を明けて、――また秋の來るまて、それ〳〵目立たぬやうにその家々へと引取る時てあつた。濱も、家々も、これから入込む避暑客の準備に急がしかつた。一間隔いての部屋に、夜中乾いた咳をして居る年の若かい娘が居るだけ、廣い臺所の板の間もシシと冷えて居た。おせつはこゝへ來て初めて、長い日を長く暮せるやうに思つた。

若かいその娘は、夕暮など、さも話しかけられたさうにして、こゝの前を往來した。そして、こちらから出て行くと、俯向いて濱の方へ下りて行つた。

北の方の窓は、低い柵があつて、無花果の廣い葉に蓋はれて居た。そこから、夏の蒼い空が見られた。

舊るい松の間を洩して來る風は午後から冷やかに吹いて通つた。

おせつはそこの窓の下に、靑い蒲筵を敷いた。そして、輕るく凉しい浴衣に着換えて、是眞の水草を描いた團扇を枕元に置いた。撓やかに長がい肘が胸の上に組まれた。おせつは、莖から搖らぐ日蔭の葉を見ながら、疲れた考のつゞきを追ふた。

そこには、桐生の人だの、臺灣の人だの、店を兄に賣つて朝鮮へ働きに行つた人だのが新しく思出された。斯う云ふ人達を通してゞなければ、目に見える自分の過去が殘つて居ないやうであつた。舊るい人ほど懷しかつた。

物の色がカツキリ沈んで、靑紫蘇の匂が裏畠の方から搖つて來る夕暮。あの、蒼桐の枝に覆はれた小座敷の緣側へ出て、十分も十五分も靜かに目を瞑つて居る、背中の丸るい年寄染みた後姿が目に見える。この時ばかりは、傍を少し音立てゝ歩いても、厚い目鏡の上から痙攣した目付て睨み付けた。斯うして、色々の染色を掛け合はせて、縞出しの工夫に凝り耽つて居る時には、欲も無く苦も無く、無神と云ふのはあゝ云ふ姿だらうと思はれた。自分は十六、この人は二千支も違ふ未年の變痴な人であつた。十六、十七、十八――居る三年の間、好いとも惡るいとも、小言一つ云はれた事がなかつた。高崎から藝妓に出る事に話を拵へてそこを出る頃には、本店を仕舞つて最うあの裏町へ逼塞して居た。

その朝は霧が深かつた、停車場の白い柱が一本づゝ、遠く黑く霧の中に隱れて見えた。別に何か云は

れた跡もない。こちらを見て立つて居る顔が、段々と小さくなつた。停車場の黒い屋根も、平原を掩ふ朝の霧の中に沈んだ。

おせつはこの頃になつて、妙に悲しくこの朝を思出した。

『又犬だ、次は子供の自慢。』

おせつは取つて放り付けるやうに斯う云つて、相手の話に蓋した。是非今のうちに云つて了はなければならぬ事が、急に、胸廓を突いて湧き溢れるやうに思つたので。

粗末な塗り盆の上に、厚い氷のコップが載せてあつた。それを間に向合つて、二人とも肘枕して寢轉んで居た。午後の波音は、暑い日の下を緩やかに捲れて來た。

『犬と、子供と、軍隊の話。俺もこれだけかなア。』

但木はゴロリと寢返りして、握拳を額の上へ置いた。その、懶るい寄託の無い姿を見詰めて、涙が滲んで來た。

『犬が何んだ。―― あんな犬が。子供だつて何んだ。』

搔捲つてやりたいやうな嫌惡に胸が窄められた。マッチを探つて居る但木の卷烟草を捩ぎ取つて、それを盤へ投付けた。

『ほう、又か。』

但木は、そこにあるタオルを頸へ卷付けて、笑ひながら立上つた。

『何んだ、――何んだ。』

縁側をドシ〳〵踏鳴らして行く、我殺に剛い但木の後姿を見詰めながら、おせつは悄々しい聲を浴びせ掛けた。

汗が水のやうに流出る、浴後の胸元を快く海岸に冷して歸つて來ると、女は壁の方に向いて、目を赤く腫らして居た。焦げるやうな西日が、日掩の白い帆木綿から洩れて、疊の隅を這つて居た。

『私。東京へ歸るよ。』おせつは唯一言云つた。

但木が立ち上ると、急に肩を搖り動かして外へ出た。そこには、二坪ばかりの砂地を掘起して、青い物など少し植ゑ付けてあつた。女は眩暈を耐えるやうに赤い顏して、强い日の下に立つて居た。

七

低い格子戸を開ける時、おせつはある料理店の小女が、但木の居所を聞きに來て、當惑さうに立つてるのを見た。盆の節季日まで幾らも日は無つた。

『知らないよ、私。』

斯う素ッ氣なく云つて、おせつは家へ入つた。

『おかみさん、今日は。』

と、茶の間の疊へ袖を落して、片手を突いた。

田宮樣の赤い提灯の前に坐つて、一心に題目を上げて居た女主は、目を瞑つたまゝ頭て挨拶した。濱ては聞かなかつた蟬の音が、二三町離れたこゝでは、雨のやうに降つて居た。何所からか萬作の聲が聞こえるやうて居て、油團を敷詰めた長四疊には誰も居なかつた。伊豫簾をつるした緣側を通つて、中二階の方へ上つて見た。

庄太郞は部屋の蒼い反射を受けて、汗ばんで眠つて居た。黑く生育を遂げた城山の青葉は、ザワ〳〵と風に靡いて、白い葉裏を飜した。そして、見えて居た家々の屋根は大方その中に埋められて了つた。

家の横から、若かい笑聲が破れた。萬作と今一人は、嘴の黃色い雀の雛を袂に載せて、地面へ飛ばせて喜んで居た。面白くもないと云ふ顏付しながら、お袖も矢張りそこに蹲んで見て居た。

雀の子は毛を立てゝ、逡巡するやうに後足を張つて居た。目が顫えて居る。そこからこゝへ飛移つて、雄雌の親雀は、頭の上をグル〳〵飛び廻つて居た。

「姉さん、ほら。」

萬作は白い顏の目を無くして笑ひ頽れながら、是に結付けた木綿絲を摘み上げた。揃はない羽毛をバり〳〵と鳴らして、雀の子は唯縱橫に飛んだ。

烈しい怒聲を聞いて振り向くと、女主は目を固めて立つて居た。怒られながら、萬作はその笑の聲を急には停める事が出來なかつた。女主は自分で梯子を傳つて來た。

『おゝ好し〳〵、可哀さうに〳〵。』
斯う雛の頭を撫でながら、一つ一つもとの巣へ搬んで居た。そして、おせつともロクに口を利かないて行つた。
『自分の子が惡るいたつて、直ぐ他へ當り亂らしてる。何んだい。』萬作はその後姿に、唇を突き反らした。
おせつは萬作の話で、市松がこの頃中から箱根へ行つてる事を聞いた、その客は、遠濱の或る網主の息子で、市松よりは十一二も年が少なかつた。おせつも一二度知つて居る、舌も足りないが心も足りない男であつた。お神は何時か、その噂から離れて立つて居た。
『巧いわねえ、あの人は。』
『あの、本當にビックラした樣子なんて、誰にだつて眞似が出來ないわ。』
萬作と今一人の若い女は、頷首き合ひながら話して居た。
歸る時、女主は封を切つた手紙を出して渡した。それは、臺灣からの手紙であつた。前にあれ程潔白に云つて寄來した人が、これて見ると未練多い人になつて居た。靜岡以來の事など細かに書いて、おせつの心を飜さうとしてあつた。
『封かい、あゝ私が切つたよ、惡るかつたかい。』
腮の大きな女主は斯う云つて知らぬ顏して居た。おせつは默つてそこを出た。

夏の日は、赤く雲に沈んだ。そして、涼しい夕暮を行く人の顏が、その反射を受けて赤く彩られた。

八

或る日、漁師町を歩いて居たおせつは、そこの撥釣瓶の傍に、寂しく咲き出た白芙蓉を見た。日がはげしく降注いて居ながら、その上に滲みる光は冷たかつた。眞逆こんな事はあるまい、あるまいと思つて居るうちに、朝晩の涼しさが長くなつた。白いもの丶表面が搖れて光つて來た。

おせつはこの夏のうちに、東京へ歸る萬作と、伊豆の方へ行く今一人の女とを送つた。それが、言合せてもしたやうに、同じ日にこ丶の家を發つことになつた。東京へ歸る方は、搖がされるやうな若い望に胸が溢れて居た。この二人は、お別れだと云つてその晩同じ寢床へ寢た。

翌日、涼しい朝雨の降る濱邊に立つて、おせつは艀の來る間を、この娘氣の未だ拔け切らないやうな女と、初めて口を切つて話した。これまで然う親切にもしなかつた後悔が急に心を嚙んだ。屛風のやうに出たり入つたりして居る十三浦の靜かな海を、下田通ひの蒸汽船が小さくなるまで濱に立つて居た。女主も一二日寂しさうにして居た。おせつやお袖へも、急に優しい事を云つた。

「貴方がおせつさんてすか。」

斯う云つておせつを見詰めながら、或る日、格子の外に立つた若者があつた。それが但木には妻の弟に當る人てあつた。自轉車靴をハタ／＼と土に鳴らして、當惑さうに暫く考へて居た。

「私には、曾つても好いんだがな、これて、兄貴の味方なんてすからな。」

『全く存じませんよ。何んなら、あの酒句の方を聞いて御覽なさいまし、大抵この頃は那所のやうですから。』

『何うか、では、德治だと彼仰つて下さい、直ぐ判ります。』と、然う云つて歸つて行つた。

その他、村の人らしい人達が、時々、但木の居る所を尋ぬ探して來た。能う云ふ人達は、但木の方の話だけ聞いて、一緒に酒を飲んで歸つて行つた。

若し、と氣が付いた時には、おせつは何うしても拔けられぬ深味まで來て居た事に氣が付いた。そして、慌てずには居られなかつた。噂する者を、潔く見返さなければならぬ人にもなつて居た。但木の爲めに失ふものを取返さなければならぬ人にもなつて居た。何方にしても、追ふ方の人になつて居た。おせつは、自分を見る女主や市松の目から急に痛みを覺えた。今また斯うされたと思ふと、急に但木が憎くなつた。

源を働かせて、そこゝから借集めた金もあつた。

『誰が、あれに騙されて。』おせつは時々、然う獨言して自分の心を鞭つた。

中二階から見るお濠傍の松並木に、一夏の間被つた塵埃が、疲れたやうな色に葉の色を見せた。その上の空に漂ふ白雲が、日に〳〵光を失つて行つた。

九

熱海通ひの蒸汽船の汽笛を聞いておせつは目を覺した。

砂地へ落ちる十月の裸な日光は、雨戸の隙間や節孔から洩れて來て、傍に寢て居る肌の荒い男の顔を蒼白く見せた。

『今日は踊るんでせう。』

斯う云つて揺起さうと思ふと、男はもう疾くから目を覺まして居た。

『何うするんですよ、本當に。今日は用があるんでせう。』

おせつは顔を顰めて斯う云つた。但木はその顔を眺めて居た。そして、又天鵞絨の襟へ潜り込まうとする。

『不可ないッたら。』

おせつは癇癪の聲して小搔卷を引奪つた。

日光を欲しがる秋の蠅が、暗い中に翅を唸らせて、おせつの頸筋や顔や額を甜めて行つた。おせつは袂を持つた片手にその蠅を追ひ散らしながら、片手は肩から廻して薄い肩胛骨を揉んで居た。

『何んてえ。』

暫くして、男が斯う冗談らしく云つた時に、歇私的利らしくしがめたおせつの顔が、唇から最う少し笑ひ掛けて居た。

『馬鹿。』

『馬鹿。』

兩方で笑ひながら斯う云ひ返した。男はドシリと寢返して寢た。剛い髮の毛が伸び過るほど伸びて、頸筋の邊は掻廻したやうに捩れて居た。

おせつは氣にしては、些い〳〵離屋の方を聞いた。これは森として、市松の聲も聞えなかつた。鷄が來て、日の當る雨戸に嘴を當てた。

『叩いて。』

『俺が叩くのか。』

『當り前さ、昨日ッから叉疲れて居て爲やう來ないんだよ。』

おせつは細い肱を男の背中に擦り付けた。男はそれでも素直に向直つて、皮の厚い掌で揉んで居た。

その時、濱の方から上つて來る强い足音が廊下に響けた。後から續いて來る素足らしい女の足音も聞えた。

『最う十二時だよ、君。』

西洋錠を下した戸の外に立止つて然う云つた。二人とも默つて返事しなかつた。それでも、但木は間もなく起きて行つた。おせつは執拗に暗らい中に坐つて居た。

昨夜も曉方から思出して、但木はランプを疊に置いて何か書いて居た。東京の生活、華やかな東京の生活、それが但木に唯一つしかない心の窓であつた。これを閉めると、窒息するやうに自分も云つて居る窓であつた。蚊のやうに脛の長い蟲が、ガラスの油壺に吸はれて幾つも死んで居た。

離屋へ來て居る但木の友人とは、何時か繪にかゝれに行つた、そこの人であつた。おせつはこの人の、氣を負つたやうな、特に但木への誇慢な態度を好まなかつた。

この頃は、日が少しでも西の方へ辷ると、砂地に蒼味が吹返つて、海の色も冷たく冷却して來た。下庭から穢なく腐れた檀得草の花が、未だ思切り惡るく秋の日和に咲かせて居た。

そこへ、伊豆から來た顏の赤い小女が來た。

『姉さん、先刻チビさんがお藥と牛乳を持つて來ましたよ。牛乳は沸かしませうか。』

『え、難有う、いま程。』

おせつは櫛の歯に涼しさを通しながら、濱の堤へ張出した茅簀圍ひの涼臺の方へ下りて行つた。夏のまゝに色褪めた淺黄暖簾が、海から吹いて來る風にハタ〳〵と鳴つて居た。

その晩、但木の友達は歸つた。翌日も半日、何んと云ふ事なく日が經つた。今日は爲別けて置きたいと思つた煩さい話も、相互に話出す時と云つては無かつた。但木はその今書掛けて居るもの丶事ばかり云つて居た。それが世間へ出た時の事など種々に想像しておせつに話して聞かせた。

夕方になつて但木はやつと立つた。但木はこの町から家へ歸る時に、必ず或る店に立寄つて買物するのが決りのやうになつて居た。その邊まで送つて行つたおせつは外へ出ると、急に他に顏を見られるやうな氣がした。袖を掻合せて町の軒下をくゞるやうにして歩いた。

その店は、こゝらの別莊を見込みに、舶來の食料品などを重に賣る見世であつた。廂暖簾の深かいこの町通りに、この店だけ一軒目を開いたやうに、白いアセチリン瓦斯の光を漲して居た。形の變つた壜どもや變つたレッテルや、然う云ふ中に棚を探し廻して居る但木は、恰もこの新しい彩色から一種の刺戟を嗅出さうとする人のやうにあつた。おせつは作辛ッぽいやうな夕暮の軒下に立つて、溝板にコトコト〳〵と後齒の齒を刻み鳴らして居た。

何時か、長い町を出外れて居た。四方を遠く連山に取圍まれてる足柄の田圃はそれでも幾らか空が明るかつた。水氣を吹上げた青草が、路傍に萎れて居た。

『一本松つて何れ？』

『あれさ、あすこに黑い。』

斯う云つて但木は暗い山の方をステッキで指示した。その松から行くと、但木の村になつた。然し幾重にも低い山が折重つて居て、どれがその松やらおせつには判らなかつた。蒼い烟が何所からともなく一面に田圃を掩ふて來た。そして、平野の所々にコンモリ立つて居る部落〳〵が、離島のやうにその中に黑く浮んで居た。

おせつは何時かあの畫家に見せられた『殘暉』とか云ふ油繪を思出した。あの山頂に薄り夕日を殘して、靜かに暮れて行く山裾の村を塗り籠めた深かい悲しい繪の具の色を思出して居た。但木の下げた新聞包が白く小さくなつた。

『おせつ、斯う云つて來たよ。お前、何うにかしてくれなきやア困るね。』

女主は斯う云つて、臺灣からの手紙をおせつの枕元に持つて來た。それは未練ある男が女に宛てゝ書く、恐ろしい言葉を書並べた手紙であつた。返事次第では今にも來るやうな事を書いてあつた。おせつは直ぐ充血する男の目を思出さずには居られなかつた。

『何うする氣なんだよ。私はもうお前には何も云ふまいと思ふんだけれど、斯う云ふ手紙を貰つては默つて居られない。』

女主は、昂つて來る怒を強いて抑えて、平靜な樣子を装ふて居た。

『爲方ありませんね、私だつて。』

おせつがやつと口を斯う開いたのは、それから暫く間があつた。それまでの間に、女主は云ふまい〳〵と然う思ひながらも、口を噤んで平然として居るおせつの顏が憎くて、ツイいろ〳〵の事を云つて了つて居た。

『爲方がありません? おせつ。』

女主は年寄の一徹に最う顫えて居た。おせつは何んと云はれても默つて外の方を見て居た。

おせつの心には今臺灣も何も無かつた。斯うなつた身體を但木に償はせる、唯それだけで一杯になつて居た。

故夫が行く度に、それでも但木は出て來た。出て來ても何うして好いのか判らなかつた。女が何を自分に求めるかをさへ理解しかねた。唯泣いて居る女を見てるより外はなかつた。

『では金か。』

但木でも終には斯う云つて顏色を變へた。

十一月の明るい日がつゞいた。おせつは一日の大方をお源の家で暮らした。お源は氣難かしい良人の前を言繕ひつゝ、隨分いそがしいおせつの小用を達して少し宛の錢を貰つた。おせつは着物を着換えるのにも、こゝへ來て脫いで取換えて來るほどに苦しくなつて居た。但木は矢張りこゝへも來た。無口なお源の亭主は、但木の入浸るのを苦々しがつて、來る度にお源へ當り散らして居た。

『お松、さアお出で。こゝ迄、こゝ迄。』

白い手拭を被つたおせつは、向の壁の所にベタリと膝を長く坐つて掌を叩いて居る。やつと、摑え立ちの出來る女の兒は、固めた肘をグラ付かせながら一歩づゝ步いて行つた。

『今度はこゝだよ、此所〳〵。』

但木も斯う云つて、別な方から手を叩いた。小兒は、然し、その方へ行きかけて立停つた。濃い但木の髯を見て泣出した。

『それ御覽なさい、誰がよ〳〵。』

おせつは但木を睨めて、穢なく汚れた小兒の顏を懷へかくした。

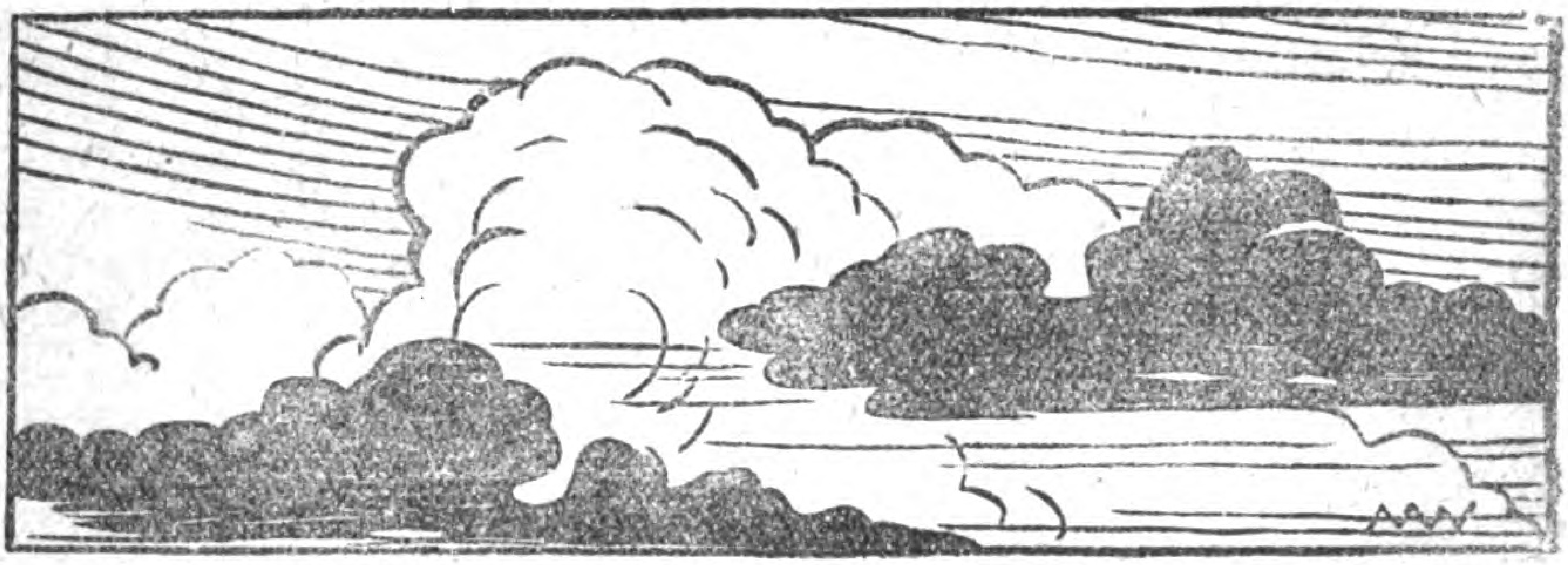
冬の弱い日が、赤い疊の上に長々と射して來た。衰へた蠅の群がその光の中に飛び廻はつた。

『あゝこんな日になつたかなア。』

但木は腕を伸して淚の溜つた目で外の方を見た。そこには赤く燃え立つた葉鷄頭の葉が狹い庭を明るく見せて居た。

但木の目に、最早誕生の雄一の顏がボンヤリ浮んで居た。

（完）



出京

徳田秋聲

夜明方に一度目があいて、それから又うと〳〵と眠に沈んだお市は、騒々しく耳元へ響いて來る電車の音に駭かされて、漸く苦しい夢から覺めた。

寢てゐるのは伯母の親戚で、日本橋の通から少し横へ入つた仕舞ふた屋の奥二階の一室であつた。その窓から見ると、周圍は物干、白壁の藏、藏造の家、煉瓦の建物、そんなものがぎッしり立込んだところで、その隙間々々から人の聲などが洩れて聞える。長い間山や廣い田畑ばかりて見て居たお市は、伯母と一緒に此處へ着いた時、言ふに言れぬ息苦しさを感じた。

「こゝはお前東京でも目貫の場所だぞえ」と、伯母に言はれても、お市は一

種の反感を持たぬ譯に行かなかつた。と云ふのは幼いとき一家が離散した時、兩親や姉達に別れて、十年の餘も田舍の伯母の家で暮して來たからで。姉達はもう東京で夫々世帶を持つてゐた。

「一度お市を東京へ寄越しなすつて……」と、伯母が東京へ出て來る度に、言傳をしてくれた人形町の姉にはもう子供が三人もあつた。その姉の顏も見たいし、子供達はどんな風だか其も始終氣になつた。事によつたら、自分も東京で暮して見たいと云ふやうなことをも考へた。

お市は着いた翌日の午後に、伯母と、一緒に連れて來た七つになる伯母の孫娘と連立つて、初めて人形町の家を尋ねた。そこも立込んだ町なかの二階屋で、親子五人に子守を一人使つて小綺麗に住んでゐた。近頃小金の出來かゝつた姉婿は、ビルブローカアのやうな事をやつて、氣樂に暮してゐた。

「はい久く……皆さんお達者ですかえ。」

無頓着な伯母は、ツカ〳〵上込んで行くと長火鉢の側に坐込んだ。お市も女の子を先に立てゝ入つて行つたが、髮など綺麗にあげてゐる姉にじろ〳〵見られるのが、厭なやうであつた。

「何て大きいんでせうね。」と、姉は乳吞兒を膝に載せてゐながら、可笑しさうに言つた。

お市は子供の蔭に隱れるやうにして、ぽかんとしてゐた。そして時々目眩しいやうな目をして姉の樣子を眺めた。姉は滑らかな言で伯母と話を交へながら、拭込んだ茶簞笥からこて〳〵と茶道具や菓子などを取出した。

「春ちやん何にもなかつたね。待つてゝ頂戴、今お淸に何か買はしにやりますから。」

「ようござんすね。春ちやんは今朝から食べどほしだて……。」お市は春子の顏を見ながら言つた。

「よく共でも來ましたね。」姉は子供の方へ愛相笑をした。

「家にゐても、一寸の間もお市の手を離れないくらゐだて、如何しても東京へ一緒に行くと言つて肯かんだわの。」伯母が側から口を利いた。

お市はしみ〴〵姉と話すことも出來なかつた。

「今日はまだ是から芝の方へ廻らないぢや。如何せまたゆッくり來るて……。」と、伯母は自分の話すことを話して了ふと、直に歸り支度をした。

「市の婚禮が來月の五日と決つてゐるて、それ前に東京で些とは拵へて行きたいものもあるし、此方へも御無心申したいと思つて……緣づいて了へば、市もなか〳〵東京へなぞ出て來られもしまいし……先は忙しい家だてね。田地や何かも大したことはないが、皆な堅い人達だて……それに門閥もそんなに惡くはないと云ふしするて。」

伯母は掻摘んで、お市の今度の緣組の事をぽつ〳〵話した。

「ほんとうに、何かとお世話さまでございます。伯母さんのとこもお物入のところを……。」

「何に金もかけねえがね。それでも忰の顏もあるもんだて、長持なども町へ注文して指さしたし、夜具も好いものぢやないけれど、太織で一組拵へたり何かしたて……。」と、伯母は細々と荷物の事などを話して聞せた。

「ほんとうにお大抵ぢやございませんね」と、姉は伯母をそらさないだけの返事をしてゐる。

春子がお市の傍を離れて、姉の子供に眠む頃に、氣の忙しい伯母はもう歸り支度をした。姉は鮨など取らせて、お市にも小皿に配けてくれた。そして良人が此頃色々の儲仕事に手を擴げてゐる事などを、嬉しさうに話した。

「ほんとうに忙しいんですよ。家にゐるなんてことは滅多にございませんよ。」

歸るとき、姉は子供を負つて、柳の繁つた電車通まで見送つた。

「またおいでなさいよ。」姉は可懷げに妹の側へ寄りながら、初めて親しげな口を利いた。

「今度來る時には、一人の方が可いのよ」と呟きながら電車の乗換などを敎へてくれた。

お市は東京風の姉と一緒に歩くさへ極が惡く、田舎足袋を穿いた自分の大きい足が、目につくやうであつた。

「私も姉さまに、少しお話申したいこともありますてね」と、お市は停留場に待つてゐるあひだに、漸と遣瀬ないやうな自分の心持を洩さうとしたが、姉の心は能くも解らなかつた。

他人のなかにゐるお市は、結婚前後の自分の苦しい事情を、誰に話すやうもなくて日を過した。田舎ては長い間、幼い姪や甥の世話をして年を送つた。體が丈夫なので針仕事や洗濯なども、大概一人でやつて來た。伯母の家は町での古い醫者なので、野良へ出るやうな事はなかつたが、何時物とするやうな

日もなくて、二十二になつてしまつた。赤味をもつた肉が自分にも厭なほど堅肥りに肥つて、大概の男は見下すくらゐ脊が高かつた。

藥局に來てゐた遠緣の青年に唆かされて、納屋の蔭などで立話をするやうな事が一二度家人の目に觸れて、それから今度の緣談が取急がれることになつた。それ迄に其青年は親元へ還された。青年は出て行く時も、愧づるやうな氣色も見えなかつた。

「僕はどうせ東京へ出るて」と言つてゐたが、お市に互の前途を語らうてもなかつた。

片着く先の男を、お市も二度ばかり見たことがある。滊車で一時間ばかりで行ける處で、家は養蠶と百姓をしてゐた。氣むづかしい姑などがあつて、嫁を取るのは今度で二度目である。お市と藥局との關係は村でも極親しい二三の人のほか知らなかつたから、そんな事は一切先方へ秘してあつた。

お市は東京へ出たら何かなし此結婚を遁れる工夫がつきさうな氣もしてゐた。男がもう東京へ出てゐるやうにも思へて、捜したら知れさうな心持もしてゐた。

十年程前に、良人に死別れて、今は會社へ勤めてゐる娘の養子にかゝつてゐる此處の隱居に、お市は伯母と一緒に、昨夜も誘はれて近所の寄席へ行つたが、何を聞いても笑ひたいやうな心持になれなかつた。隱居は始終寄席や芝居へ行くらしかつた。此春は越前の本山へお詣をして、歸りに京都を見物して來たとか、秋は善光寺へ詣るとか、そんな寺へ寄附する金高を聞いたゞけても、お市は消費のやうな氣がした。寄席へ行くにも着物を取替へ引替へして、指環を二つも嵌めてゐた。お市はこの隱居が、如何云ふ風の

身續きだかすら解らなかつたが、伯母との話のなかには、をり／＼田舍の親類の人達の噂が出てゐた。

時々大勢の笑ふ聲が、空洞のやうなお市の耳へ響いた。何が面白いのか解らないやうなことが多かつた。お市は自分の顔を見上げる春子の手を握りながら、淋しい笑顔を見せた。

外へ出ると、人通の少くなつた町を涼しい風が流れてゐた。お市はほつとしたやうな心持になつて、子供の手を引きながら歩いてゐた。

それから伯母達は、暫らく茶の間で若夫婦と一緒に茶を入れて菓子を食べたり、東京見物の順序を話し合つたりしてゐたが、二階へ引取つてからも伯母は按摩を取つて、ぶよ／＼した體を揉せてゐた。前二階の方へ寢る隱居は、段梯子を上つたり下りたりしてゐたが、按摩の歸る時分に漸と床に就いたらしかつた。

世間が靜つてからも、お市は暫く寢つかれなかつた。此頃體の調子の變つてゐることなどが、また氣になり出して、色々の事を考究めると、深い恐怖に襲はれずにゐられなかつた。

「明日は思斷つて姉さまに會つて相談して見やう」と、お市は熱病のやうな頭腦に考へた。そして寢苦しい夜の明けるのが、待遠しいやうであつた。

世間が大分騒々しくなつて來た。前二階に寢た隱居も、もう起きて了つたらしかつたが、疲れてぐッすり寢込んだ伯母は、まだすや／＼眠に沈んでゐた。

春子の目が開いた時分に、お市も起出して、寢餘熱のさめないやうな腫れぼッたい目をして、一緒に

階下へ降りて行つた。隱居と娘とは、明るい茶の室で反物を擴げてゐた。
「お市さんは、如何なものが似合ひますね」と、隱居は朝のお辭儀をするお市に聲をかけた。
お市は顏の筋肉が重苦しいやうで、早速應答も出來なかつた。
きちやんと取片着いた臺所の方へ出て、お市は春子に顏を洗つてやつたり、自分にも淨水を使つて、それから髮を直しなどした。
その日品川の方へ寺詣りに行く伯母と別れて、春子をつれて人形町の姉を訪ねた。
姉婿も丁度家にゐて、二階て客と用談をしてゐたが、姉は緣側の方へ鏡臺を持出して髮を結つてゐた。
「おや、お出てなさい。能く迷兒にならなかつたとね」と、姉は燥いだやうな調子て迎へた。
「貴方も一つ結つてもらふと可いわ。隨分癖の多い毛ね。」
髮結もぎろりとした目をして、お市の顏や頭髮を眺めた。
「私は結つてもらつたとがないて……」と、お市は束髮の髷を撫でながら笑つた。
姉は水々した自分の頭髮に見惚れたやうな目をして、合せ鏡などしてゐたが、旋て髮搔て兩方の鬢を出すと、帶の間から銀貨入を取出して、髮結に結賃を拂つた。
「それぢや今日は何處かへ行きませうかね。」
姉は鏡臺を片寄せながら、長火鉢の傍へ寄つて來た。
「どこへ行くてすね」と、お市も唆られたやうに多少氣が浮き〳〵して來た。

姉婿が二度ばかり、あたふたと階下へ降りて來た。そして手箪笥のなかゝら書類を出したり引込めたりしてゐた。姉も側へ行つて一緒に何か捜しなどしてゐた。お市は些とお辭儀をしたゞけて、顏も能く見なかつたが、金縁眼鏡などをかけて、形の細そりした足に白足袋を穿いてゐるのが目についた。

「……餘り肖てもゐないやうだね。」姉婿はお市の顏を二度ばかり眺めて、ニヤ〳〵笑つて、直に二階へ上つて行つた。

「私も如何いふ女になつたかと思つて、お前の來るのを待つてゐたんだよ。」姉は薄笑をしながら、しげ〳〵と妹の顏を見た。

「稚い時は、ぬつと如何かなりさうな子だつたがね。」

お市はぼんやりしたやうな顏を背向けて、疊に手を突いたまゝ默つてゐた。

「私はどうせ田舍で野良仕事をするやうに出來てゐるて、それで可いわね。」お市は大分たつてから姉の顏を見返した。

「お婿さんは如何いふ人なの。」

「やつぱりお百姓でござんすてね……私等には丁度好いわね。」

お市は厚いやうな唇を尖らかして、うつとりしたやうな目て、釣葱などのかゝつた縁の方を見てゐた。

春子は時々、お市の側へ寄つて來ては、また此處の子供に手招きされて次の部屋の方へ出て行つた。その語が可笑いといつて、姉の笑ふのが、お市には餘り心持よくなかつた。

「家はお醫者だて、これでも傍の子から見れば、お行儀の好い方だね。」

「さうとも。それに着物だつて、なか〳〵氣が利いてるわ。」姉は繻袢の袖などを引張つて見た。

「それでお前さんお婿さんは、幾歳なの。」

「年はさう少くないさうでね。」お市は餘り訊かれるのが厭であつた。

「でも家がしつかりしてゐれば、それで可いですよ。」姉は更つたやうな口を利いた。

お市は默つてゐた。

「だけど、迚も田舍の從兄さんや、此方の兄さんのやうな、ちやんとした人ぢやございませんてね。……でも、姉さん達とちがつて、私も然う勝手は言へないで……。」

もう晝に近かつた。姉は柱時計を見あげると、吃驚したやうな顔をして、火鉢に炭を注ぎはじめた。そして臺所の方に出て、肴の切味などを持つて來た。お市も取散らされた其處らを片着けなどしてゐたが、やがて仲よく遊んでゐる子供の傍へ寄つて行つた。

「お前さんも體が好いから、行くと直ぐ子が出來ますよ。」

お市は簞笥の上におかれた鏡に、私と顔を映しなどしてゐると、腰障子を隔てた長火鉢の處から、姉が聲かけた。

お市は頭がくら〳〵としたやうで、返辭をするとも出來なかつた。

「姉さんには、さう見えますかね。」お市は押出すやうな聲で言つて、障子の蔭から顔を出した。そして

柱に凭かゝりながら、ぼんやり姉の顔を眺めてゐた。然うしてから想出したやうに、臺所の隅の方にあつた飯臺を持出したり、茶碗や醤油注のやうなものを運びなどした。

「私のやうなものは、迚も東京へは向きましねえかね。」

お市はべつたり其處に坐りながら、更つたやうな調子で訊いた。

「どうしてさ。」姉は肴を炙りながら、俛いたまゝ言つた。

「東京で暮したいと思ふの。」

「東京で奉公でもしてゐたら、氣樂でよからうと思ふに。」

「さうも行かないがね。」

姉は火ぼとりのした顔をあげて、口元に佗しげな笑を湛えた。

「それぢや、お婿さんが氣に入らないとでも云ふやうなことなの。」

此女にもそんなやうな心持のあるのが、姉には不思議なことのやうに思へて來た。

「今更、そんなことを言出して、伯母さん達に濟まないぢやないか。」

姉は炙つた肴を、味淋と混ぜ合した醤油の皿に浸けながら、またそれを鐵炙のうへでじい〳〵炙つた。

子供をづらりと周へ並ばせると、旋て賑やかな晝飯がはじまつた。お市はタオルを胸へかけてやつたり、肴の小骨を拔いてやつたりした。姉も夫から夫へと口頭で子供の世話を燒いた。お市のとは其限り深入りもしなかつた。

出る支度の出來たのは二時少し前であつた。
姉は湯を取つて頸や手を洗つて來ると、自分にも白粉を塗つたり、お市や女の子供にも少しづゝ塗つてやつた。
「東京の人はお化粧が上手だてね。」お市は姉の爲るさまをじッと見てゐながら呟いた。
「田舍ぢや、そんな事をすれァ笑はれるてね。」
「それでも、お客にでも行くときは、めかすでせうにね。」
姉は簞笥から子供のものや自分のものを、取出した。
「私姉さまの着物を見せておもらひ申したいわね。」お市はそこへ取出したものを、引張りはじめた。
「お前も着物が出來たでせうに。」
姉は襦袢だけになつて、そこに跪坐んで單衣ものゝ衿を折りはじめた。
「東京へ着て來るやうな、氣の利いたものは一つもありませんわね。姉さんの着古しを二三枚お貰ひ申して行かうかと思つて……。」
姉は笑ひながら、着物の裾を揃へてゐた。
そして、「あげても可いよ。お安く讓つてあげるわ」と、晴々しいやうな顏をあげて、坐つて居る妹の顏を眺めた。
お市も默つて、その顏を眺めた。

着物を着てしまふと、姉は鏡臺の抽斗から指環や根掛のやうなものを出して見せた。

「これはお前の指に如何だらうね。」

姉は隅の方に轉つてゐた石入の一つを取りあげて、肥つた妹の指に篏めた。指環は肉に軋んで、漸とのとて節の上の方まで嵌つた。

少時すると、姉はまたそれを拔いて、奥へ仕舞込むと默つて抽斗を締めた。

「お前のお祝には、宅で何かあげるには上げますけれどね。」

一同は旋て外へ出た。

お市は電車に乘つてゐても、時々暗いやうな顏を背向けて、窓の外を眺めてゐた。

お市はうか〳〵と、二日ばかりを姉の家で過した。

姉と一緒に、近所の活動寫眞へも行つたし、水天宮の緣日にも出逢つた。

其處いらで子供の食べものや些とした日用品なども買ひに行けるくらゐに、界隈の樣子に馴んで來た。

お市は春子や姉の子をつれて、晩方ぶら〳〵と賑やかな道を歩いてゐた。

人通の劇しいなかで、柳の蔭に乳母車を番しながら憩ふてゐる老人などがあつた。うつら〳〵としてゐる子供の顏には、葉影が淺黃色にさしてゐた。お市も三つになる背の子をそこへおろして、下駄を穿かせて、よち〳〵歩かせてゐた。

町の片側には、もう夕暮近い風が戰いて、撒水車が通つて行つた後の地面が、しつとりしてゐた。お市の心はをり〳〵子供の上を離れてゐた。このまゝ此處いらの人のなかに交つて日を送つてゐたいやうな氣もした。

ふと姉から贈物の丸帶のとが考出された。帶は姉と一緒に、遠くまで行つて買つて來た品であつた。縫へて來るのに間もなかつた。お市はその帶を締めて、人々と一緒に汽車に乘つて、嫁に行く日の自分の姿などをぼんやり考へてゐた。

やがて子供を負つて、春子に袂の端に摑かまらせながら、ぶら〳〵と歩きだした。そして時々化粧品舖の店頭などに立停つて、硝子のなかに光つてゐる頭髮のものや指環に見惚れてゐた。

色の褪せた黑い暖簾のかゝた口入屋の前へ來ると、お市は私と薄暗いやうな中を覗いて見た。薄汚い店頭の上框のところに、革帶をしめた若い男が、埃ッぽい顏に手を當てゝ、踏反りかへつて樂々と眠つてゐた。お市は話に聞いてる可恐しい口入屋と云ふのは、こんな處かと思つて通過ぎた。

「私ても此處の暖簾を潜りさへすれば……」と、お市はふと其樣な事を考へた。

緩んだやうな心持てお市は家へ歸つて行つた。町にはもう灯がちら〳〵してゐた。

家へ歸ると伯母が來てゐた。

「お前も嫁入前の體て、ちと暢氣てないかえ。」

伯母はお市の顔を見ると、言出した。

自分の手て出來る家の方の仕立物を急ぐので、急に伯母に先立つて立たされるとになつたお市は、その翌日姉に送られて春子と一緒に、上野から朝の汽車て立つた。

和歌

尾上柴舟選

○

佐野光雄

君おもひありしがいつか忘れはて酔ひざめぎはにまたも思ひ出づ

さびしさをたゞにやるべく來しなれど酔ふ頃こゝろ他に移りゆく

こゝよりは電車の音も聞えざる初夏のみどりの木のかげに凭る

丘一つあがりつめてぞふとあるを知りたる海に物忘れする

初夏のひかりのもとに知りそめて重さかなしきこの古衣

窓の灯のとゞける闇に若葉ありわづかにかぜの姿をば見す

○

逸見雨山

騒音の執念き名殘かなしみに別れし胸をなほも流るゝ

晝も夜もたえず灯ともす地下室の隅にみづから住める心や

坐りしまゝ今日とく暮れよ向ひ居の人の顔さへ疎ましき日よ

かにかくに都會は悲し疲れたる頭にひゞく鐵を打つ音

杜鵑今年も聞かず風たえずにごる港になほもさすらふ

忘れこし青き封書を思ひいて迷ひ下りし手のやりどころ

○

安井竹美

人前をはゞかりながらしのびかに人を思へる五月のこゝろ

人夫らのひるのやすみの脊中より遠くつらなる茅花の穂並

晩春の日に濁りつゝ咲きいてし線路の中のうす黄なる花

夏ふけて水のごとくに靜かなる林のなかに溺るゝ心

迷ひ入りゆくへしられずなるもよしみなつきの

山の靜かなるひる
道に逢へば面あからめてうつむきしたゞそれだけの人の戀ひしき
夏の花いたるところに咲きいてゝネルのきものに肌ざはりよさ
蔓草のあほき芽ひもなつかしや人を思ひてふめる夕ぐれ
初夏のひるのこゝろのむづがゆさ白猫の毛のふるゝ指先

○　若林牧春

朝ばれの綠の色のあざやかさ丘にのぼれば海光る見ゆ
赤き帶水色の傘町をゆく夏の朝の窓のあかるさ
事もなく春に別れしもの足らぬ心かなしく初夏に入る
玉乘りの女が着たる肉色のシャツこゝろよき春のともし火
今日もまたかなしき歌を三つばかり書きたるゆゑに心なぐさむ
油浮く水の面に落日の光かなしく殘るゆふぐれ
われとわが口笛の音のかなしさにかたくも口をつぐむゆふぐれ

○　細井魚袋

新らしき名札かけたる門ぎはに蕾そめたる白き木蓮
涙ぐみし妻がまぶたをよそに見て茶をすゝるこそかなしかりけれ
「生活」が夫婦のあひを泳ぎをる春の夕べのものゝあはれさ
つゝましく物縫ふ妻が小さなる指のさきより春はくれゆく
赤く咲く花をしづかに見てありぬ指の小疵の痛む夕ぐれ
砂白き總の海べに泣きぬれて鷗の群れの中にまじる日

○　井田葉歌

暮れ殘る五月の空に一本の櫟大木の黑むかなしさ
黑みゆくかはたれ時ぞあはれなる都はづれの杜に風吹く

はしやぎし友に交りて我一人物を思へば河岸に灯の點く

眠られぬたゆき眼に煩の如き白いちはつはなつかしきかな

やるせなきわが投げやりの心根に悲哀よする昔の爪跡

かつて見し乞食老媼の姿にも似たるか我の憊れしむくろ

○　山田豊

うからやからはなれ／＼に鍬あぐる水無月の野に初雷をきく

あけくれのもの丶はかなさ何時しかに一つ二つのはやり歌知る

毎夜々々同じやうなる心もていくとせ凭りし此のふる机

わかくして年寄りじみし此の心琵琶歌一つ知らぬあはれさ

もぐらもちひとり安けく地下（つち）に住むわれひとながら汝をうらやむ

○　塚田眞

父の命老い來て死には近付けりひそかに旅を思ひゐる子に

旅にいて知らざる國に死なしめよさあればいかに幸おほからむ

みづからを棄て丶ありしが淋しさに耐へられずしてまたいだきぬる

雨ふりて絶えまもあらず浪よする五月の濱に死にを怖れぬ

夕暮の窓よりきたる日光にいよ丶命の淋しさおぼゆ

○　捫垣青花

友の振るハンマーなどを思ひみるまづしきこ丶ろ夕ぐれとなる

かなしさをあまた殘して春ゆくをうらみつかれて夕べ樹による

野の月はうるめり夜氣にうすしめる草ふむ君のかろき沓おと

とりとめもなきもの思ひ初夏の日のくれがたの雨のさびしさ

三味の音も身にしまずなりぬこのごろの寂しさ棕櫚の花咲きそめぬ

野にいてつふところてして行く春をかなしむこ

ゝろこの戀ごゝろ

○　松井綠水

くれ前を草にふすかな寂しくも春の微溫の身に沁るころ

石炭のけむりかなしき暗綠の路傍の草を春のかぜ吹く

春の暮綠少しく黒づめる路傍の草のなごむかなしさ

赤かき光り靜にしみ入る草に坐し春の日ぐれの薬莨をかぐ

春の晝上沓のまゝ蒲公英の光る草生をふむが悲しき

○　奥川夢郎

さわ／＼と若葉のゆらぐ雨の日は男の笑ふ聲もなつかし

雲うごく夕べ汽笛の音を聞けば港の空と船の忍ばゆ

ちさき家たてゝはこぼちこぼちては建つるが如きもの思ひする

醉ひ人の盃投げてから／＼と高く笑ふもにくからぬかな

○　櫻城としみ

白き花ところ／＼に匂ひたる砂畑に來てこほろぎをきく

たよりなき心いたはり長椅子によれば鳴るなりニコライの鐘

校庭にひろごりてゆく黄昏の色に交れるオルガンの歌

半島の海邊にまろびうす黄なる濱ひる顔をむしりてはなぐ

○　島愁鵑

緣にいてゝはるけき山の夕雨に見入るゝほとの母の衰へ

乳母が家屏風のかげの暗き室の寢覺寂しやほとゝぎす鳴く

逢ひにくる河原の夕べそら豆の花に明るう雨亂れ降る

マーブルのはしらに倚れば胸にしむ夕雨あとの初夏のきり

○　林白愁歌

あめつちの青うなり行く初夏の朝森に入り一人泣きぬる（森にて）

しめりたる机の上に散らばれる髪の香こそはうら悲しけれ

木々渡る風靜かなり病後の身枕に倚せつゝ裏庭に立つ

○　丸田進

茅葺の古りし鐘樓の傍に枝垂櫻の咲ける靜けさ

潮の香うすら匂へる賑き町を去りにき君と別れて

花ぐもり霞める山に石を割るダイナマイトのひびき漂ふ

○　本間鐵伯

弦月の僅かに見ゆる戸のすきの前を暫らく去りも得ざりき

夕映の空に黝み慄えたる若葉のうきて見ゆるかなしさ

朝霧に濕める青葉の奥ぶかさ祈禱を捨てゝまよひ行かまし

○　野田守雄

しづやかに野末にいでゝ月みつゝうすあかりせる林に入りぬ

水禽のくゝみ聲して啼くもよし沼の月夜は青々かすみて

港には汽笛[illegible]きれり初夏の街にバナヽの香ふたそがれ

○　伊福凌霄花

よろこびに疲れて君を見入る瞳のやゝに悲しううるほひて來ぬ

わがペンの悲しみつゝも文字を生む白きはがきに瓦斯の顫へり

事務室に君とむかひて物言はずつくゑに倚れる午後は悲しも

○　松島落果

草山の少しく青むころになりぬやすらかに子は肥立ちゆくらむ

うすく月うかべる街のアカシヤのほのかに青き影ふみてゆく

たそがれとなれば若芽のまばらなる栗の枝擦れうらなづかしさ

○　堀井玄葉

胸苦しく街の窓より棕櫚ごしにしばたく星に物思ひする

口笛に郷の唄など吹きて見る此淋しみをまぎらさんとて

○　太田忠太郎

濠ばたにうこんざくらの花が散る夜ごろとなればかなしかりけり

磯山の木立のかげに海を見むとばかり家をいでゝきつれど

○　荒木英一

瓦斯の灯の白く流るゝ初夏の女の部屋に蓄音機なる

新聞に若葉のかげのちらちらと這へる朝の寢ざめうれしき

○　佐久良友哉

こゝろよく腕をなげて初夏のクロバの野邊に君をおもへり

こぼれても初夏の日がのこりたる夕の窓に匂ふサフラン

○　阿部葹郊

窓近き樹々の若葉の漸くにこはゞりそめて悲し、六月

しみ／＼とわが健康がうれしかり初夏の氣を胸深く吸ふ

○　池内啄耳

二三年着古したりし棒縞の後につゞける赤きパラソル

放課後の運動場の草むらに寢ころびてまたチエエホフをよむ

○　森一雄

感想のさびしき群を逐はんとてわれの幾度ひけるヴイオリン

○　中江川光潮

悶えなく悲みもなくながれゆく安定の日のなづかしきかな

日はあれど闇に呼吸するこゝろして落葉の上をかさこそとゆく

○　村上義信

すこやかにありし日思ひ五十日呪はれしまゝ茫として生く

○　横道月島

路の邊に踏みにじられし花菫など見て孤り微笑みて行く

凛らひの極みを知りて凛らひの初めに戻る凛ら

ひ悲し

○　志水二郎

青き草ほのかに搖るゝ朝風に風のぬくみがふと胸にさつ

照りつくる雨晴れの野に淡色の帽子をもちてとほき海みる

○　伊瀬十寸穂

ひとり寝て都の君を思ふときわりなく出づる涙なりしを

○　齋藤甫

君を待つ初夏の庭園かる〳〵と歩めば桐の葉擦れする音

○　津田月穗

しぼられし海綿のごと我心君がことばをあきたらず吸ふ

應募和歌は東京市小石川區原町百十五番地尾上柴舟氏宛封筒の表面には「中央公論歌稿」の六字を朱書すべし

俳句

鮓

高田蝶衣選

師が鮓の石頑迷の響あり　摘星辰
鮓壓すや君獨創の調に居て　同
山蟻に這はれて鮓の石大なり　同
一宿を斷れど鮒鮓の饗　同
蘭の香の搖曳を月に鮓切らん　同
夥しき集稿に先づ鮓壓さん　同
鮓喰つて桶は赤壁に流しけり　同
(贊)如意一揮溪雲に鮓の石を飛はす　同
書燈籠をもれて鮓石の露淋漓　冬城
湖舟に早鮓や崖の百合をめづ　同
鮓壓すや世に遠き藝襲名す　同
夜毎一體の早彫りや鮓の馴るゝひま　同
井の底に潮鳴るきゝて鮓を壓す　同

鮓頃の夕陽に島の君思ふ　同
鮓の客に問はん一書筐底に秘す　同
篁音絶ゆと心澄みしが鮓馴るゝ　芹雨
鮓馴るゝ間と又棹す興も江の凪に　同
風愛てゝ來馴染めど鮓の味未だし　同
鮓の口切れば瓶花に蜂も來て　同
皿の朱泥鮓に染むかとうとましく　同
月の出や鮓馴れたりと船を呼ぶ　同
朱註腕疲れたり鮓の口切らん　波月
歸帆群るゝ湖望の夕鮓を切る　同
靈鐘に似し古色愛づ鮓の石　同
鼎瘤の趣題す鮓の石　同
鮓つけて書に凝る老師慰めつ　同
氣短の我に訓語や鮓の主　同
機夕日鮓の重石の茜かな　蝗郎
鮓壓して妻は機上に書屋閑　同
鮓の石捨てし夜藪の風雨かな　同
誰がつけて宵を留守なる鮓馴れし　同
召さるゝに後事を託す鮓のこと　玄波
鮓の品主の妻に及びけり　同
奥降りの出水鮓石にほとばしる　同

鮓桶を鼠遠巻いて夜明けたり　同
夜の蠅をわきて憎みぬ鮓の主　猨子
鮓味ふ暇なし遅参罰盃に　同
旅情すさめば背いなぐろ今日も鮓の饗　同
貰ひ鮓時分よからめと披露せり　快哉
鮓石を水色めけるまで磨ぎぬ　同
雅なる女筆の軸や鮓の宿　同
放膽を賦して僑居に鮓の石　翠郊
泥落し休む半日鮓壓せり　同
敎練の賜暇に鼓腹す鮓の宿　同
一議にも及ばぬを寄りて一夜鮓　雨郎
風白き夕べなり妻と鮓を壓す　同
津泊りを懇望に一夜鮓晩う　同
闊達の僕がもの云ひ鮓馴るゝ　柳子
快飲の咎なし鮓の猶もあり　同
大笑のあと次がず鮓を盡しけり　同
夏萩に雨名殘る宿鮓を切る　竹美
曉の雲廊に冷ゆ鮓なるゝ宿　同
鮓の石氷塊と冷えて清水澄む　同
牧場擴めを前祝など鮓壓しぬ　一樓
鮓宿は何信仰か軒の護符　同

一昔の知遇を泣けり鮓宿に　同
鮓壓すや忌明けの縁者滯留に　蔦雨樓
諸才の兒を揶揄も興や鮓の宿　同
尻圓に笑はれ事も鮓買ひて　百幽
先着の草鞋にやをかし鮓の石　同
舊主迎ふとて鮓桶の新しき　不見堂
近江路に鮓味も知りて歸郷せし　同
旅僧説く法因に鮓宿の雨となり　綠星子
鮓の魚冷藏の意に瀧の水ひけり　同
運筆の鮮かさ鮓に燈花落つ　三石
鮓の色も瀧沫に映えん宿の畫　同
諸士横議鐵砲鮓の馴れ過ぎし　紫明
あさましく鮓くひ去りし狗盗かな　同
鮓待つて陶牀に尻の冷ゆるかな　紫阜
滿座衆目鮓わかつ指に集れる　同
釣れず歸れば鮓石の徒然雨催しぬ　都月
せゝらぎに月落つ一夜鮓の宿
鮓桶を賣るほどに富のおところへし　牟妻男
奧まりて鮓の宿なる石置けり　蒼明
譴責の師に免れざるを鮓買うて　朱星
鮓漬す主公の意や既に明けし　梅賛

茂（前號追加）

瘴氣避くる架床も凋葉葉かな　木犀
舊歡を叙す圓卓も茂る苑　同
湯泊りに紅顆も探る茂かな　同
訪ひし園の茂り泰山木の雨　鬼見愁
蕃王の觀光を廟茂りけり　葛雨樓
風からむ音の高なる茂かな　無哲
茂り風鉢垂れ草の叉も咲いて　冬城
茂り家睡り虫など機臺に　同
爛れ葉に唾蟲や茂る井のほとり　柊城
茂り風袋ろうつしに飛ぶ粉や　青冬城

雜詠　蝶衣

鮓の宿の主婦が奇骨を知府愛づる
杜鮓江畔にゆるぐ宿なりし
頃者懈怠女に因す鮓の主
客遲し鮓の蓼皿に根おろさむ

後苑

涼の賦を題しにか墓の階を登る
二つ森の神相戀へば椿咲く

課題　秋近　七月十日〆切
　　　蟲　八月十日〆切
規定　▽淡路假屋在釜口高田蝶衣宛
　　　▽一人三十句限▽用紙は半紙

評論

佛國政界小觀

一

五月下旬、巴里飛行大椿事あり、陸相ベルトオ氏、墜落せる飛行機に敷かれ、手足處を異にして慘死し、首相モニ氏又重傷を免れざりき、

誰か料らん、是やがて佛國內閣の危機を醸生するに至らんとは、

然かも徐ろに沈思冥想すれば、是れ毫も不思議とするに足らざる也、何ぞや、陸相ベルトオ氏は一世の偉材にして、多士濟々たる佛國政界に於て優に群を拔く、現に政府が議會に於て味方とする社會急進黨員百四十五名は閣員中ベ氏にあらざれば、操縱することを得ざりし所也、又ショオレス氏幕下の合同社會黨が、政府に味方せる所以も、勞働問題に精通し、鐵道人夫の經濟的境遇改革に盡力せるベ氏の入閣に依りて、現內閣を信頼せるに外ならざる也、然るに此人長逝す、議會も亂脈となり、政府も不安となり、危機續生するもの、何ぞ怪むを須ゐん哉、

二

是に於て乎三鞭酒產區限定問題は時局を紛糾せしめたり、

三鞭酒產區問題とは何ぞ、之迄オーブ縣地方に在りては、不純良の三鞭酒を產し、以て佛國三鞭酒の價値を下落せしめたりき、依つて政府は三鞭酒の純良を期する爲め地方的に產區を限定し、オーブ縣の排斥を企てき、理義は頗る明瞭、一點の疑ひを容れざる也、然るに議會が之に乘じて、政府に肉薄したるは如何、其れ唯た乘じたる也、三鞭酒區其者が問題たるにあらずして、ベ氏逝去後、政府派の統一破れたる事が原因たりし也、

三

然るに三鞭酒區問題は、六月中旬無事終了したり、然かも政府は之を解決し得たるにあらず、唯衆恐に屈服し、之を放棄したるに過ぎざる也、左れど政府はかゝる屈服を敢てして迄、不安なる其位置を繼續せんとしたりし乎、吾人は玆に想ひ到つて轉た首相モニ氏の心事を憐察す、何ぞや、氏をして此屈服を忍んで迄、內閣の繼續に戀々たらしめたるは、摩洛哥の難問題あるに依れば也、

今春摩洛哥フエツ府附近の蠻族蜂起するや、都市陷落の危險は佛兵派遣を促すに至りたり、司令官モアニエ將軍は五月末、遂にフエツに達し、土蠻は漸く慴伏の態を示したり、然るに西班牙は俄然軍隊を摩洛哥ララヘに上陸せしめたり、是れ果して何の意ぞや、

蓋し摩洛哥はアルゼシラス協約に依りて、殆んど西佛兩國の監督下に置かれたり、西班牙の希望する所は、一歩を進めて摩洛哥分割を斷行するの爲に在り、而して此點に對して獨逸も西班牙の味方たり、何となれば分割の機來らんか、獨逸も一大分配を受けずして引退するものにあらざれば也、之れに反して佛國の希望は、摩洛哥に於て最大勢力を有する自己の地位を維持するに在り、而して英國も佛國の味方たるを辭せざるに似たり、

此間の樽俎折衝、何ぞ難事たらずとせん哉、左れど難事たる故を以て放棄すると、三鞭酒產區問題の如くんば、北阿弗利加に於ける佛國の地位は回復するを得ざるに至る可し、殊に斯る場合に於ける內閣の變動は、敵に乘ず可きの間隙を示すもの、モニ氏留職の眞意も略知る可きにあらざる乎、況んや今日に於て此の難問題に處するもの、摩洛哥通にして實際辣腕の聞えある現在の佛國の實際的外相デルカツセ氏（名義上の外相クリユツピー氏なれど）を措ひて人無きに於てをや、

四

觀來れば、佛國內閣變動遲延の事情瞭々として明也、同時に其結局更迭の外無き形勢に在ること亦明か也、然もべ氏一たび逝きて、內閣の根礎已に傾く、摩洛哥問題にして一段落を告げんか、恐らくは玆に新內閣の樹立を見ん、唯だ其の後繼者の何人なるかは少焉らく之をトするの愚をなさざらんとす、

英帝國會議

英國殖民地會議、五月末倫敦に開催せられ、議事を

繼續して六月中旬に及ぶ、收め得たる効果、其れ果して如何、

同會議は一八八七年に始まり、一八九七年、一九〇二年及び一九〇七年に開催せり、敢て本年に始まるにあらずと雖も、本年の會議は殊に重大の意義を有す、何ぞや、今回こそ殖民地が母國の外交に容喙する運動の第一歩なれば也、

果せるかな、同會議は英國の條約締結に對して殖民地が諮問を受く可きものたることを決議したり、吾人を以て之を觀る、最も重視す可き一大事件ならずんばあらず、

排日思想充滿せる濠洲、新西蘭をして日英同盟に容喙する權利を有せしめんか、兩國親近の現態果して永續し得可き乎、固より英本國の人民は同盟を熱望し、其印度防備、極東發展の策は同盟の繼續を要求するを以て、せめて三年後の同條約再締結の場合迄には、何等の變動を見ずとするも、十年二十年後は至らば果して如何、思ふて玆に至る、我國民も獨り日英同盟を恃みて、噴火山上に惰眠を貪る可きにあらざる也、

今猶斯くの如き乎

英倫(イングランド)及びウェルスの人口は去る十年間に於て大增加を見たり、然かも愛蘭に至ては減少の勢依然たり、是果して何事を意味するものぞや、

試みに六月發表せられたる英國人口統計を檢せんか、一九〇一年に於て三千二百五十二萬七千八百四十三を數へたるに、本年に於ては三千六百〇七萬五千二百六十九を算す、即ち三百五十萬の增加を示せる也、然るに愛蘭の人口は同期間に於て四百四十五萬八千七百七十五より四百三十八萬一千九百五十一に減少したり、而して過去五十年間に於ける愛蘭人口減退の大勢を示さんか、

一八六一	五、七九八、九六七
一八七一	五、四一二、三七七
一八八一	五、一七四、八三六
一八九一	四、七〇四、七五〇
一九〇一	四、四五八、七七五
一九一一	四、三八一、九五一

吁嗟是果して何事をか意味するものぞ、言ふ迄も無く英國貴族が愛蘭の大地主として跋扈し、愛蘭人をして止む無く故郷を捨てしめたるの明證ならん、然かも思

はざりき、今日猶斯くの如き事態が過去の歴史に葬られずして、依然繼續しつゝあらんとは、是に至て誰か亦愛蘭自治運動の由來する所を疑ふものぞ。

土帝マセドニア巡幸

土耳其皇帝、六月中旬を以て駕をマセドニアに巡らす、蓋しアルバニヤ人以下衆民を懐柔せんと欲するなり、

吾人は之を見て、帝威失墜、却て衆人の侮蔑を誘ふ所以なるを惜まずんばあらず、思ふに土帝が高壓的政策の恃み難きを悟りたるは善し、唯時期已に遲かりき、吁嗟賢なる宰相ハッキ、パーシャは何が故に墺國の勸告、露國の抗議末だならざりし二月前に於て之を斷行せざりしや、

清國總理大臣

清國總理大臣慶親王、就職を固辭す、知らず慶邸は如何なる人ぞや、タイムス特派員モリソン氏は曰く、親王は狡猾にして詭計に富む、然かも決斷力に乏し、腐敗的政治家にして錢を愛すること甚しと、此言を聽くもの、誰か嫌厭の念を催さざる可き、

左れど親王は大政治家にあらざれども、方今清國の外政に經驗を有すること、何人か能く其右に出てん、其決斷力に乏しきが如き、詭計に富むが如き、寧ろ親王の罪にあらずして孱弱なる清國の罪にあらざる乎、遮莫、吾人は其辭職に對して、贊成の聲を惜まず、他無し、皇族を首相とするは、立憲政治、責任內閣の義に協はざるものあるを以て也、

秘魯の總選擧

五月末秘魯に總選擧あり、里馬市有權者一萬人中投票するもの僅に五百名を出てず之にても猶民主政治と言ふを得可き乎、而して怨むらくは、南米諸共和國の選擧は滔々此類なることを、

膃肭獸會議行惱

華盛頓膃肭獸會議行惱む、說くもの曰く、是日本が太平洋膃肭獸獵獲中止に對する賠償として七十五萬金を要求し、更に將來陸獵の純利益三分の一を日本に與へんことを求めたるに、英米は同意せるも、露國の反對ありたるを以て也と、

帝國の要求は止み難き所のみ、然らずんば、五十隻の漁船、數千の漁夫が急に業務を失つて、饑餓に迫るの外無きを奈何せん、又海獵を廢止して陸獵をのみ默可すとせば、日英に至ては獨り偏頗の不利を蒙るの外無けん、海獵國たる陸獵國たる米露は欣ばんも、從つて陸獵が內國的問題たる關係より之を禁止すること困難なりとせば、利得の分配を求むるも亦止むを得ざる所のみ、

此要求容れられざらんか、我委員（內田大使道家水產局長）は斷乎袖を奮つて以て去るべき也、

（懷砂隱客）



金棒秘記

饒舌子

◎國木田收二氏（獨步氏の令弟）が「國民新聞」の記者をして居た頃、犬養木堂氏を訪うて、何か問題を出して意見を求めると、木堂氏それには答へず、盛んに「國民新聞」の攻擊を初めた。で國木田氏はいろ〳〵辯解をして、「あなたがさういふ風に評するは決して公平の御意見とは思はれない。畢竟あなたが國民新聞を平常蛇蝎視して居らるゝからでせう」といふと、木堂氏平然として「ナアニ、僕が國民新聞なんかを蛇蝎視するもんかい、蚯蚓位にしか思うてゐないよ」といふ。國木氏もムッとなつて「あなたのやうに感情に走つて毒言を逞ゝする人と長く話をするのは、私の屑しとせざる所ですから、失禮いたします」というて、席を起つと木堂氏尙更ら冷然として「行くなら默つて行つたらよからう、一々斷るに及ばないぢやないか」といふ。獨步氏の皮肉を聞き馴れて居る國木田

氏も之には驚いたといつて話して居る。

◎島崎藤村氏の机の上に昨年頃から何時行つて見ても、必らず英譯のボードレルの詩集が載つて居る。そして「此詩人の歌ほど今の自分の心持とシックリ合ふものは外にない」というて居る。其詩の特徴はと訊くと「文明の極致は頽廢(デッダン)にある。善美は總て人巧的のものだ。といふやうな考の人で、物の頽廢し行くのを樂んで見て居るといふやうな所がある。そして女の顔色を形容するにも、今迄の人は青白いとか、赤とか極めて單純に見た。が、ボードレルは青くして紅いといふやうな所を見て居る。現に詩句の中に pale and rose などいふ形容詞がある。そして此青くして紅いやうな女は我々が時々花柳界の女などに見る色だ」と語られた。

◎幸田露伴氏は嘗て上野の音樂學校から頼まれて作歌をしたが、その中に「汝等」をいふ字を用ゐて之れに「ナンタチ」といふ振假名(ルビー)をつけてやつた。處が音樂學校では、之れは「ナレダチ」の誤りだらうといふので、「ナレダチ」とした。處が「汝等」を「ナンタチ」と讀ませる事は選叙などに例のあることなので、露伴氏は固より「ナンタチ」でなければならぬからさうしたのだ。で露伴氏は大いに憤つて、「そんな無學な手合の歌ふ歌は作ることを御免蒙る」というて、それを直ちに撤回して了つた。

◎先頃の帝劇の「ハムレット劇」で土肥春曙氏と東儀鐵笛氏とは各々千圓ヅヽ貰ひ、ポローニアスを勤めた人は五百圓貰ひ、其他の人は皆それぞれ包金を貰うた。今度大阪の帝劇でやつても矢張り其格で行くだらう。之を聞いた内田魯庵氏は「東儀君も土肥君も一躍して千兩役者になつた。これでは俳優の鑑札も餘程上等の所を取らねばならぬ譯だが、警視廳のお役人もまだお氣が附かれまい」

◎「ハムレット劇」に招待を受けた連中が、幕の間(あひま)に廊下に出會つて「ヤ、どうです」と訊き合ふとまさか「詰らんもんですな」ともいはれず「どうも分らんもんですな」といつてたさうな。

◎或る文壇の大家の話に「僕が帝劇にハムレットを觀に行く三日前に明治座に行つたが、明治座は午後の一時の開場だのに、一寸外を見るともう日が暮れて居る。ホ、こんなになるのかなと日の短いのに驚かれた。處が帝劇は四時の開場であつたが、イクラ外を見てもなかなか日が暮れない。マダ日が暮れないのかと頻りに日の長いのに驚かれた」と。

◎「これから戯曲を作らうとする人は沙翁を讀む必要があるでせうか」といふ問を出したら「ありますまい」と森鷗外氏も内田魯庵氏も島崎藤村氏も三人同様に答へられた。

◎「どうも沙翁といふものは昔から面白いと思つた事がない。今より二十年も前に頻りに坪内君に勸められて、先づタイモンから讀んで見ろといはれて讀んで見たが、成程タイモン丈けは非常に面白かつた。が外のものは一向面白くない。そして可笑しい事には僕が唯一の面白いものとして居るタイモンは多分沙翁の作でなからうといふ事になつて居る。坪内君などにいはせるとタイモンは理想が露骨に出て居るので、誰にでも面白いのだといふが、どうも私には沙翁のエライ所が分らない」とは露伴氏の言。

◎「沙翁には随分缺がある。拵へ物だと感ずる所がドッサリある。けれども一種のドリーミーな所やポエチカルな所に矢張りエライと思はるゝ處もある。私は悲劇よりも喜劇などによいものがあり、殊に眞夏の夜の夢などが沙翁の傑作ではないかと思ひます」とは藤村氏の言。

◎「沙翁を觀るにはテーヌが英文學史で評したやうに、あの時代には小沙翁といふやうなものがドッサリあつて、沙翁はそれを大成して代表したものだ、恰度少し低い位の塔が澤山並んで、それを土臺にして沙翁といふ大きな塔が出來て居るといふ風に觀るのが面白いと思ふ」とは鷗外氏の言。

◎要するに「イプセンは讀まなくてはならぬが沙翁は強いて讀まなくてもよい」といふのが、今の文壇の大家の一致する說らしい。

新刊批評

▲俳諧二百年史（元祿の卷）

齋藤渓舟著
隆文館發行

本書の特色は材料を廣く拾集した事と、作家が一人々々に委しい評傳を附した事とに在る、貞德風、壇林風を排して如何にして芭蕉の正風が作れたか、それが其門弟子に到り如何に個性に影響せられて各株の發達變化を見たか、それ等の事情、關係が仔細に了知される、極めて勞多き著述と思ふ（定價七拾五錢）

▲工業政策（上卷）

關一著
寶文館藏版

社會政策の事は下卷に讓りて上卷には專ら狹義の工業政策が說かれて居る。初に工業の意義、種類、及び技術の發展等を說き、更に工業經營制度の發展、工業政策の變遷等を歷史的に見て來、それより產業自由の制度に依る工業の發展、企業者聯合及び企業合同、小經營の存續及び其保護政策、工業者の組合工業所有權の保護、工業資本の供給及び其機關等目下甚だ注目すべき好題目に就いて周到の觀察解釋を與へられたもの、好著たるを疑はぬ、（定價金二圓參拾錢）

▲工業政策（上卷）

津村秀松著
寶文館發行

神戶の高商教授たる氏が其日常講義する所のものを竝に重にして公にしたものが此著である、重に外國貿易に關する政策を說き、マーカンチリズムの政策、發達、衰滅より自由貿易主義の發生、其他、保護貿易主義の勃興、其時代等を逐次に叙說し來り、それより常に問題となり居り、自由、保護兩主義の對較論證を試み最後に農商工立國論に說き及ぼし、三業併立主義は理想なれども問題に非ずとして重を商工立國に歸してある、立論精明。讀んで益を得る事甚だ多い、前の關氏の工業政策と並べて必讀すべき好著である。（定價金貳圓參拾錢）

▲對外商工策

寺島成信著
寶文館發行

大阪朝日の壹萬紀念號の募集論文に應じて合格したもの、それは添田、中橋、田島の三博士の審査の結果によつたものだから、是丈でも其內容の價値如何は知られだらう、章を對外商工業の現狀、將來に對する方策、及び結論とに分ち能くその實際方面に着眼して議を進め、着實なる見解を下す處に特調を認める。（定價金七拾錢）

▲黑田如水

福本日南著
東亞堂書房發行

太閤に竹中半兵衞と黑田官兵衞の二兵衞あり、能く其帷幄の功を成した事は人皆知る處だが、其器の大小に至つては猶ほ多く疑はるゝ處てある、が著者は斷じて言ふ、「彼の意氣、畫策、言動宛として太閤の小摸型にあらざる無し、若し其器度を現今の角觝に見なば、太閤は常陸、孝高は小常陸に幾からん乎」と、そして其能く太閤たる能はざる所以を、「唯彼れ不幸にして身病羸、又不幸にして西陲に僻在し、時運の際會に後れたり云々」に歸して居る。筆路縱横にして氣に充ち、能く其見る事此の如き人物の風神を紙上に躍出させて居る、(金壹圓五拾錢)

▲織田信長

隆文堂發行

黑板、久米、田中等の專門歷史學の大家より始めて其他二十氏の信長に對する評論を集めたもの、本誌の現代人物評を是は古人で行つて居るといふもの、念入れて見るべき精到のもののないのは免れぬが、各人各樣の觀察中面白きものも少くない。(正價金壹圓)

▲文字禪

加藤咄堂著
東亞堂發兌

禪味は秋日秋の味と信ずるが、其禪味に遊ぶ者の目で見た此華嚴世界の文藝觀、亦自ら三伏の書窓に早くも秋風を吹き送る心地がする。涼篭の上に此文字禪の一書は相應しかるべきものと思ふ。(正價金五拾錢)

▲日本大古史

木村鷹太郎著
博文館發行

右の書名には何冠するに「世界的研究に基ける」の九字を以てする、謂ふ所の世界的研究は那邊に迄行き屆いて居るか、日本人を以て希臘羅典系とし、太古に在つては小亞細亞のアーメニヤに起り、希臘、埃太等に國したものとし、古事記一卷を以て當時のその歷史とするに至つては壯は即ち壯なりと雖も、何人も狐に魅まれる感があらう、惑は惑でそれは如何でも宜いが、然し正確に其然るを信ぜしめるには西洋古史の凡てと渉りを着け、其共通點を發見し其矛盾する所は把羅摘抉妄を排せなければならぬ、又年代の突き合せの如きも正確に運ばれなくてはならぬ、が著者は之を以て太古草昧の世の記錄の不整頓に歸して居て見れば、今分何と言つて宜しいか知らぬ、大學の諸教授を低能呼はり迄して居るが、吾人は彌か呼ぶ前に今少し立ち入つた研究が發表されぬ限は誰か烏の雌雄を知らんやだと思ふ。が單に想像の威力を示した本としただけでも閑な夏日のキル、タイムには面白からうと思ふ。(定價金貳圓)

▲新人國記

黑頭巾著
敬文館發行

新人國記の人國記に比して幾何の相違ありや、人國記を讀んで見ぬ我等には、只芳川越山に越路太夫などいふ名がそれにはなかつたろうと確實に想ふ位の處て、觀察、用筆の勝劣等に及んでは薩張り分らぬから言へぬ。それ故我等には「新」の一字は無からずもがな又無くもがなで、如何でも宜いが、併し此著に於て、妙に讀む身も心も引き釣られて卷を終ふるを忘れしめられる所以を尋ねると、人と國、即ち、自然と人文とが妙に匂ひ合ひ映りかはして常に一種の氣韻たる雰圍氣を醸し、我等を包む所に在る、人は人。國は國と、丸て西壁造隙と盆栽世界宜しくの關係にならぬ處に在る。即ちアトモスフエアが能く出て、自然が主で人が其中に溶け込むか、人が主で自然が霧の如くに立ち罩むるのか分らぬ心地がする。アトモスフエアを寫す、といふと、小説でいへば自然主義の力術を入れる描寫の一樣式である。といふと「新」の一字も無理からぬ。元の人國

記には此新文藝の用意と技巧は覺束なかつたろうと思ふ。漢文の熟語のザラに並ぶ氏　文體に「新」の字を許したら怪しく思ふもの有ろか知らぬが、併し其洋趣味の簡勁を愛する氏の用語としては已むを得ぬ。が日本言葉の會の樣なものが今少し氣宇を大にして、日本語で記されたる凡ての漢語を等しく日本語として保存するを勉め、辭典でも編むならば、氏の用語は盡くそれに收まるか知れぬ。と思ふだけそれ丈通俗のものである。すれば新を許すに於て何等の疚しきを感ぜぬ。殊に氣の利いた觀察、器用な筆遊び、洒趣は人を洒殺し、艶趣は人を艶殺す。附錄の伊勢風聞記、江川太郎左衛門の反射爐、前者は中島健作列の筆、後者は著者の筆だが、又多趣にして有用の文字だ、寫眞版の多いのは更に錦上の花である。夏日消暑の好讀物だ。（金貳圓貳拾錢）

▲樂天囚人

堺利彦著
丙午出版社發行

前後三回鐵窓に繋がれた堺氏の其當時の有樣やら感觸やらを書き集めたもの。（定價金六拾錢）

▲基督教と國家及道德

富永德磨著
警醒社發行

論じて基督教と國家の間に何等の撞着矛盾のあらぬ所以に說き及んだもの、神の觀念を說き、其人格を說く所には一寸苦し相な論理を見るを遺憾とする。尙ほ細評は精讀の上にしやう。（定價金九拾五錢）

▲陸奥宗光

伊藤痴遊著
東亞堂發行

剃刀大臣の陸奥宗光一代記を多趣味の才辯で語るもの、面白からぬ筈はなし。（定價金九拾五錢）

▲東圃遺稿（第一卷）

藤岡東圃著
大倉書店發行

國學史、日本評論史。國文學と風俗。の三篇を收め初に東圃氏の小傳、年譜等を添え、尙は其筆蹟をも載せてある。三篇共に帝國大學に於ける氏の講義の草稿若くはその筆記によつて成つたもの。斯學の泰斗とし造詣の深きを以て推されて居た氏の遺著とて甚だ有益のものだ。（定價金壹圓五拾錢）

▲南北四萬哩

大庭柯公著
政教社發行

東西としては東經百四十度に近き東京より西經六十二度半の亞爾然丁のバイヤブランカ、南北としては、北緯六十度の彼得堡より南緯三十九度のバイヤ、ブランカ迄、即ち南北よりも寧ろ東西の旅行だが、それは兎も角も水行二萬哩、陸行二萬哩、合せて四萬哩の樣々の風土、光景、人情を一管の雄勁なる筆端に託して描寫したるもの、讀んで胸懷を爽ならしむる。（定價金壹圓）

▲文章軌範評注

三島中洲著
寶文館發行

著者は陽明學派にして詩人なるも、詩を以ては顯れず、陽明學を以ても推されず、其最も顯れ且つ推さるゝものは文章であらうと思ふ。此人の此著、蓋し人と著と相得たものである。篇頭を二欄に分ち、上欄には略註、下欄に評語、本文には文法の說明。其終には古人の批評といふ體裁である。（定價金八拾錢）

▲王陽明

亘理章三郎著
丙午出版社發行

陽明の人格を主題とし其實歷を叙して、之に配するに其學說を以てし

たもの、完き人としての陽明を知るには良著である。（定價金壹圓五十錢）

▲續名將言行錄

岡谷繁實著
文成社發行

德川家綱以下德川時代の名君賢相良將四十名の言行を記したるものにして、引用書目は皆典據あるものなれば、充分の信用を以て讀むことを得べし。（定價金貳圓）

▲西洋史新話（第一册）

箕作元八著
博文館發行

西洋史のオーソリチーたる箕作博士が、少年子女に面白く西洋史を讀ましめんとの趣意より著はされたるものにして、通俗なる書き方の中に、豐富なる内容を有せしめたるは、實に博士の手腕の大なるを見るに足る。第一冊は「ギリシヤの擾亂」にて當時の世態を眼のあたり見るの心地す。（定價九拾五錢）

▲有美全集（春夏の卷）

青柳有美著
興文館發行

有美氏の畫著を集めたるものにして、著者獨得の奇警なる觀察覺えず快哉を叫ばしむるもの少からず。時に一行か二行の短文に勝れたるもの多し。（定價八拾錢）

▲價値論

河上、河田學士譯述
寶文館發行

和蘭の政治家にして經濟學者たるピールソンの名著の緒論及び第一篇の大要を解說したるもの也。理論と實際とを調和せるは本書の特徴にして、學者の一讀に値す。（定價壹圓五拾錢）

▲財務論

田中穂積著
寶文館發行

經濟全著の第五卷として發行せられたるものにして主として豫算に關して研究せるもの也。（定價金七拾錢）

▲和譯蒙求

源光行譯著
文成社發行

蒙求は古來我國にも最も廣く讀まれたるものなるが此篇は七百年前源光行の和譯したるものを飜刻したるもの也。（定價九拾錢）

▲古今名媛書簡

紫田春風編
啓成社發行

古今の才媛の書簡百數十篇を收めたり。文章上、思想上若き女子の模範となること多し。（定價八拾錢）

▲女の心

高島平三郎著
洛陽堂發行

女の心を學理的に研究し、且つ社會の實際と照し合せて論じたり。（定價四拾八錢）

▲國譯日本政記

黒澤、雜賀兩氏譯
啓成社發行

日本政記は讀んで面白き書にあらず。面白きことは固より「日本外史」などに勝等を讓る。然れども我建國以來の簡略なる政史として、又山陽の功沒すべからざるものあり。只漢文の和譯は讀みて張合なき心地す、福本日南氏の序文は一讀に値す。（定價八十錢）

▲日本美術年鑑

畫報社發行

明治四十三年度美術界一年史、美術展覽會、官職員、美術審査委員會、

教育機關、美術館、古社寺保存及國寶、團體、美術界の人物、美術に關する言論、美術に關する出版物統計等十二章記錄を輯めてある。便利な書物である。(金壹圓八拾錢)

▲愛の研究　窪田長陵著　良心堂發行

愛といふものを中にして、端を宗教と修養とに結びつけて説いてある。一貫したクリスト教的精神の氣分が、終始ある柔かい慈味を與へる。研究ならぬ詩文としても、滿足する青年は尠くないと思ふ。(金四十五錢)

▲日蓮上人傳　蜷川龍夫著　興文館發行

日本が生んだ宗教的偉人の最大とすべき日蓮が宗教改革の覇業とその痛快なる奮闘的生涯を流暢潤達な自信ある文章で綴つてある。餘錄日蓮宗の發展、分派の起原、法脈相承は、傳記に附して一讀するに好都合なるものであらう。(金八拾錢)

▲微光　正宗白鳥著　籾山書店發行　(金八十錢)

「微光」「呪」「徒勞」の三編を集めてある。再讀の上批評をする。何れも著者が作中の精粹である事は言ふを俟たない。和紙の艶麗な高雅な装禎がしてある。(金一圓)

▲頭腦明晰法百話　堀田相爾著　啓成社發行

「精神科學者として」「心理的説明を主とする」のが著者の抱負である。青年と神經衰弱、問題は多くそれにかゝつてゐる。(金四十錢)

▲春光　好文會編　明治書院發行

好文會同人の文集第一編である。池邊、島野、金子、武島、丸山、阪、今井、鹽井氏等の國文學者が春光の閑雅な歌文のすさみである。(金四拾錢)

▲落暉　長司春湖著　川瀨書店發行

詩歌に訣れんとする著者の紀念、短歌、三百餘首を收め、與謝野寛氏の序文が添えてある。

○殘された江戸(柴田流星作定價金七拾錢)　洛陽堂發行
○新譯十八史略(久保天隨著定價八拾錢)　至誠堂發行

▲日本文藝叢書

○東海道中膝栗毛後篇(幸田露伴校訂定價並製金貳拾錢上製卅錢)　東亞堂書房發行
○通俗三國史第三、第四(幸田露伴校訂定價並製金廿錢上製金參拾錢)同
○新訂太平記第二、第三(幸田露伴校訂定價並製金廿錢上製卅錢)同
○其磧傑作集(幸田露伴校訂定價金廿錢)同
○弓張月中編(幸田露伴校訂定價金貳拾錢)同
○俠客傳上卷(仝上)

▲學生文庫

○南朝史傳(大町桂月校訂定價參拾錢至誠堂發行)
○日本外史(上)(仝上)
○益軒十訓(上)(仝上)

日本文藝叢書、學生文庫共に極めて便利にして讀書子を益すること多し。

(挿付の一)

○壹冊定價　金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（海外郵税拾錢但清國を除く）

冊數／區別	内國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢
以上郵税共		

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料壹錢を加へらるべし然らざれば御送金の内より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵劵代用は必ず劵割増に送らるべし
一前金切の節は帶封に朱書いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十四年六月廿八日印刷納本
明治四十四年七月一日發行

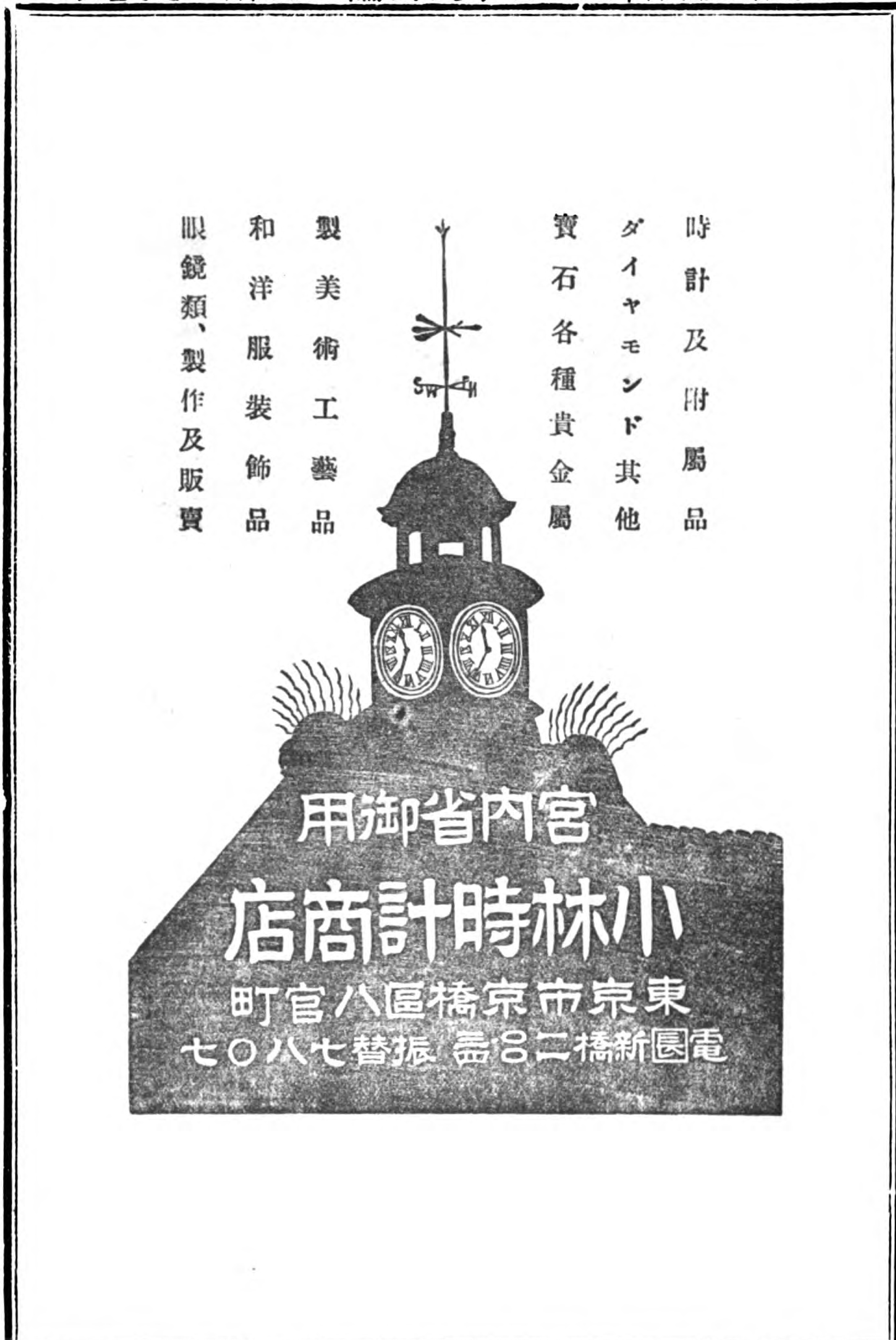
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一九　電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

氣のきいた旅行用具

山愈々清く、海益々緑りなる今日此の頃海水浴に溫泉に暑を避けさせ給ふ御方の日に〱多きを加ふるなるべし御旅行の御支度は如何に。

三越には御旅行に必要なる品を殘らず陳列仕り居候間、一度三越へ御出で被下候はゞすべての品々は直ちに御滿足に御用相辨じ申すべく、是非とも御光來の程奉願上候。

東京駿河町

三越呉服店

明治三十二年十二月二十九日第三種郵便物認可